

史跡 常呂 遺跡

—史跡等活用特別事業に係る発掘調査報告書—

1992年度

北海道常呂町教育委員会

史跡 常呂 遺跡

—史跡等活用特別事業に係る発掘調査報告書—

1992年度

北海道常呂町教育委員会



1号竖穴発掘調査状況



1号竖穴土器出土状況



6号竖穴



埋 壺

史跡 常呂 遺跡

—史跡等活用特別事業に係る発掘調査報告書—

1992年度

北海道常呂町教育委員会



1号竖穴発掘調査状況



1号竖穴土器出土状況



6号竖穴



埋 甕

序

「遺跡の町ところ」の顔として多くの町民、観光客が遺跡とのふれあいの中で、古代の生活・文化を学び、また、体験学習を進める中で現代をみつめなおす場として、平成3年度より史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）を実施しています。この度の発掘調査は本事業の主眼である縄文時代、続縄文時代、擦文時代の住居の復元をはかり、各時代の村として整備するための事前調査として行われました。住居跡は時代によって平面形が多角形、楕円形、方形と変化するとのことであり、特色ある住居復元・整備がなされることと確信するしだいです。

サロマ湖畔にあるカシワ、ナラの木々に囲まれたこの地で、古代人はどのように暮らしていたのだろうか。人々を太古へと誘う復元住居建設の基礎となった発掘調査の報告が今後さらに活用されることを願うものである。

平成5年3月

北海道常呂町長 齊藤 秀信

例 言

1. 本書は史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）に係る史跡常呂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本史跡は北海道常呂郡常呂町字栄浦347番地にある。
3. 発掘調査は、国及び北海道から補助を受けて常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 発掘調査は平成4年4月15日～6月30日に実施した。
5. 本書の執筆は武田修による。

6. 発掘調査及び整理作業従事者

調査担当者 武田 修

調査補助員 宮崎慎司

事 務 木幡清次、田淵由美子

作 業 員 小野寺金夫、小野隆三、栗原アサ子、室田恵美、大谷俊子、矢萩友子
工藤清、長谷川富次郎、松田ハツエ、杉田弘子、武田美津子、熊谷弘子

整 理 員 坂下美津子、佐々木由美子、安田彩、谷立美

7. 発掘調査及び整理作業には下記の方々の指導、助言を得た。記して感謝の意を表するしだいで。

文化庁・田中哲雄、奈良国立文化財研究所・浅川滋男、東京大学文学部・宇田川洋、大貫静夫、北海道教育委員会・大沼忠春、木村尚俊、種市幸生、紋別市教育委員会・佐藤和利、標津町教育委員会・梶田光明、新冠町教育委員会・乾芳弘、(財)北海道埋蔵文化財センター・熊谷仁

目 次

序		i
例 言		ii
第 I 章 調査の経過		1
第 II 章 遺構各節		4
第一節	1号竪穴	4
第二節	2号竪穴	16
第三節	3号竪穴	22
第四節	4号竪穴	29
第五節	5号竪穴	35
第六節	溝状遺構	38
第七節	6号竪穴	40
第八節	7号竪穴	48
第九節	8号竪穴	56
第十節	9号竪穴	66
第十一節	10号竪穴	70
第十二節	11号竪穴	74
第十三節	12号竪穴	78
第十四節	埋 壘	82
第 III 章 ま と め		84

図版目次

P 1. I	1. 1号竖穴 2. 2号竖穴	P 1. XII	1. 1号埋土出土土器 2. 1号埋土出土土器
P 1. II	1. 3号竖穴 2. 3号竖穴遺物出土状況		3. 1号埋土出土土器 4. 2号床面出土土器
P 1. III	1. 4号竖穴 2. 4号竖穴排水溝	P 1. XIII	1. 2号埋土出土土器 2. 3号床面出土土器
P 1. IV	1. 5号竖穴 2. 溝状遺構 2		3. 3号床面出土土器 4. 3号埋土出土土器
P 1. V	1. 6号竖穴 2. 7号竖穴	P 1. XIV	1. 3号床面出土土器 2. 3号埋土出土土器
P 1. VI	1. 発掘区土器出土状況 2. 8号竖穴		3. 3号埋土出土土器 4. 3号埋土出土土器
P 1. VII	1. 9号竖穴 2. 10号竖穴		5. 3号埋土出土土器
P 1. VIII	1. 12号竖穴 2. 埋 甕	P 1. XV	1. 3号埋土出土土器 2. 3号埋土出土土器
P 1. IX	1. 1号床面出土土器 2. 1号床面出土土器 3. 1号床面出土土器		3. 4号床面出土土器 4. 4号埋土出土土器
P 1. X	1. 1号埋土出土土器 2. 1号床面出土土器 3. 1号(カマド内)出土土器 4. 1号床面出土土器 5. 1号埋土出土土器	P 1. XVI	1. 5号床面出土土器 2. 5号埋土出土土器 3. 6号埋土出土土器 4. 6号床面出土土器 5. 6号埋土出土土器
P 1. XI	1. 1号埋土出土土器 2. 1号埋土出土土器 3. 1号埋土出土土器 4. 1号埋土出土土器 5. 1号埋土出土土器	P 1. XVII	1. 7号埋土出土土器 2. 7号埋土出土土器 3. 7号床面出土土器 4. 7号埋土出土土器 5. 8号埋土出土土器
		P 1. XVIII	1. 7号発掘区出土土器 2. 埋 甕

挿図目次

Fig. 1	調査地周辺の地形図	3
Fig. 2	1号竪穴平面図	5
Fig. 3	1号竪穴床面、埋土出土土器	7
Fig. 4	1号竪穴床面、埋土出土土器	8
Fig. 5	1号竪穴埋土出土土器	9
Fig. 6	1号竪穴埋土出土土器	10
Fig. 7	1号竪穴埋土出土土器	11
Fig. 8	1号竪穴床面、埋土出土土器	12
Fig. 9	1号竪穴埋土、2号竪穴埋土出土土器	13
Fig.10	2号竪穴平面図	17
Fig.11	2号竪穴床面、埋土出土土器	18
Fig.12	2号竪穴埋土出土土器	19
Fig.13	2号竪穴埋土出土土器	20
Fig.14	3号竪穴床面、埋土出土土器	23
Fig.15	3号竪穴平面図	24
Fig.16	3号竪穴埋土出土土器	25
Fig.17	3号竪穴埋土出土土器	26
Fig.18	3号竪穴埋土出土土器	27
Fig.19	4号竪穴平面図	30
Fig.20	4号竪穴床面、埋土出土土器	31
Fig.21	4号竪穴埋土出土土器	32
Fig.22	4号竪穴床面、埋土、5号竪穴埋土出土土器	33
Fig.23	5号竪穴床面、埋土出土土器	36
Fig.24	5号竪穴平面図	37
Fig.25	チャンシ状溝遺構土層図	38
Fig.26	チャンシ状溝遺構周辺の地形図	39
Fig.27	6号竪穴平面図	41
Fig.28	6号竪穴床面出土土器	42
Fig.29	6号竪穴埋土出土土器	43

第 I 章 調査の経過

1

一般に史跡常呂遺跡と称している地域は、常呂川河口からオホーツク海沿岸に沿って東西に伸びる砂丘上の竪穴群を指している。いわゆる栄浦第一遺跡（遺跡登載番号 I-16-77）と栄浦第二遺跡（登載番号 I-16-17）及び常呂竪穴群（遺跡登載番号 I-16-26）の3遺跡がこれにあたり、昭和49年3月12日に史跡指定を受けている。その後、昭和62年8月21日に栄浦第一遺跡の隣接地の追加指定を受けている。

この度発掘調査を実施した地域は上記の3遺跡からやや離れた岐阜台地の最西端に位置している（Fig. 1）。この遺跡は1969年に東京大学文学部による一般分布調査により発見され、ST-06遺跡（I-16-82）、ST-07遺跡（I-16-83）、ST-08遺跡（遺跡登載番号 I-16-84）、ST-09遺跡（遺跡登載番号 I-16-85）、ST-10遺跡（I-16-86）として周知されている。ST-08遺跡は標高15~19mの高位から北側に向かう緩斜面の竪穴と北側から入り込む深い沢の台地端部の竪穴が主体である。この遺跡の竪穴の窪みは比較的浅くみかけ上は円形、楕円形を呈している。これに対してST-09遺跡の竪穴群は西側から入り込む小沢の両側に存在している。竪穴は標高8~11m付近に集中し、みかけ上は方形を呈している。地表面から確認されるみかけ上の窪みの形態によってその竪穴の時期が知り得ることは、東京大学文学部の栄浦第二遺跡の調査によって明らかにされている。

それによると「とくに栄浦第二遺跡の4号から13号住居後の発掘は、地形測量の成果とも関連して、現在凹みとなって確認できる平面形からその形成年代を知る手掛かりを得ることができたという。つまり隅丸方形に見えるものは擦文文化期、五角形~六角形はオホーツク文化期、円形は続縄文期、円形で舌状部のあるものは縄文晩期~続縄文期に属することが判明したのである。」と報告されている。この報告に照らし合わせるとST-08遺跡は続縄文、縄文文化期、ST-09遺跡は擦文文化期を主体とした集落跡と考えられる。集落の立地をみるとST-08遺跡とST-09遺跡は同一台地上にありながら明らかに住居の占地を異にしている。

栄浦第一遺跡、同第二遺跡、常呂竪穴群は擦文文化期の竪穴を主体に各時期の竪穴が混在しているのに対し、ライトコロ川を挟んだ対岸の岐阜台地の各遺跡の小沢周辺には本遺跡を含め40~50軒規模の集落が残されている。直線距離にして約400~500m離れているのにすぎない栄浦第二遺跡と本遺跡を含めた岐阜台地の遺跡でなぜこの様な変化があるのか、集落のあり方を探る上で重要な問題を有している。ST-08遺跡とST-09遺跡はこの問題を解決するために重要な遺跡と認識され平成2年4月27日に史跡常呂遺跡として追加指定を受けた。

常呂町では史跡指定を受けて以来、文化財保護の立場から土地の買上げ等を実施してきた。その後、昭和61年から62年に「史跡常呂遺跡保存管理計画」を策定し、長期的な展望にたった

史跡の管理・活用の基本構想、実施方針を明らかにした。平成3年には「史跡常呂遺跡整備基本計画」を策定し本格的に史跡常呂遺跡整備のための準備に入った。基本計画ではST-08、ST-09遺跡の周辺を集中的に整備する方向で検討された。特に各時代の集落が占地を異にしている点が遺跡の特色であるところから、それぞれの時代の村作りを主眼においている。時を同じくして文化庁では史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）を開始しており、常呂町は同事業の採択を受けて平成3年度より事業に着手した。

2

擦文期の竪穴は方形の窪みを呈しており、この時期のものであることは確認できるが、円形、楕円形については縄文期か続縄文期のものか判断できない。このためその時期を明確にするための確認調査を平成3年11月9日～16日に実施した。確認調査は竪穴の窪地の中央部に幅1mのトレンチを設定し行った。確認調査を行った竪穴は台地の最西端にある9軒の竪穴のうち5軒。東側にある小沢周辺の竪穴11軒のうち5軒。最西端部の9軒の竪穴と東の小沢のほぼ中間の比較的平坦な部分にある竪穴14軒のうち4軒。及び標高16～18mの高位にある30軒の竪穴のうち4軒である。この結果、最西端部の竪穴で時期が確認されたのは続縄文期の6号、7号、8号の3軒である（8号は平成4年の発掘調査で縄文中期北筒式と確認する）。標高16～18mの位置にある竪穴群では縄文2軒、続縄文2軒が確認された。この際に本報告で紹介する縄文晩期の埋甕を検出した。他の区域の竪穴については縄文期のものと考えられる。また、4号、5号の西側は地形的にチャシ形態である丘先式を呈し、地表面から弧状の溝が確認されている。このためトレンチを1本設定し、遺構・遺物の確認を行なった。

3

発掘調査は確認調査の結果を踏まえて、平成4年4月15日～6月30日に実施した。最初は時期の明確な擦文期の竪穴から着手した。調査する竪穴は「史跡常呂遺跡整備基本計画」に基づき実施した。まず、擦文期の集落の中で最大規模を持ち復元予定の1号竪穴と近接する2号竪穴。次に遺構露出展示予定の3号竪穴。復元予定の4号、5号竪穴を調査した。続縄文期では復元予定の6号、7号。遺構露出展示予定の8号を調査した。縄文期では復元予定の10号、12号。9号については発掘区を拡張した際に検出した遺構である。11号は遺構露出展示予定である。

その後、住居の復元については擦文期の2号、続縄文期の7号、縄文期の12号を削減し、7号と12号を遺構露出展示とする計画に変更した。

参考文献

東京大学文学部考古学研究室 「常呂」1972

常呂町教育委員会 「史跡常呂遺跡整備基本計画」1991

Map N

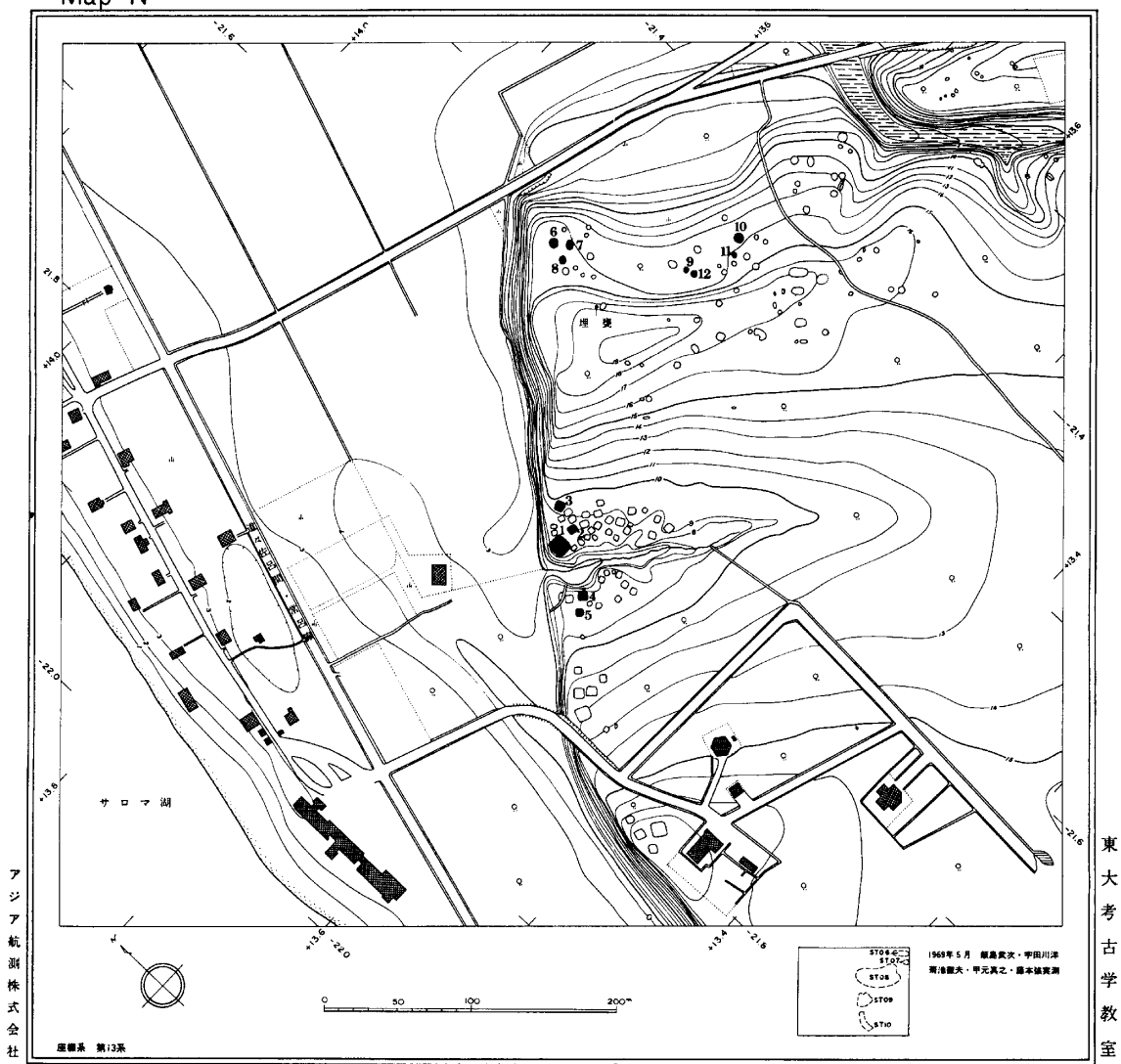


Fig. 1 調査地周辺の地形図

第II章 遺構各節

第一節 1号竪穴

調査の経過

擦文期の竪穴群は西側から入り込む小沢の周辺に分布している。このうち本竪穴は小沢に近い台地の端部に位置している。発掘前の状況は12m程の方形を呈していた。おそらく本史跡の竪穴群の中で最大の規模を有していると思われる。

調査は竪穴を覆っていた熊笹刈りから開始した。発掘区は竪穴に平行するように4mのグリッドを設定した。土層観察用ベルトを東西に2本、南北に1本残し掘り下げた。表土中には擦文土器がかなり混じり1-C-2グリッドからはFig. 5-1の土器が出土している。約30cmの表土を剥ぐと10cm程の暗黄褐色土層があり、床面である黄褐色土のローム面に続いている。壁際には褐色土が顕著に堆積している。この竪穴は3層の暗褐色土を切り込んで構築されているが、その際の排土は竪穴の周辺に厚く堆積している。黄褐色土の排土は北側、南側、西側が約15~20cm前後の層厚であるのに対し南側の1-A-0、1-A-1グリッド周辺は部分的に残る程度であった。東側周辺の排土の欠如は出入り口と関係があるのかもしれない。北東壁付近に黒色土の浅い落ちこみを確認したが、内部より縄文中期の土器片が出土している。1-A-0グリッドではわずかに火山灰の堆積が認められた。トコロ火山灰Ⅲと考えられる。あるいは他の遺構が存在するかもしれない。

遺 跡

本竪穴は一辺10m前後の方形を呈する。(Fig 2, P 1, I-1) 各壁の長さは北壁 9.8m、南壁9.7m、西壁9.7m、東壁10.03mを計る。東壁はやや丸みをもつ。壁高はほぼ垂直に立上り確認面から約60cmを計る。主柱穴は8本ある。ほぼ等間隔に配置されている。径は壁隅側の4本が24~30cmと大きいのに対し中間の4本は径が18~23cmと小さいようであり、やや内側に位置している。主柱穴の深さは20~30cmを計る。主柱穴のさらに内側に3本の小柱穴が認められる。この小柱穴もバランス良く配置されている。おそらく1-B-2グリッドにも1本存在し、4本あったものと推測される。壁柱穴は北壁、南壁、西壁ではほぼ等間隔に配置されているが、カマドのある東壁側では検出できなかった。壁柱穴は径4~8cm、深さは約7cmを計る。

カマドは東壁に2基構築されているが、遺存はあまり良好でない。構築材は地山の黄褐色ロームと粘土により作られている。北カマドにはFig. 4-1に示す小型土器が底部を上にして出

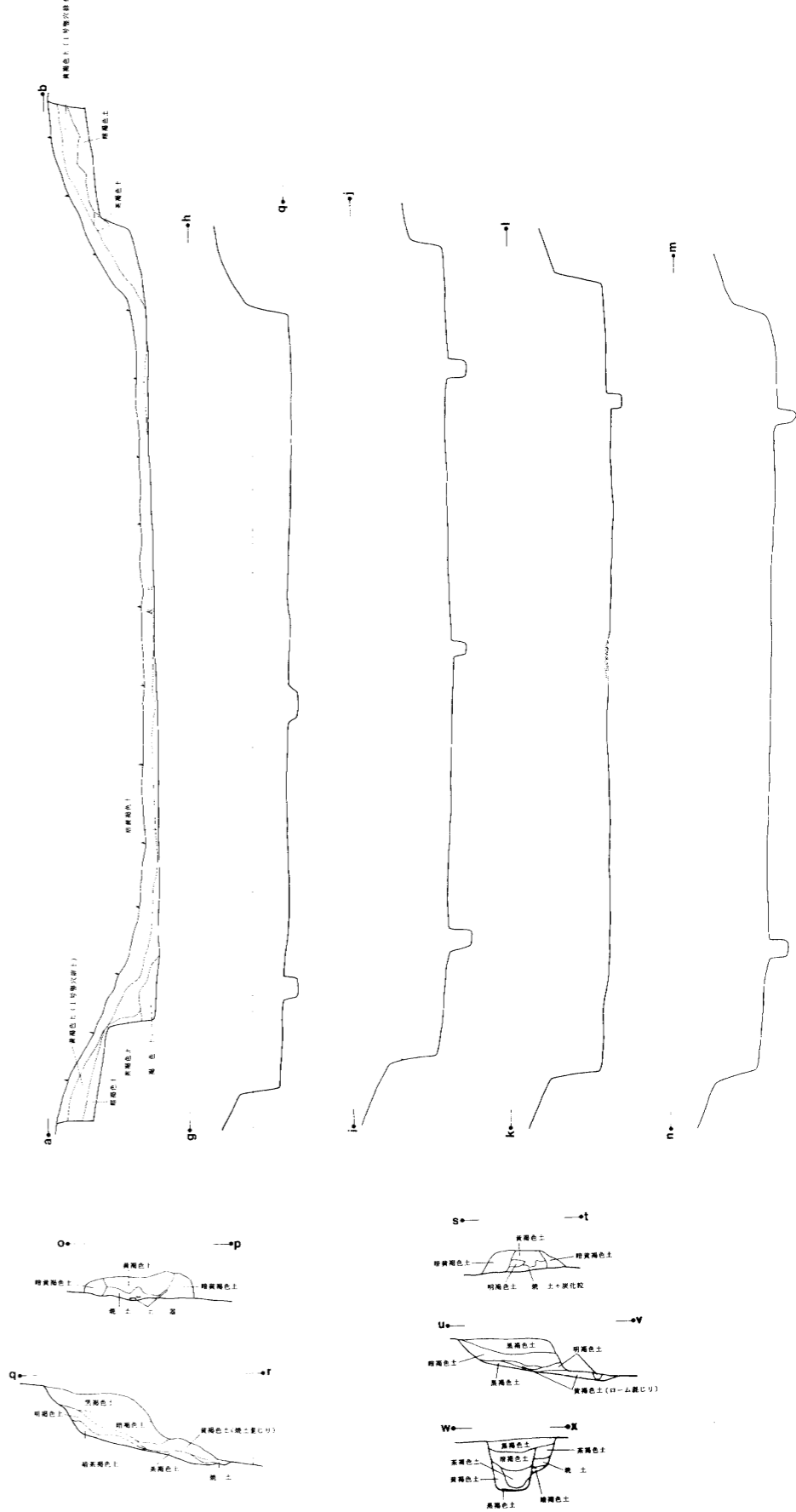
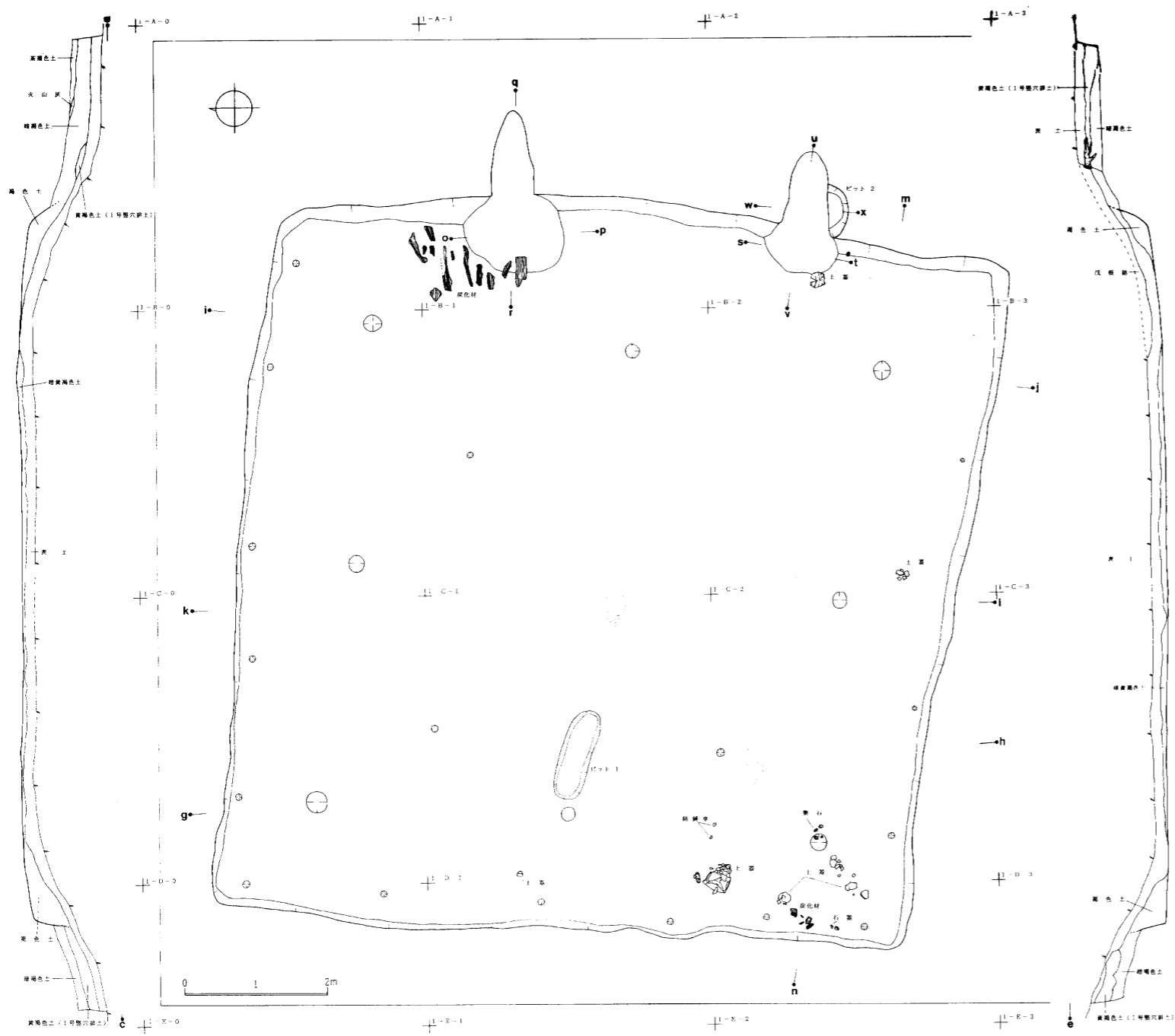


Fig. 2 1号竖穴平面图

土した。支脚として使用したのであろう。2基とも燃焼部はかなり熱く焼かれ真赤に変色している。煙道はU字形に掘られゆるやかに立上る。炉跡は竪穴の中央からやや西側に寄ったところにある。また、西側の遺物が多く出土しているところでも一部床が焼けていた。近くからは拳大の円礫4点が主柱穴内に入り込む様に出土している。集石であろう。炭化材は北側カマドの前部に認められる。炭化材の幅はまちまちであるが厚さは約4～5cm程度である。

西南壁の隅では幅約5cm、厚さ約1cmの板材が1本垂直に出土した。周辺には径5mm程度の茅材が認められた。竪穴埋土にも焼土粒、炭化粒がわずかであるが認められるところから本竪穴は火災を受けていると思われる。

ピット1

このピットは炉跡の西側約1:0mに位置する。長軸1.3m、短軸42cm、深度は確認面から約12cmの楕円形を呈する。埋土の土層は黒色土であり、遺物は出土していない。竪穴との新旧関係は明確にすることはできなかったがピットの方が新しいのであろう。

ピット2

このピットは南側カマドに切られている。形態は直径約78cm程度の円形を呈すると思われる。深度は確認面から約42cmを計る。底面近くには焼土が堆積しており、当初カマドの作り替えかとも考えられたが、形態的に他の時期のものと判断した。遺物は出土していない。

遺 物

本竪穴の遺物は西南壁の周辺に多く出土している。Fig. 3-1～3は高杯である。1～3とも矢羽根状の刻線を呈する。1には縦の沈線が加わり、脚部は杯部と別に製作されているため接着面は捲れあがりややいびつになっている。脚部をはめこんで製作している（P1. IX-1）、（P1. IX-2）、（P1. IX-3）。2、3は口縁部が外反する特徴を持つ。4は杯である（P1. IX-2）。表面には輪積み痕が残る。実側図に示していないが縦方向に整形痕が見られる。口縁部は横方向に丁寧に整形されている。底部には木目状の圧痕と円形状の窪みが残る。5は大型鉢形土器である（P1. IX-4）。口縁部は四段の隆帯が施される。胴上部は複段文様であり六段に分けられる。一段と五段は左下がりの刻線。三段には右下がりの刻線がありその上に2本単位の刻線を施している。二段、四段、六段は山形の刻線が施され、各文様帯は横走る沈線によって区画されている。胴下部はハケにより整形されている。6は無文の中型鉢形土器である（P1. IX-1）。底部から口縁部にかけてほぼストレートに開く。口縁部には三条の横走る沈線が施される。底部には木葉痕が残る。

Fig. 4-1は北側カマド内の燃焼部から伏せた状態で出土している（P1. IX-3）。土器の全体が火熱を受け赤変している。支脚として利用されたのであろう。口縁部から胴上部には矢羽根状の刻線が施され、胴下部には「く」の字が左右に合わさった文様が施されている。

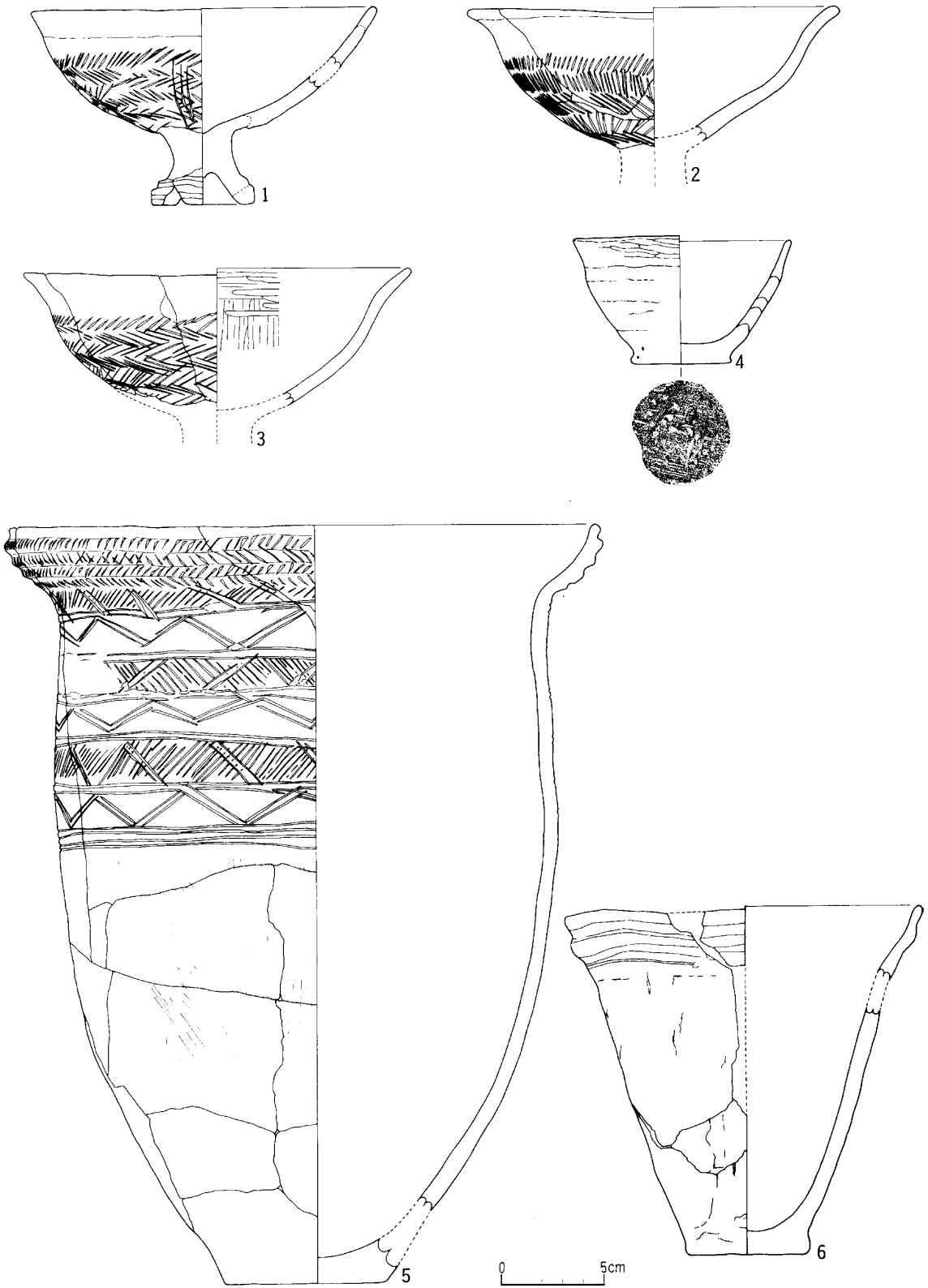


Fig. 3 1号竖穴床面(1~5)、埋土(6)出土土器

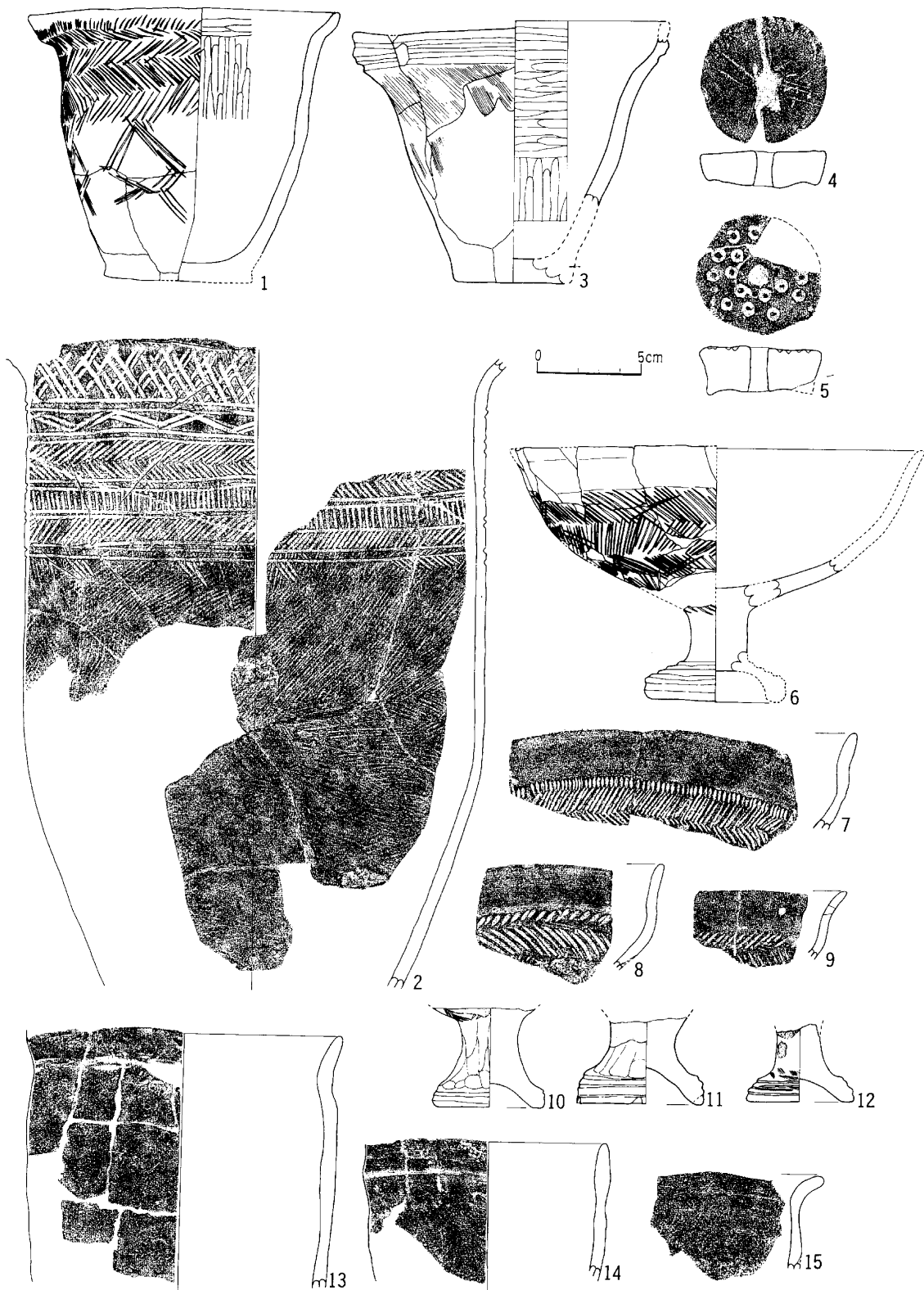


Fig. 4 1号竖穴床面(1、2、4)、埋土(3、5~15)出土土器

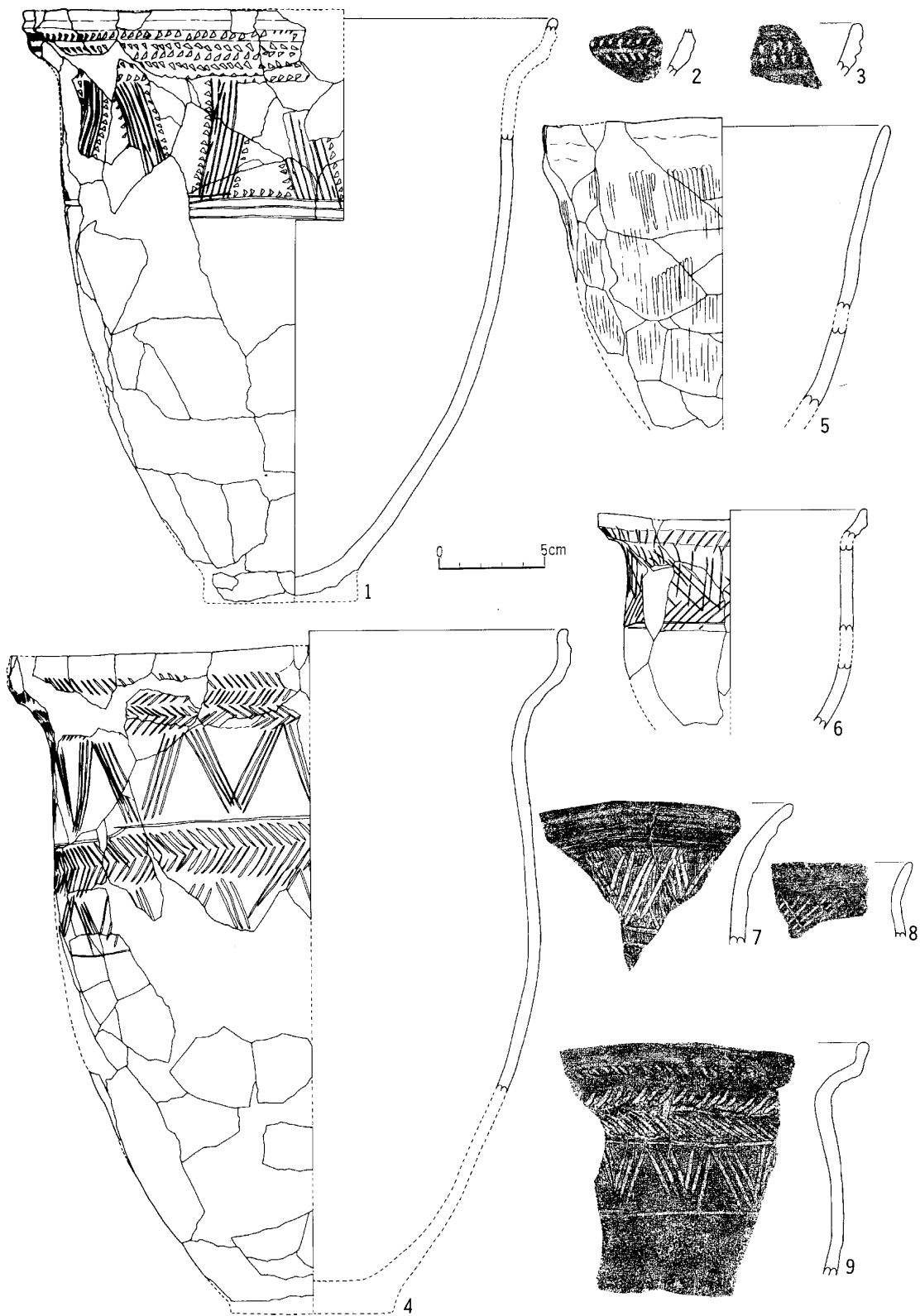


Fig. 5 1号竖穴埋土(1~9)出土土器

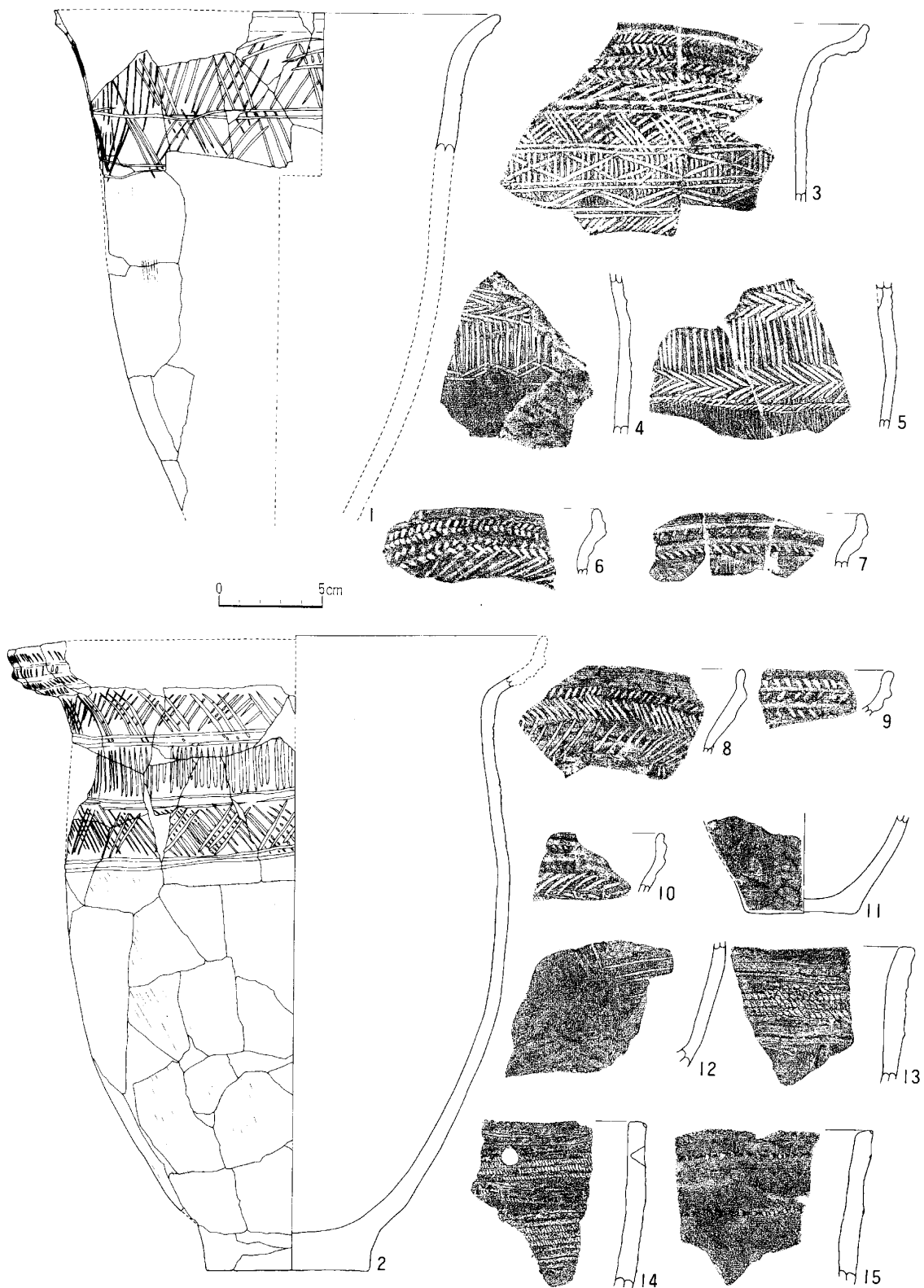


Fig. 6 1号竖穴埋土(1~15)出土土器

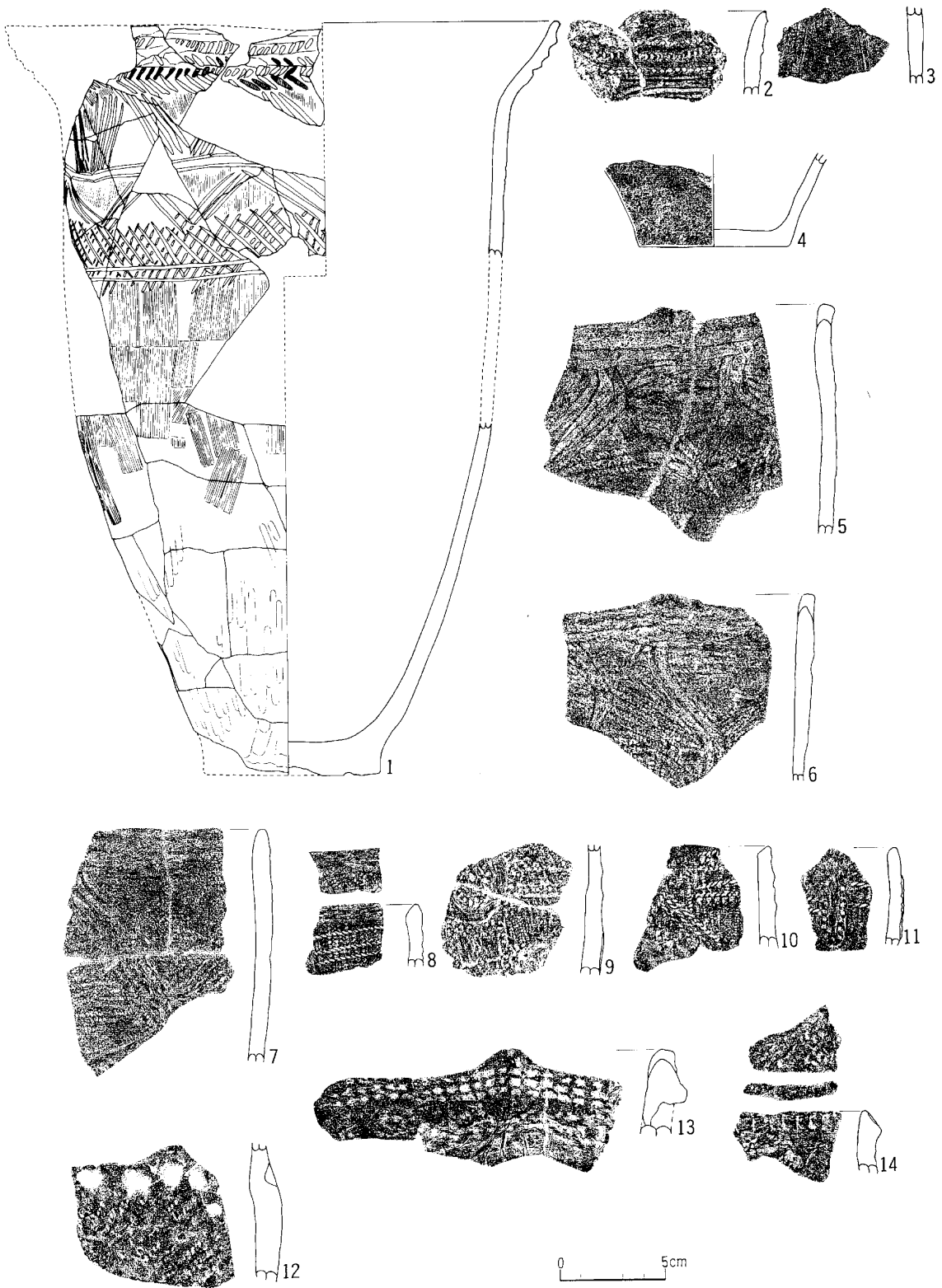


Fig. 7 1号竖穴埋土(1~14)出土土器

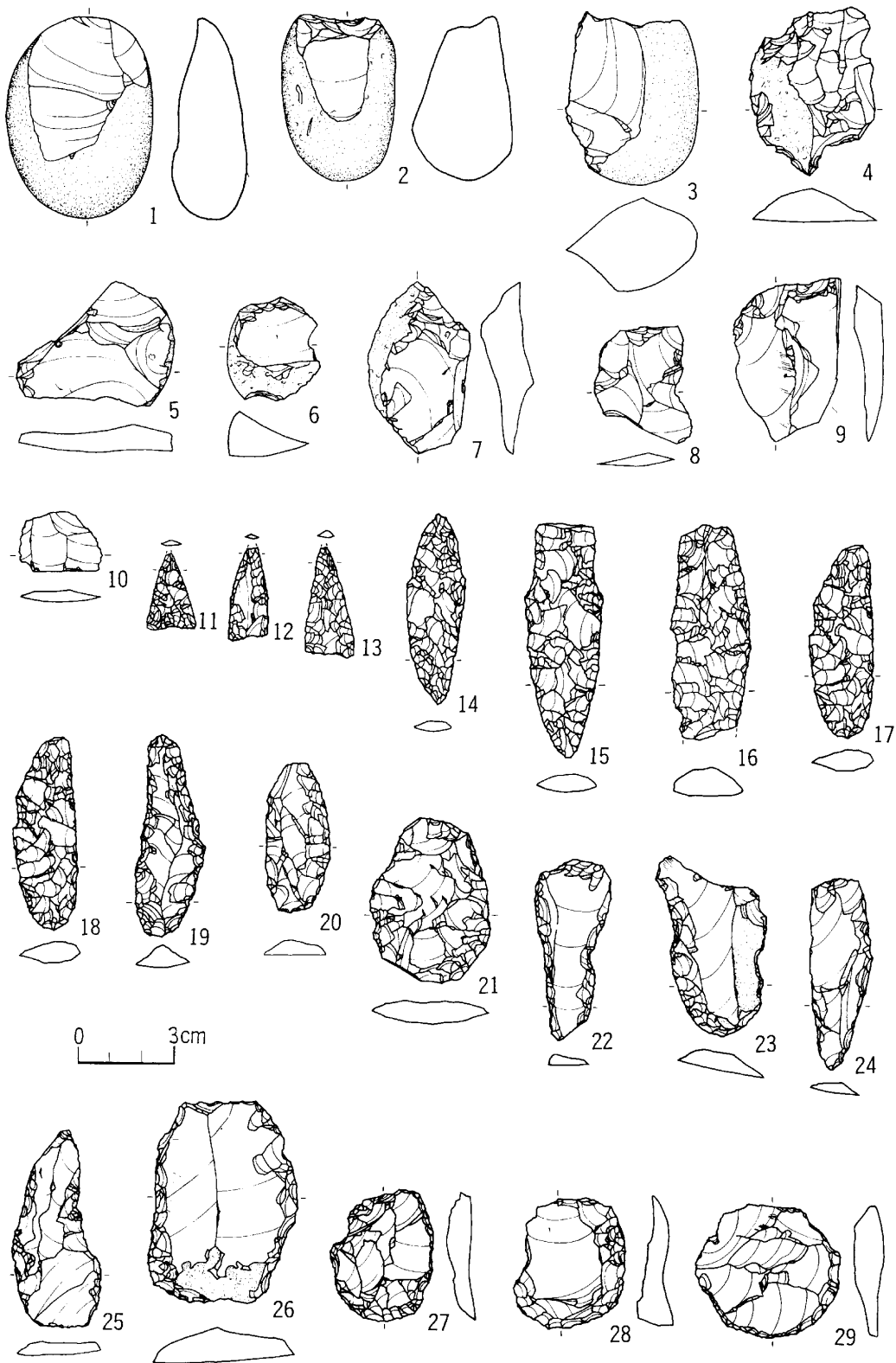


Fig. 8 1号竖穴床面(1~10)、埋土(11~29)出土石器

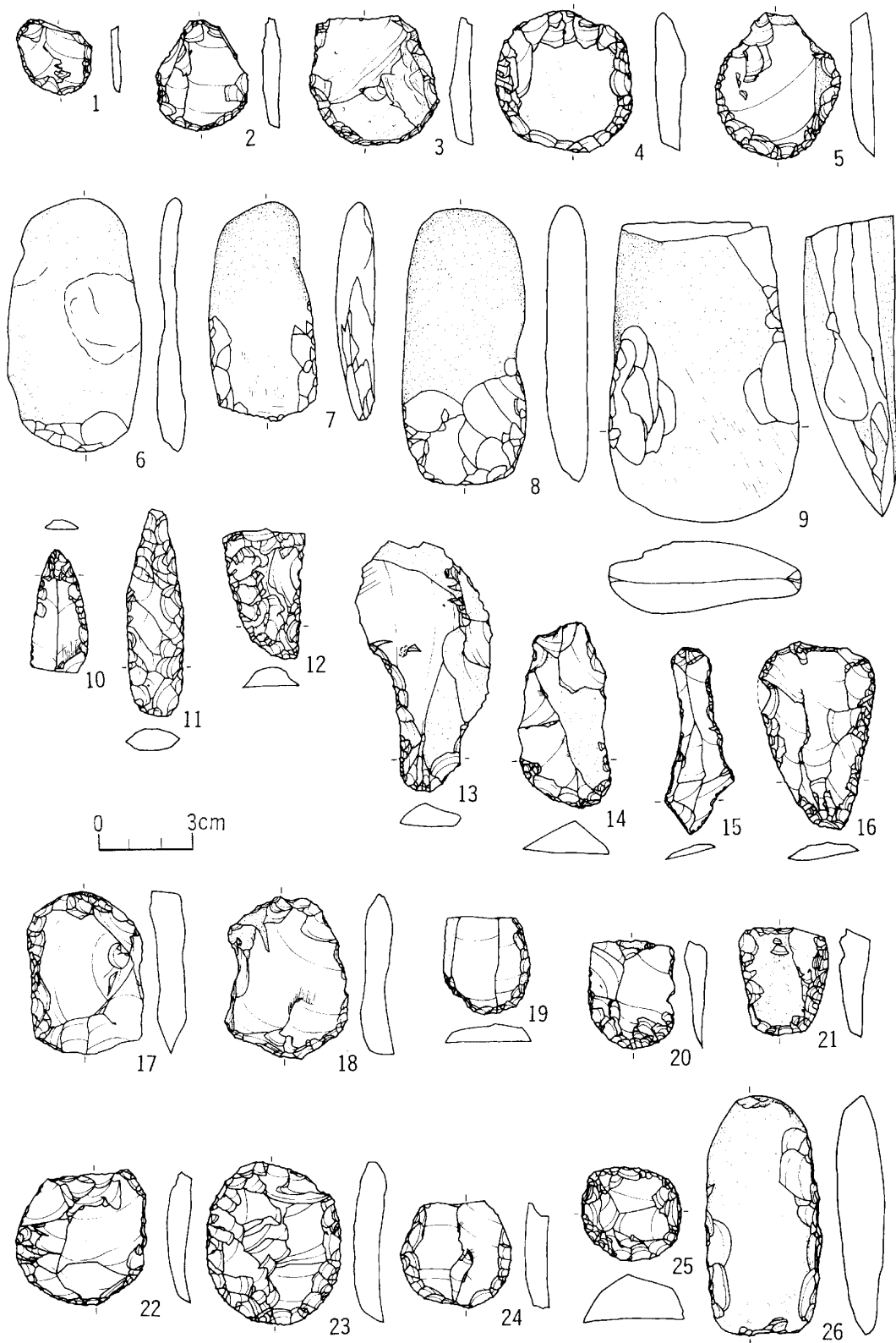


Fig. 9 1号竖穴埋土(1~9)、2号竖穴埋土(10~26)出土石器

施文は雑である。2は南側カマドの袖部と燃焼部から出土した。大型鉢形土器である。胴上部は複段文様であり五段に分けられる。一段は格子目文、二段は山形文、三段は矢羽根、四段は縦の刻線、五段は左下がりの刻線が施されそれぞれ横走沈線によって区画されている。胴下部は丁寧に整形されている。3は無文の小型鉢形土器である（P 1, X-5）。底部から口縁部にかけてストレートに開き口縁部には3条の横走沈線が施される。4、5は紡錘車である。4はFig. 3-5の大型土器の近くから2個に割れて出土した。表面には2~3本の細い刻線が施文されている。5は埋土出土のもので表面には円形文が施されている。6の高杯は杯部と脚部は接合しないが胎土が同じである。7~9は高杯の口縁部、10~12は脚部である。13~15は無文の小型鉢形土器である。

Fig. 5-1（P 1, X I-5）は底部が小さく口縁部が単純に開く土器で、口縁部はへら削りによって隆帯が作出され三角形の列点文が五段施されている。胴上部の文様は6~8本の刻線が鋸歯状に施され、三角形の列点文が加わる。胴下部とは三~六条の横走沈線で区画される。胎土は脆弱である。2、3は列点文が施される大型鉢形土器の口縁部。4は大型鉢形土器である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり矢羽根状の刻線が施されている。二段の複段文様で矢羽根状の刻線と3~5本の鋸歯文が各段に施されている。胎土には砂粒が混入している。5は無文の中型鉢形土器である（P 1, X I-2）。底部から口縁部にかけてストレートに開き、胴部はへらにより整形されている。6（P 1, X I-3）~9は小、中型の鉢型土器である。

Fig. 6-1（P 1, X III-1）は口縁部がゆるく外反する中型鉢形土器で器壁は比較的厚い。文様は左さがりの刻線上に3~4本の刻線を施し、その下部は横走沈線を挟んで3本単位の山形文が施文されている。2は大型鉢形土器である（P 1, X I-4）。口縁部は大きく外反し三段の隆帯を持つ。胴上部は複段文様で一段は左さがりの刻線上に3本単位の刻線が加わる。二段は縦長の刻線が施され、三段は右下がりの刻線上に三本単位の刻線が加わったもので、各文様帯は2本の横走沈線で区画されている。3~12は擦文土器の口縁部、胴上部、底部である。13~15は後北C 2・D式土器で平縁の口縁部である。

Fig. 7-1は、大型鉢形土器である（P 1, X III-3）。口縁部はゆるく外反する。三段の隆帯が施され手塩手法による短刻文が施文されている。2~4は後北C 2・D式の土器である。5~7は微隆起線文を持つ後北C 1式土器。8~11は縄線文が施され、横走あるいは同心円の隆帯を持つ宇津内II b式土器。12~14は胎土に繊維を含むトコロ六類である。

Fig. 8-1~10は西南壁隅の床面から出土した石器である。1~3は石核。4~10はフレークであり定形的な石器は認められない。石質はすべて黒曜石。埋土からは各種の石器が出土している。11~13は無茎の石鏃。14~18はナイフ。19~26は側削器。27~29は短削器。すべて黒曜石である。

Fig. 9-1~5は黒曜石の短削器。6~9は磨製石器である。

小 括

本竪穴は—10m程の擦文期の竪穴である。カマドは東壁側に2基構築されている。支柱穴は8本あり、支柱穴、壁柱穴は規則的に配置されている。遺物はカマドと反対側の西南壁側に集中しているのが特徴である。土器の複段文様の割付けはFig. 3—5、Fig. 4—1の土器の様に胴上部よりやや下部に施文する特徴がある。本竪穴の時期は藤本編年h期、宇田川編年後期に比定されよう。

文 献

- 藤本 強 1972 「常呂川下流域の擦文土器について」 『常呂』 東京大学文学部
宇田川 洋 1980 「擦文文化」 『北海道考古学講座』

第二節 2号竖穴

調査の経過

本竖穴は1号竖穴の東側約9mに位置する(Fig.1)。発掘前の状況は7mの方形を呈していた。発掘区は竖穴に平行するように4mのグリッドを設定し、窪みの中央部には土層観察用ベルトを十字に設定した。

竖穴内の基本土層は概ね2層に分層される。表土を剥土すると床面の黄褐色ロームがあり壁側では暗黄褐色土が堆積している。各壁の上部には隣接する竖穴の排土と思われる黄褐色土が認められた。北壁の検出中にはFig.12-1に示す後北C2・D式土器が茶褐色土層から出土した。

隣接住居の排土の下層には黒色土層が認められ、本竖穴はこの黒色土層を切り込んで構築されている。南壁では黒色土層の下層に白色を呈した火山灰が堆積している。トコロ火山灰Ⅲであろう。この部分では他の時期の遺構が重複している。

遺 構

本竖穴は方形を呈する(Fig.10)。各壁の長さは北壁6.0m、南壁5.6m、西壁5.50m、東壁5.80mを計る。壁はかなり斜めに立上り、高さは確認面から概ね60cmを計る。支柱穴は4本あり、ほぼ等間隔に配置されている。径は22~24cmで、深さは北側の2本が20~23cmであるのに対し、南側の2本は30~35cmを計りやや深い。壁柱穴はほぼ等間隔に配置されているが北西壁隅と南東壁隅では検出できなかった。径は6~12cm、深さは5~10cmを計る。

カマドは東壁に構築されているがやや北側に寄っている。構築材は黄褐色土と粘土により作られている。遺存は良好でカマド袖部と天井部が確認された。煙道は燃烧部から平坦面が続き煙出し部では斜めに立上がる。焼土から微細な骨片が検出された。炉跡は竖穴のほぼ中央部に位置している。

集石はカマドの北側から検出された。拳大の円礫21点がまとまり、近くから紡錘車も出土している。

ピット3

本ピットは2号竖穴の西壁側にある。西壁と軸が同じ方向である。竖穴が廃棄された後に構築されているため、竖穴の西壁上部が破壊されている。ピットの規模は長軸1.74m、短軸84cmの楕円形を呈し、深さは30cmを計る。出土遺物は認められない。

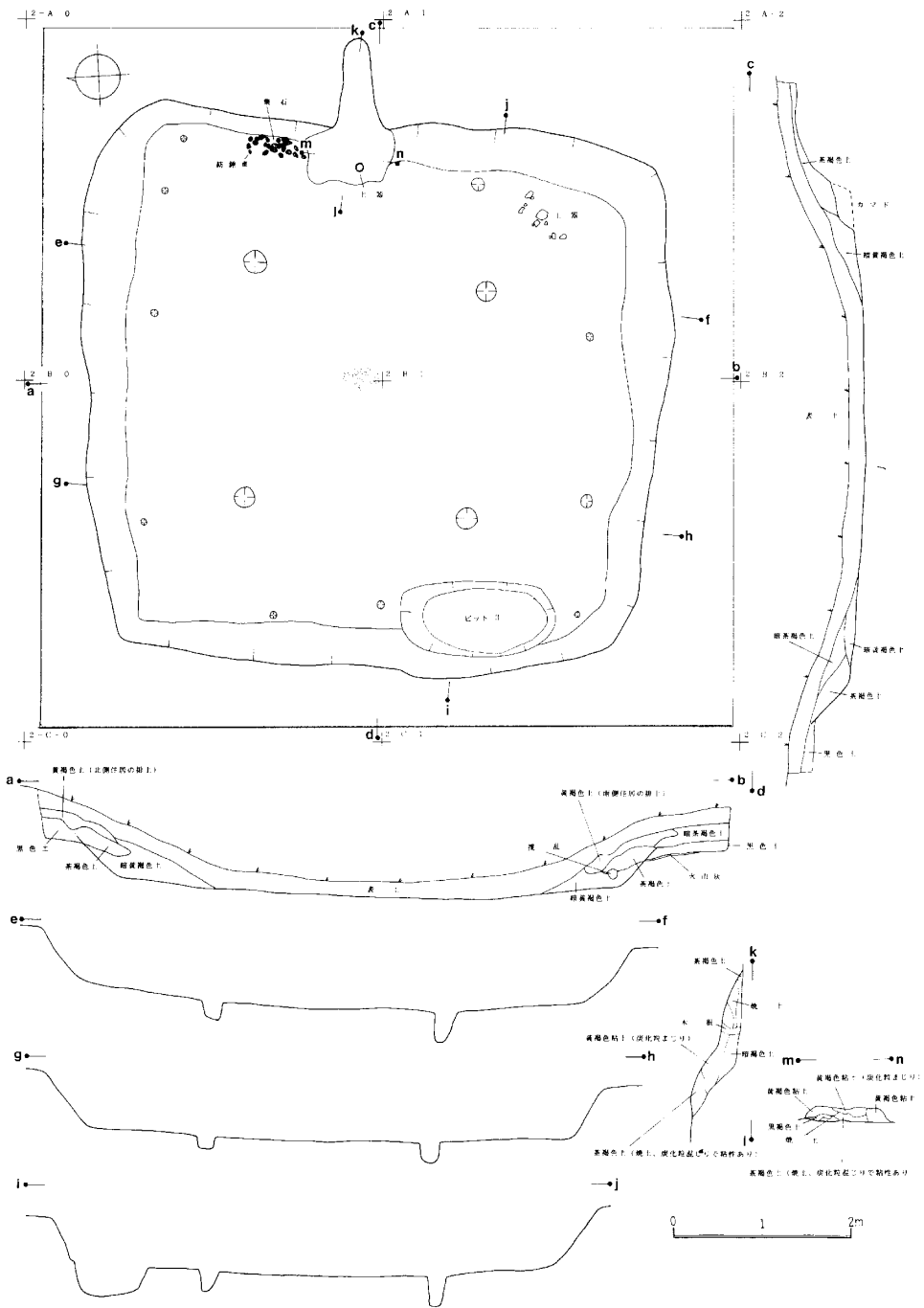


Fig.10 2号竖穴平面図

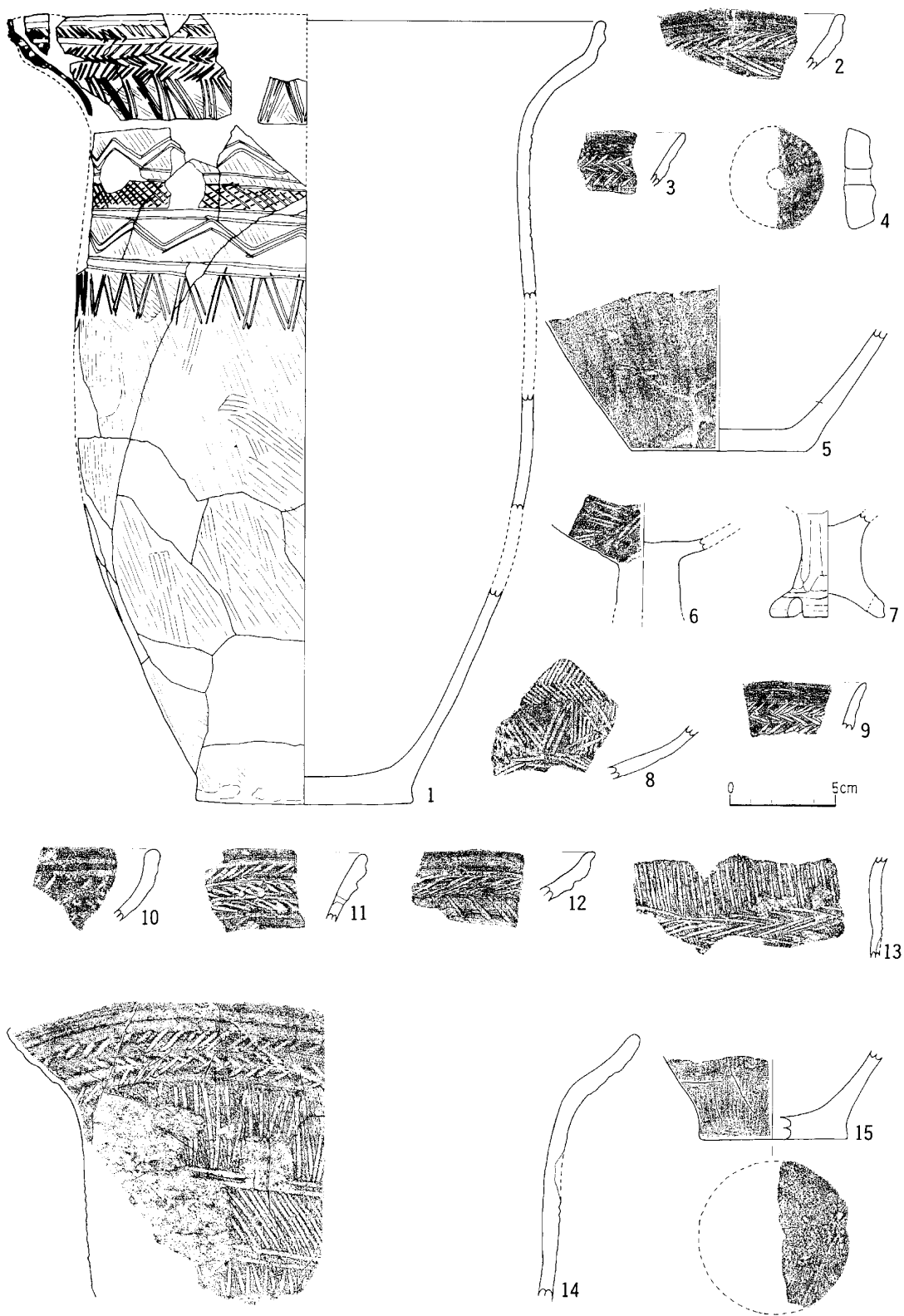


Fig. 11 2号竖穴床面(1~5)、埋土(6~15)出土土器

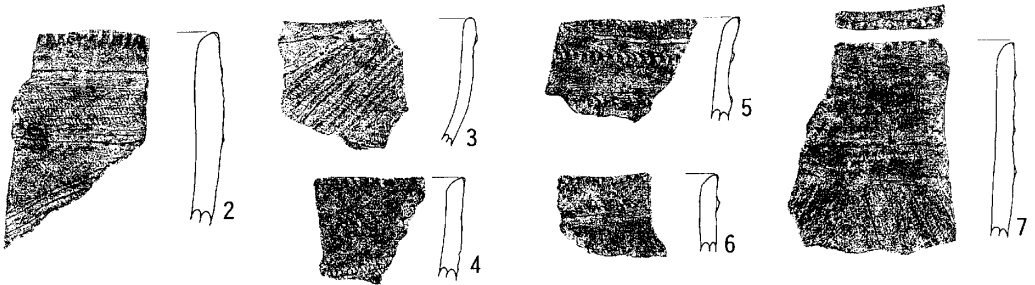
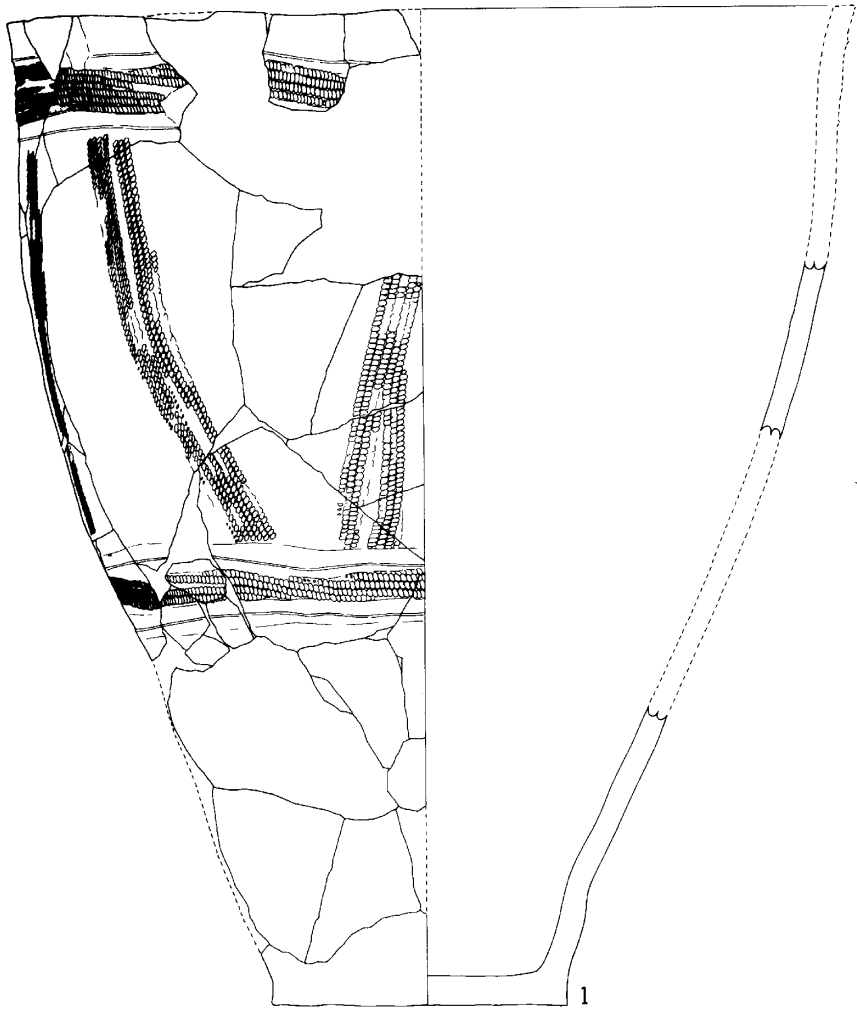


Fig. 12 2号竖穴埋土(1~7)出土土器

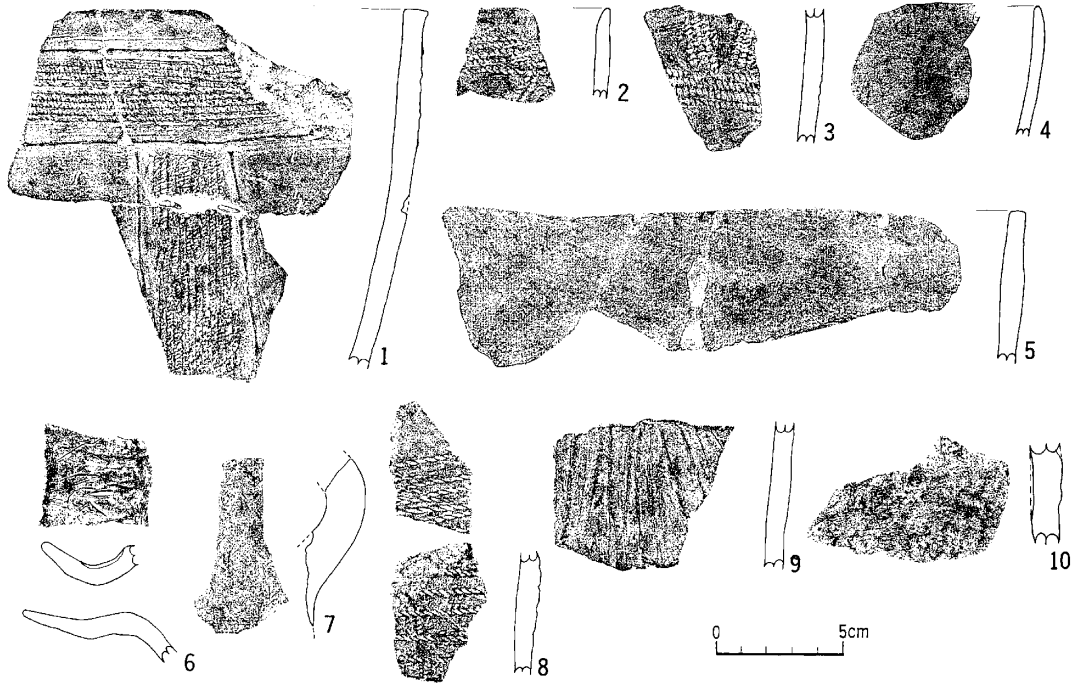


Fig.13 2号竪穴埋土(1~10)出土土器

遺物

本竪穴の床面からはFig.11-1~5に示す遺物が出土している。1はカマドの南側の床面出土の底部と埋土出土の破片が接合した土器である(P1, XII-4)。大型鉢形土器で、口縁部はゆるく立上り二段の隆帯をもち短刻線が施文されている。胴上部は複段文様で五段に分けられる。一段は3~4本単位の鋸歯文が施され、二段と四段はゆるいカーブを描く山形文、三段は格子目文が施文されている。五段は2本単位の鋸歯文が施されている。胴下部は2~3mmのハケにより器面調整されている。2、3は大型鉢形土器の口縁部。4は集石と共に出土した紡錘車である。表面は縁周部と中央の孔部に向かって2本の短刻文が押し付けられている。5は大型鉢形土器の底部である。胎土は脆弱である。埋土からは6~15が出土している。6、7は高杯脚部。8は高杯片。9~12は大型鉢形土器の口縁部。13は口縁部の下に縦長、矢羽根状の刻線が施文されている。14は三段の浅い隆帯の上に、左下がりの短刻文が2条施されている。胴上部は複段文様で鋸歯文、右下がりの刻線がみられる。15は底部で板条の痕跡がみられる。

Fig.12-1~7は後北C2・D式である(P1, XIII-1)。1は底部径11cm、口縁部径30cm、高さ38cmの大型土器である。口縁部は平縁でわずかに外反する。上下の縞縄文を微隆起帯で区画し、その間を鋸歯状に施文している。底部には叩き目状の痕が残る。5、6は太目の隆

帯を用いている。

Fig.13-1～7は後北C2・D式である。5は無文。6は注口。7は吊り耳である。8、9は宇津内IIb式。10は胎土に繊維を含まないトコロ五類であろう。

Fig.9-10～26は埋土出土の石器である。10は先端部を石鏃状に加工している。11は両面加工のナイフ。12は片面加工のナイフ。13～19は側削器。20～25は短削器。26は磨製石斧。

小 括

本竪穴は一辺6mの擦文期の竪穴である。カマドは東壁に構築されている。支柱穴は4本で、壁柱穴ともほぼ規則的に配置されている。壁は各面ともかなり斜めに立上がる。床面から出土した土器から本竪穴の時期は藤本編年h期、宇田川編年後期に比定されよう。

文 献

- 藤本 強 1972 「常呂川下流域の擦文土器について」 『常呂』東京大学文学部
宇田川 洋 1980 「擦文文化」 『北海道考古学講座』

第三節 3号 竪穴

調査の経過

本竪穴は小沢の周辺にある擦文期の集落群の中では最も北側にあり、台地の縁辺部より17mほど山林内に入ったところに構築されている。発掘前の状況は一辺約11m程、深さ約80cmの方形を呈していた。竪穴中央部では表土を剥ぐと床面である黄褐色ロームがみられるが、壁側では黄褐色土、茶褐色土、明褐色土が堆積している。西壁では黒褐色土がみられる。壁際の明褐色と黒褐色土を剥土すると、東壁から南東壁では地山の黄褐色ロームではなく山砂面が現れこの面を壁とした。南壁中央部では本竪穴に切られ他の時期の遺構があり、上部には白色火山灰（トコロ火山灰Ⅲ）が確認された。本竪穴の北壁では床面から23cmまではほぼ垂直に立上がるのに対し上部はかなりの角度をもって開いている。セクション面では明確に分層できなかったがこの状況は竪穴の壁として不自然であり、本竪穴の排土が載ることから他の時期の竪穴の壁面と考えられる。

北壁側の床面では不規則なピットが確認された。長軸1.54m、短軸66cm、深さ14cmで周囲には暗茶褐色土が盛り上がり、埋土の褐色砂は柔らかい土質を呈していた。風倒木など自然の営力によるものと思われる。

遺 構

本竪穴は東壁83cm、西壁8.3m、南壁9.0m、北壁9.0mの方形を呈するが、やや東西は短いようである（Fig.15 P 1, II-1）。支柱穴は8本と思われるが北東壁側では検出できなかった。また、支柱穴の径は12~20cmとまちまちであり、配置も不規則である。壁柱穴は北壁と東壁側ではほぼ等間隔に配置されるが、西壁、南壁では明確に確認することはできなかった。カマドは通常東壁に構築されているが、本竪穴ではカマドに関する煙道、燃焼部も認められなかった。カマドを持たない竪穴なのであろう。炉跡は竪穴のほぼ中央部にあるが、わずかに床面が赤変している程度であった。

遺 物

本竪穴の床面からはFig.14-1~3、5に示す遺物が出土している（P 1, II-2）。1、3は西南壁隅から出土した。1は高杯である（P 1, XIII-3）。口縁部の無文帯の下に矢羽根状、鋸歯状の刻線が施され横走沈線が全周する。内面の整形は丁寧に行っている。2は小型の鉢形土器である（P 1, XIV-1）。底部が床面から出土し、他の部位は表土、埋土から出

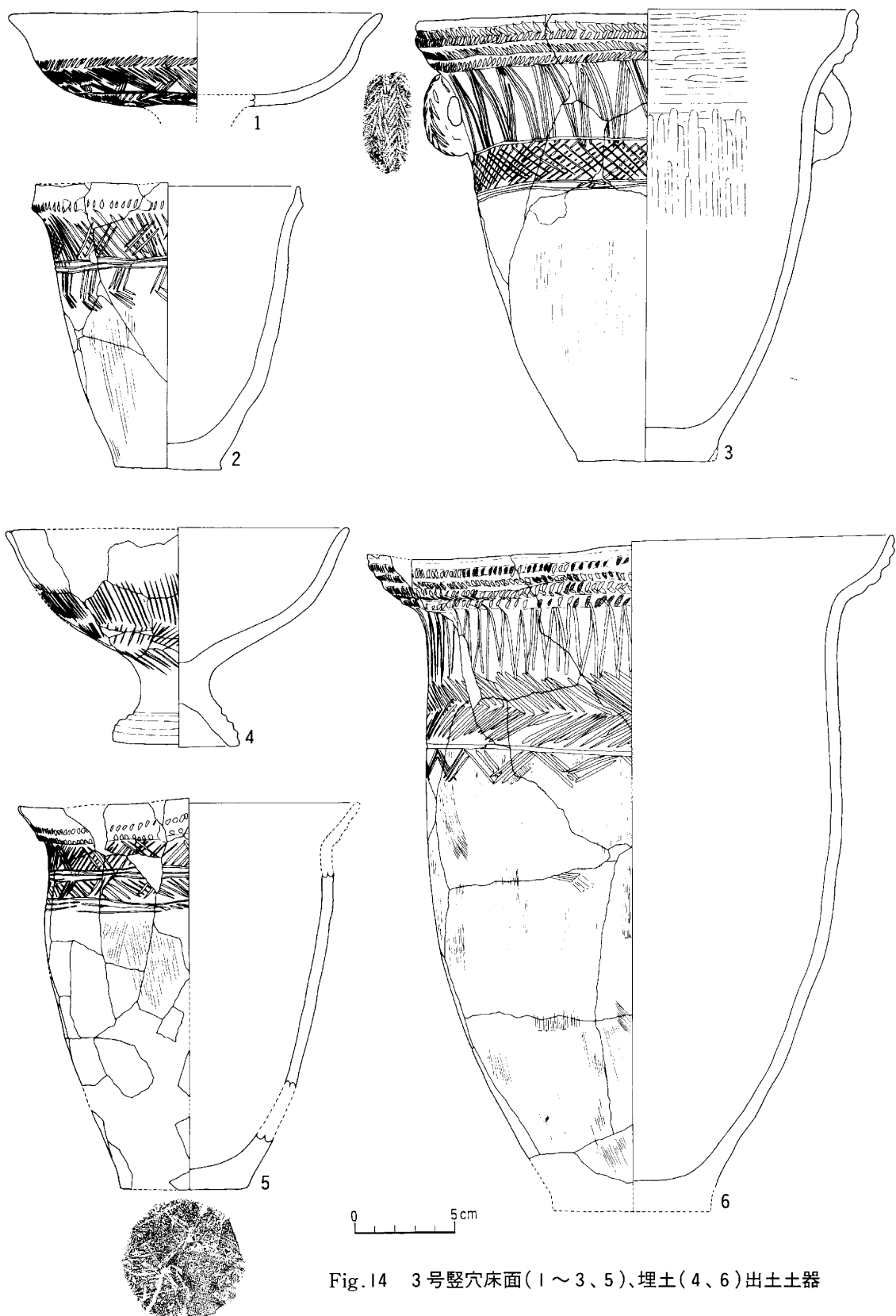


Fig.14 3号竖穴床面(1~3、5)、埋土(4、6)出土土器

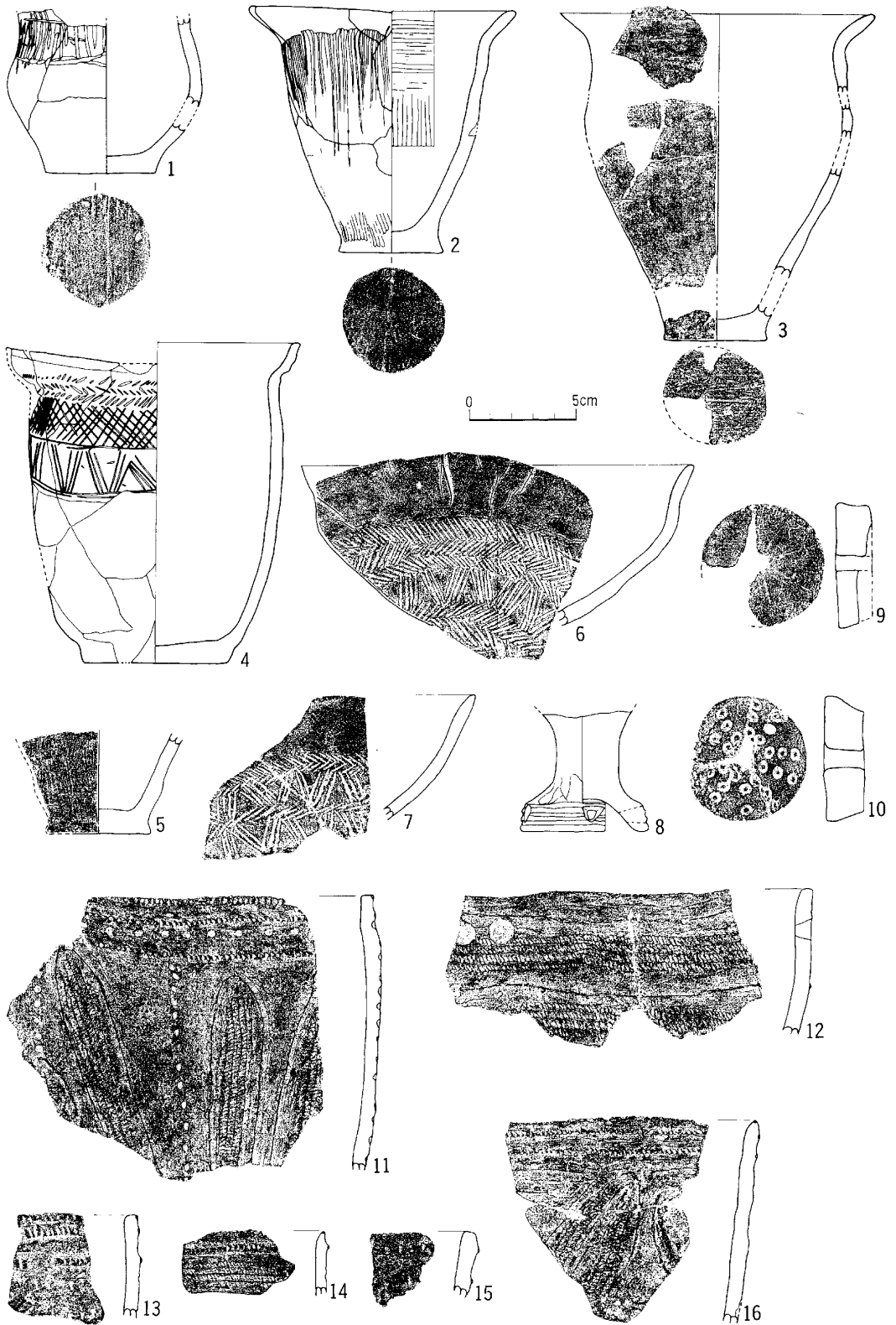


Fig. 16 3号竖穴埋土(1~16)出土土器

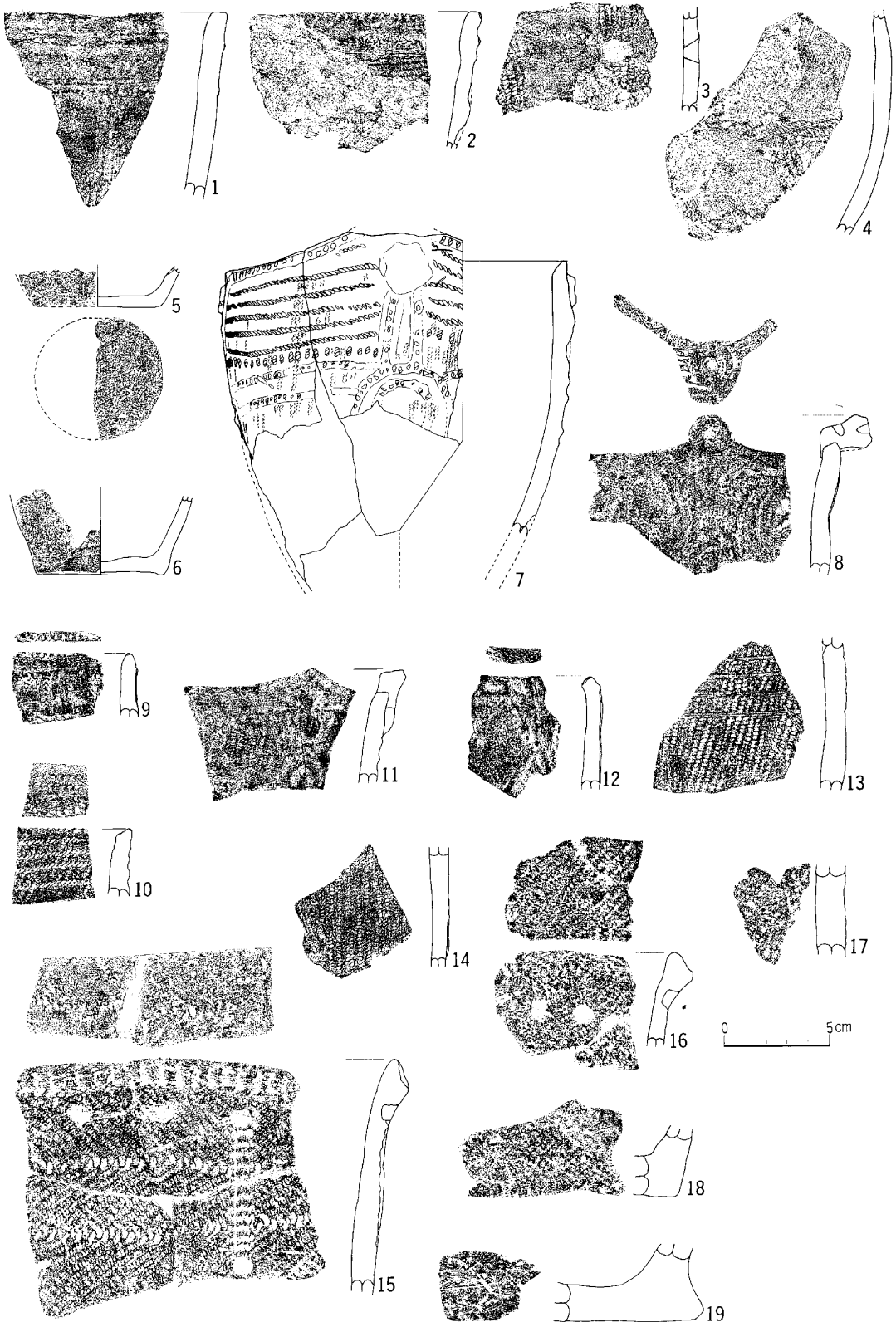


Fig. 17 3号竖穴埋土(1~19)出土土器

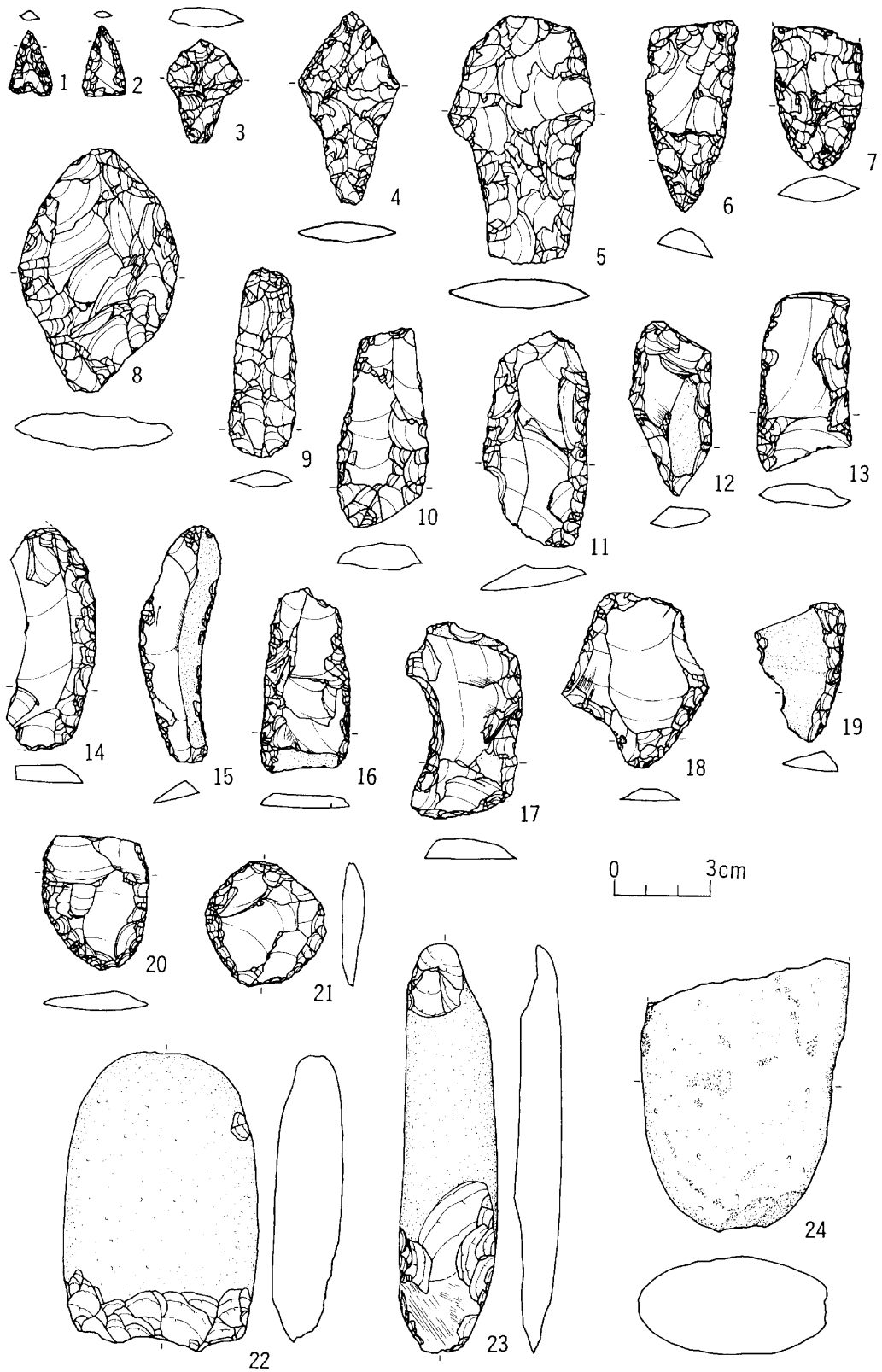


Fig. 18 3号竖穴埋土(1~24)出土石器

土した。口縁部は外反せず立上り、一段の隆帯上に短刻線が施されている。胴上部は右下がりの刻線の上に3～5本単位の刻線が施文されている。胴下部は縦方向に器面調整されている。3は中型の鉢型土器である(P 1, XIII-2)。口縁部は三段の隆帯が施され手塩手法による刻文がみられる。胴上部は3～4本単位の鋸歯文と孔子目文が施され、2対の吊耳をもつ。吊耳周辺では特に煤の付着が著しく、2個の補修口がある。4は高杯である(P 1, XIII-4)。口縁部、脚部は丁寧に磨かれているが、胴部は刻線が雑に縦方向と矢羽根状に施される。5は中型の鉢形土器である(P 1, XIV-3)。口縁部は外反し4段の隆帯上には手塩手法による短刻文がみられる。胴上部は1本の刻線が連続し、下部には矢羽根状の刻線が施文される。横走る2条の沈線下部には山形文が施文される。胴下部にはハケにより丁寧に整形されている。

Fig.16-1～16は埋土出土の土器である。1は胴部がふくらむ小型鉢形土器である(P 1, XIV-4)。成型は雑である。口縁部は欠失しているが、縦の刻線の上に横走沈線が施文されている。底部には板条の圧痕が認められる。2は無文の小型鉢形土器である(P 1, XIV-5)。器面はヘラで調整された後に磨きをかけている。底部には板条の圧痕が残る。3は胴部がふくらみ口縁部が外反する小型鉢形土器である。4は小型鉢形土器である(P 1, XV-1)。口縁部には隆帯はみられず矢羽根条の短刻文、胴上部には格子目文、鋸歯文が施文される。5は底部。6～8は高杯と脚部。9、10は紡錘車。9はFig.-1、2に示す土器の近くの埋土から出土している。11～16は後北C 2・D式である。

Fig.17-1～6は後北C 2・D式。7～14は宇津内II b式。15～19はトコロ六類。

Fig.18-1～24は埋土出土の石器である。1、2は無茎石鏃。3、4は有茎石鏃。5は石槍。6～9はナイフ。10～19は側削器。20、21は短側器、22は円礫の端部を両側から加工を施し刃部を作出した石器。23は縦長の礫を用いた磨製石斧。24は叩き石。

小 括

本竪穴は東西8.3m、南北9.0m程の方形を呈する。カマドは認められず、中央部に炉跡が残る。主柱穴の配置は不規則である。床面からはFig.15-3に示す吊耳を持つ土器が出土している。

この土器は藤本編年h～i期、宇田川編年後期に比定されよう。

文 献

- 藤本 強 1972 「常呂川下流域の擦文土器について」 『常呂』東京大学文学部
宇田川 洋 1980 「擦文文化」 『北海道考古学講座』

第四節 4号 竪穴

調査の経過

擦文期の集落は台地の西側に入り込む小沢の周辺に分布しているが、小沢に面して北側は29軒、南側は12軒認められる。本竪穴は12軒のうちの1軒で、小沢の縁辺部に位置している。発掘前の状況は一辺約6m程の方形を呈し、細長い溝が沢に向かって延びているのが観察されるため、調査は竪穴と溝を含めて行うこととした。

竪穴内の基本土層は概ね3層に分層される。表土層を剥土すると北、南壁側からロームブロック、炭化粒、焼土を含んだ茶褐色が堆積し、東、西壁側では茶褐色土の上に暗褐色土が堆積する。埋土の遺物は茶褐色土から多く出土している。本竪穴の排土である黄褐色土は北壁の周辺にのみ認められ、下層の暗褐色土から後北C2・D式の破片が出土している。

遺 構

本竪穴 (Fig.19、P 1、III-1) は東5.60m、西壁5.40m、南壁5.80m、北壁5.50mの方形を呈する。壁高は確認面から概ね50cmを計る。カマドは東壁中央部に構築されている。構築材は黄褐色土と粘土が用いられている。両袖部の遺存は良い。天井部は下面近くまで抜け落ちている状態である。両袖部の内側と燃焼部はかなり火熱を受け赤変している。燃焼部の上層である暗褐色土は粘性に富む土質で炭化粒、魚骨と考えられる細片が混入している。煙道はさほど長くなく70cm程度であり、煙道口ではほぼ垂直に立上がる。

竪穴の床面には数本の細い溝が走っている。最も幅広なのはカマドの前面部にある溝で幅は約10cm、深さは約6cmを計る。この溝は調査前に確認していた小沢に注ぐ溝につながっている。

南壁周辺では縦横に伸びる幅5～8cmの溝も確認された。これらの溝は径22～28cm、深さ約25～30cmの小ピットとつながっている。溝の一部ではトンネル状に掘られている箇所もある。数日間にわたって雨が降るとこの竪穴は水はけが極めて悪く、水が湧いてくる状態であった。地形をみても南側からこの竪穴に向かってかすかに傾斜している。おそらく小沢に向かう水の流れ道に当たるのであろう。この様な点から竪穴内の溝は排水溝と考えた。溝とつながる小ピットは水溜めであろうか。ただこの程度の構造で実際に機能し得たのか疑問も残る。一方、竪穴外の溝は傾斜変換線に当たる部分では上部を確認することができなかった。下部では長さ3.50mを計る。断面は竪穴近くでV字形を呈するのに対し、小沢に接するにつれ底部がU字形に開いている。深さは確認面から概ね65cmを計る。溝から遺物は出土していない。

主柱穴は4本あり、ほぼ規則的に配置されている。径は18～27cm、深さは15～27cmである。それ以外の大きなピットは柱なのか水溜なのか不明である。壁柱穴は西、南壁で径5cm、深さ

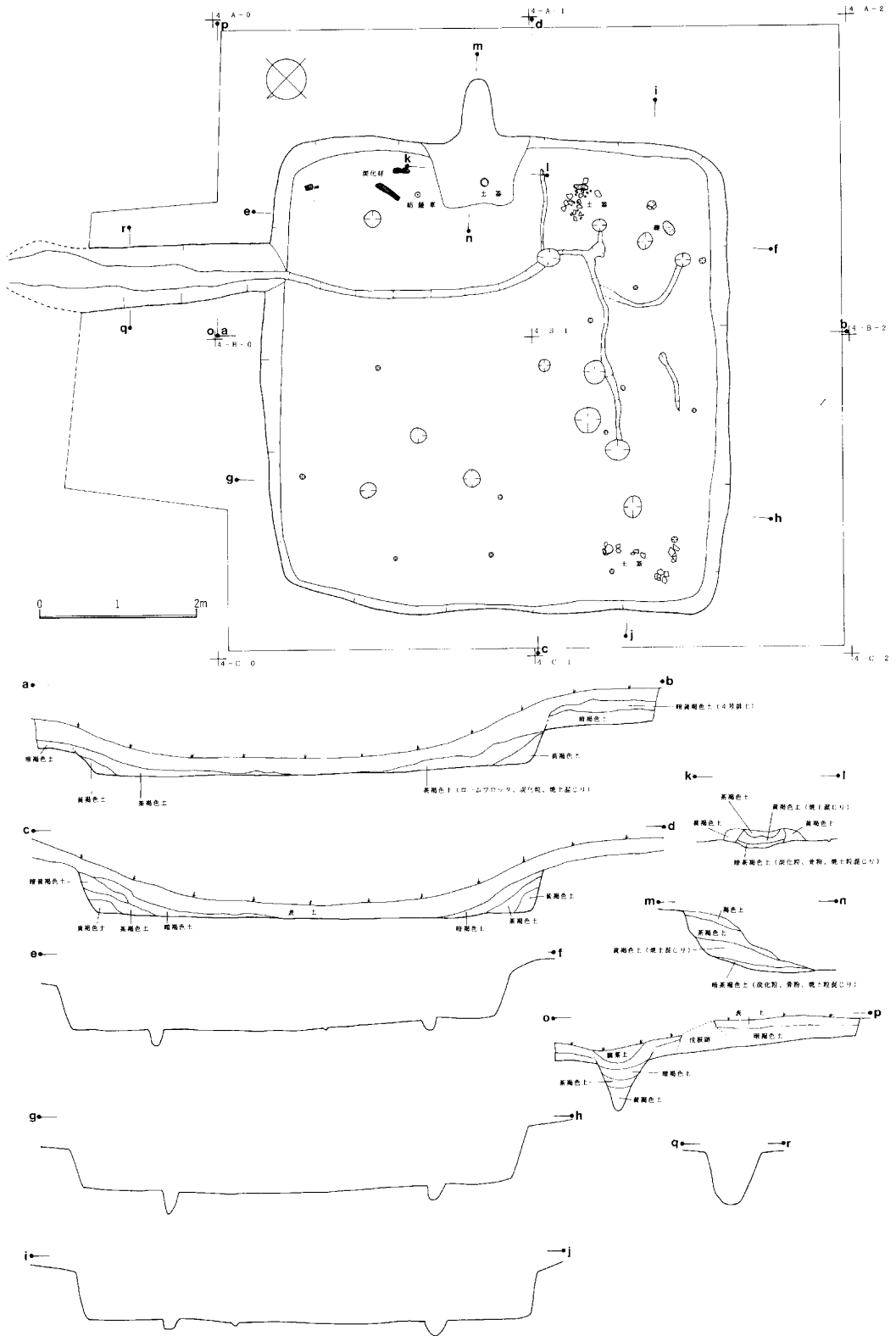


Fig. 19 4号竖穴平面图

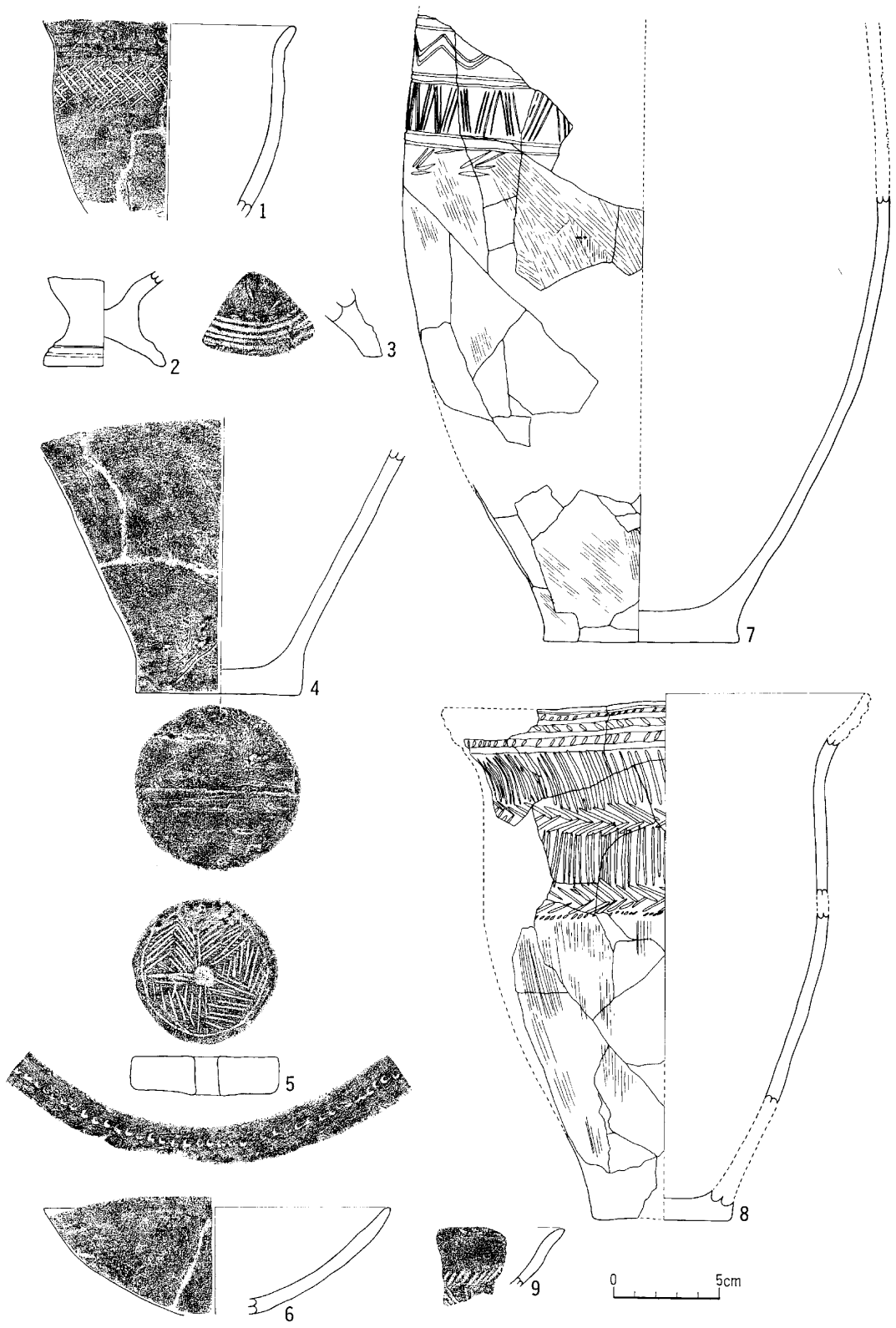


Fig.20 4号竖穴床面(1~5、7)埋土(6、8、9)出土土器

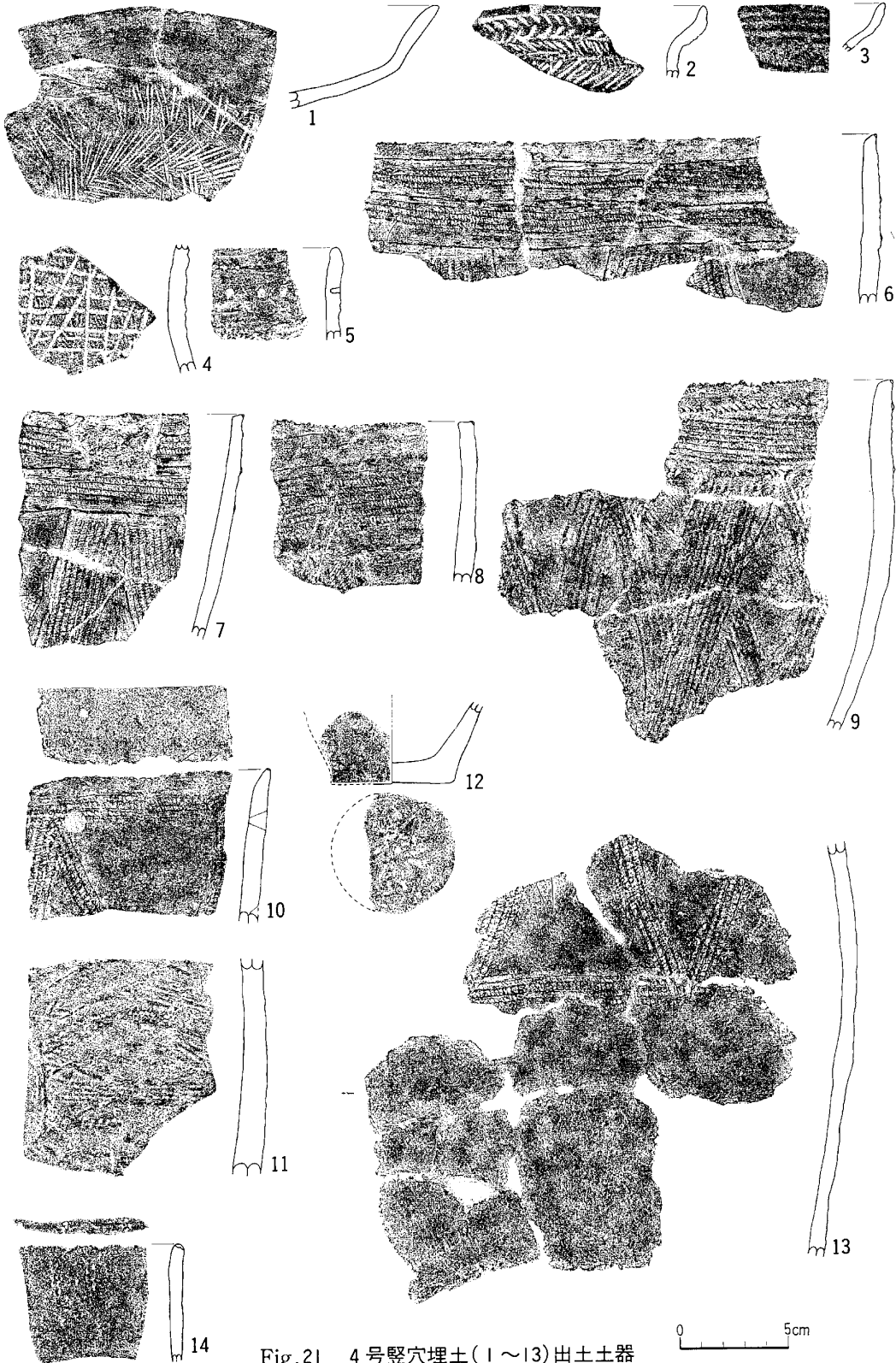


Fig. 21 4号竖穴埋土(1~13)出土土器

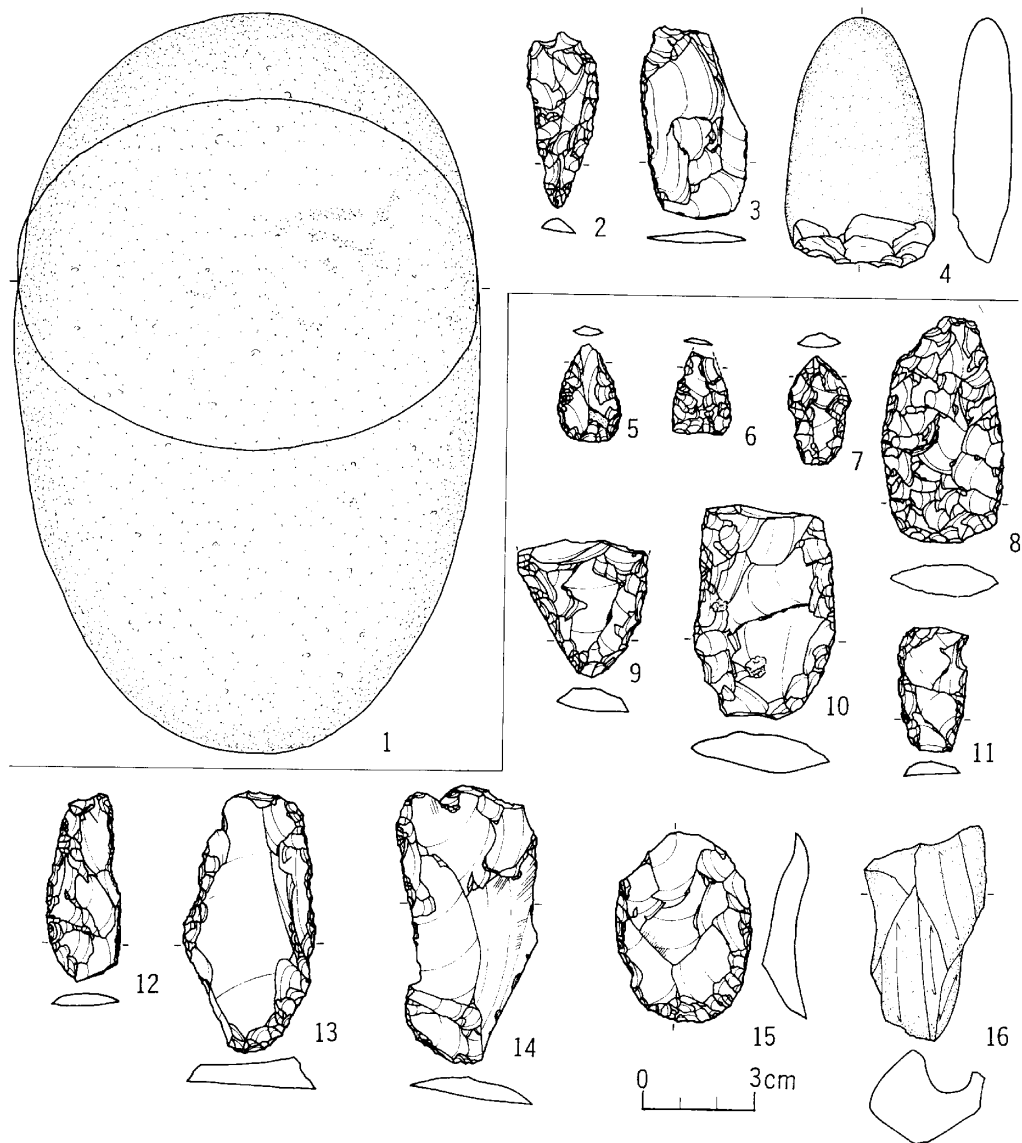


Fig.22 4号竪穴床面(1)、埋土(2~3)、5号竪穴埋土(5~16)出土土器

6cmのものが認められたが、東壁では確認できず、北壁では1本検出しただけである。炉跡は竪穴中央部にある。南北に長く85cm、東西は60cmを計る。

遺 物

床面からはFig.20-1~5、7の遺物が出土している。1はカマドの南側から出土した小型鉢形土器である。口縁下に浅い沈線がめぐる。胴上部では格子目文が施文される。2、3は高杯脚部。4はカマドとカマドの南側から出土した破片が接合した大型鉢形土器である。器面は

ハケにより整形され、底部には板目状の圧痕が残る。5はカマドの北側から出土した紡錘車である。器面には2本単位の刻線を放射状に5列施し、区画した後に縦、横、矢羽根状の沈線を施している。側部には半截状の刻文が施文されている。6は無文の高杯。7はカマド内と西壁近くの床面から出土した破片が接合した土器で、底部は燃焼部から出土した。口縁部は欠失しているが、胴上部は複段文様である。本遺跡の小沢を挟んで調査した2号竪穴床面出土の土器と同様のゆるい曲線をもった山形文と3本～4本単位の鋸歯文が施文され、興味深い。8は中型鉢形土器である。口縁部はゆるく外反し三段の隆帯をもつ。文様は縦の刻線と矢羽根状の刻線が二段づつ交互に施され、胴下部とは列点状の短刻文で区画されている。

Fig.21-1は高杯。2、3は中型鉢形土器の口縁部。4は数条の横走沈線上に縦、斜めの沈線を施文している。5～13は後北C2・D式。5は口縁部にO Iの突瘤が施文されている。施文具の幅は狭く、突きも浅い。間隔も不規則である。いわゆる北大式とは異なる単なる刺突と考えられる。12は底部。14は器壁が比較的薄く、口唇部に刻み目をもつ。口縁直下には2本単位の撚糸が垂下する。時期的には続縄文前半、下田ノ沢1か興津式と考えられる。^{注1)}

Fig.22-1はカマドの南側から出土した円礫である。表面にわずかに使用痕が観察される。台石であろう。2は片面加工のナイフ。3は縦長剥片に使用痕がみられる。4は円礫の端部に刀部を作出している。

小 括

本竪穴は一辺6mの方形を呈する。竪穴内から屋外にかけて小溝が検出された。排水溝と考えられる。時期は床面出土遺物から藤本編年h期、宇田川編年後期に比定されよう。

文 献

- 藤本 強 1972 「常呂川下流域の擦文土器について」 『常呂』東京大学文学部
宇田川 洋 1980 「擦文文化」 『北海道考古学講座』 みやま書房

注1) 大沼忠春氏のご教示による。

第五節 5号 竪穴

調査の経過

本竪穴は4号竪穴から約7m南西方向に寄った位置にある。調査前の形状は一辺3m程の浅い窪みを呈していた。土層観察用ベルトを竪穴中央部で十字に設定し調査を開始した。表土を剥土し2層の黒色土を掘り進める段階から炭化粒、焼土が認められた。特に南壁側が顕著である。この炭化粒(材)、焼土は床面から浮いたレベルで検出された。壁際は暗褐色土、茶褐色土が堆積し床面以外の遺物は主にこの層から出土している。

遺 構

本竪穴(Fig.24、P1、IV-1)は東壁3.40m、西壁2.90m、南壁3.20m、北壁3.20mの方形を呈する。壁はほぼ垂直に立上り、高さは確認面から概ね35cmを計る。カマドは東壁に構築されている。カマドは遺存が悪く、袖部等は確認できなかった。周辺には黄色粘土が散在していた。構築材であろう。燃烧部はかなりの火熱を受け煙道まで赤変している。煙道はなだらかで煙道口でわずかに窪みながら立上がる。柱穴は4本確認された。カマドの前面に径18cm、深さ9cmのもの1本。炉跡のまわりに2本。北西隅に1本である。しかし、カマド前面と炉周辺のもの上屋を支える柱と考えるには無理かもしれない。通常3m程度の小規模の竪穴では柱穴は持たず、他の用途が考えられよう。北西隅のものは壁柱穴であろう。径13cm、深さ5cmを計る。

遺 物

本竪穴の床面から出土した遺物はFig.23-1に示す高杯1点だけである。この高杯はカマドの南側から出土した。口縁部はゆるく外反し、文様は7本単位の細かい刻線が鋸歯状に施されるが磨耗が著しい。2は無文の小型鉢形土器である。器面はへうにより整形されている。3は小型鉢形土器である。横走る細い沈線上に斜めの沈線を施している。4は小型鉢形土器である。胴上部の文様帯は縦の刻線が二段あり、上段は2本単位の×状の刻線が施される。5は格子目文が施されている。6は無文の大型鉢形土器口縁部。7は5同様の格子目文が施されている。8は小型鉢形土器の口縁部。9は鋸歯文がみられる。10は口縁部が「く」の字に外反し、口唇部で立上がる。一段の隆帯、その下部には短刻文が施される。胎土は緻密である。11は胴部。12は高杯。13の底部には木葉痕があり、粒子の細かい砂が全面に付着している。14~24は後北C2・D式で、16は丸底を呈する。25~26は宇津内IIb式である。

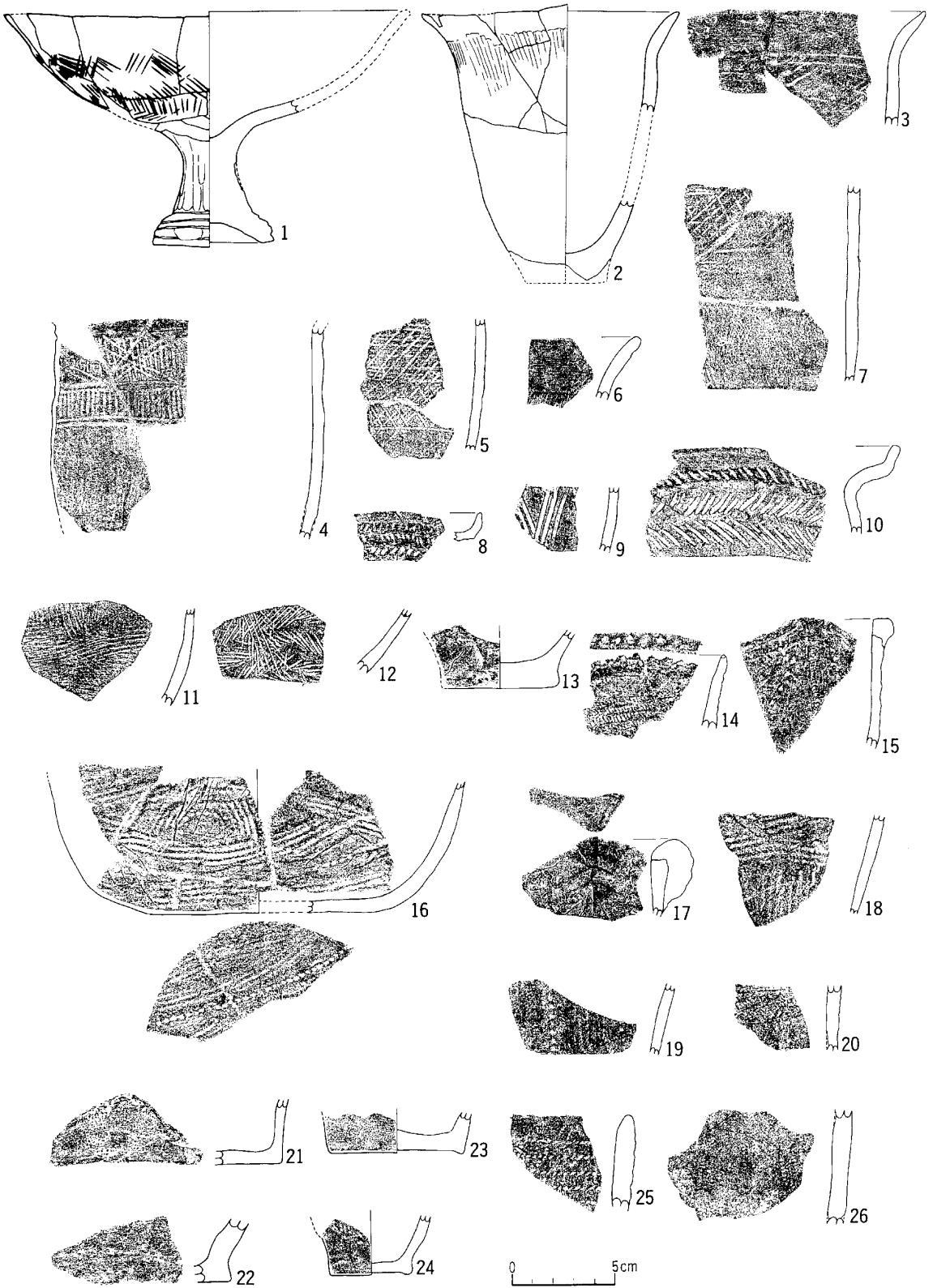


Fig. 23 5号竖穴床面(1)、埋土(2~26)出土土器

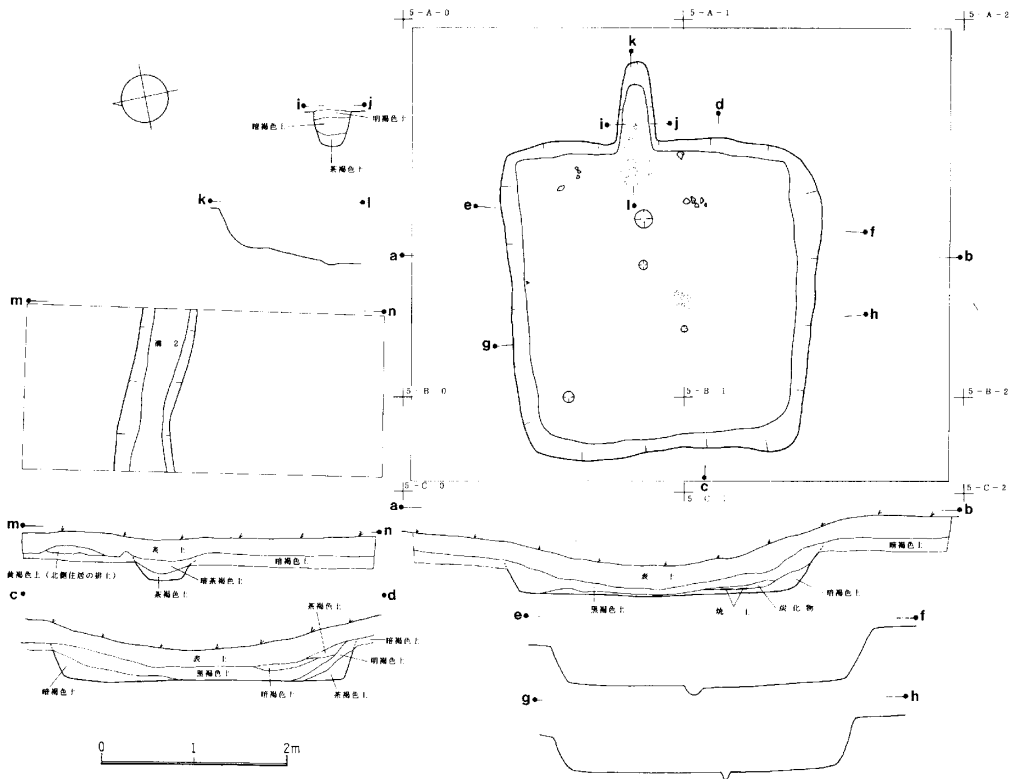


Fig.24 5号竖穴平面図

小 括

本竖穴は東西3.20m、南北3.30mの方形を呈する。時期を確定する遺物はFig.23-1に示した高杯が1点出土しているだけである。高杯から判断するとこの竖穴の時期は藤本編年h～i期、宇田川編年後期に比定されよう。

文 献

- 藤本 強 1972 「常呂川下流域の擦文土器について」 『常呂』東京大学文学部
 宇田川 洋 1980 「擦文文化」 『北海道考古学講座』 みやま書房

第六節 溝状遺構

チャシ状溝遺構 1

本溝状遺構は1969年に東京大学文学部による一般分布調査で発見された (Fig. 1, 東京大学文学部考古学研究室編 1972.MapD)。西側の台地に入り込む小沢の周辺には41軒の擦文期の竪穴がみられ、本報告の4号、5号竪穴は東側に位置している。溝のあるこの部分は地形的に北側に突き出ている。いわゆるチャシの形態である丘先式の形状である。(Fig.26)。標高は約8mである。1991年11月に試掘を行ったが、調査前の状況は、突き出た台地の根本部に一条の浅い窪みとして確認された。溝の両端は斜面まで達しているようである。調査は溝と直交する一本のトレンチを設定した。表土を剥土し、2層の黄褐色土まで掘り下げた段階で地山の黄褐色ロームが確認された。セクションを観察すると茶褐色土を切り込んで溝が構築されていることが明らかになった。(Fig.25) 溝内の土層は表土下に暗褐色土が堆積し、底部では焼土が認められた。埋土からは擦文期の紡錘車の細片が出土している。

溝は地表面の窪みから計測すると長さ約9mであり、ゆるい弧状を呈する。断面をみると底面は丸味を帯び段をもってゆるく立ち上がる。壁高は確認面から概ね70cmを計る。溝はセクションからみて人為的であることが確認されたが、アイヌ文化期のチャシと比較すると小規模であり、チャシ状遺構として区別した。

溝状遺構 2

この溝は5号竪穴の北側約8mに位置する。(Fig.26) 地表面から観察すると窪みは極めて浅く、かろうじて判別される程度であった。(P 1, IV-2) 溝は弧状を呈し西側斜面まで伸びている様に見受けられた。東側については4号竪穴付近で切れているようである。溝は2層の暗褐色土から掘り込まれている。東側には溝の排土か東側の未発掘竪穴の排土と思われる黄褐色土が見られる。溝の幅は約50cm、深さは約30cmである。

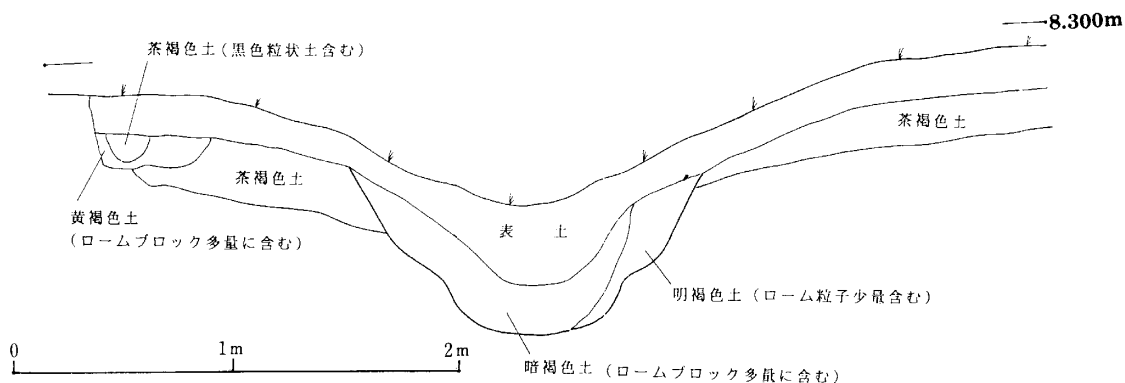
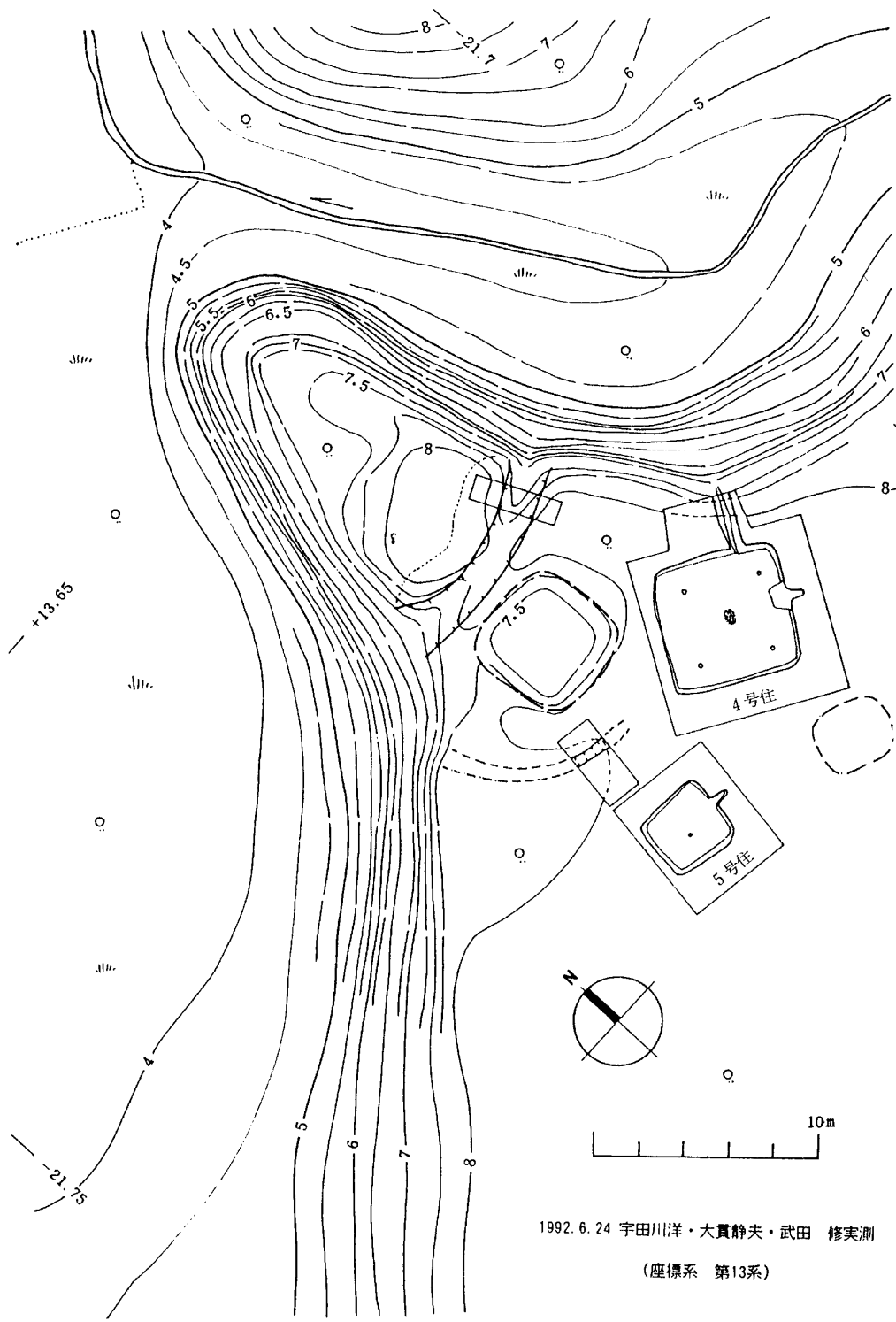


Fig. 25 チャシ状溝遺構土層図



1992. 6. 24 宇田川洋・大貫静夫・武田 修実測
 (座標系 第13系)

Fig.26 チャシ状溝遺構周辺の地形図

第七節 6号 竪穴

調査の経過

本遺跡の北西側周辺に11軒の竪穴が確認されている。この竪穴のうち本竪穴は最も台地の端部に位置している。1991年11月に竪穴の時期を確認するための試掘調査を行った。調査前の状況は直径6.20m、深さ30cm程の円形を呈していた。試掘調査は竪穴中央部で東西に1本のトレンチを設定し、床面出土遺物から続縄文期の竪穴であることを確認した。本年度の調査は試掘の際のトレンチの一面を土層観察用ベルトとして残し、新たに6-A、6-B、6-C、6-Dグリッドラインを土層ベルトとして調査を開始した。表土を剥土した段階で西壁側で黒曜石のフレークが集中していた。時期は不明である。

基本土層は表土、暗褐色土に分層され暗褐色土は厚いところで25cmを計る。北壁側の土層をみると2層の茶褐色土と3層の暗褐色土を切り込んで見える土層ラインがあるが、この土層面は粘性に富み、竪穴中央部まで伸びてくるところから自然堆積によるものと判断される。6-C-0グリッドでサブトレンチを入れると地山の上部に焼土が認められた。本竪穴より古い時期の遺構と考えられる。

遺 構

本竪穴 (Fig.27、P 1、V-1) は東西6.20m、南北7.70mの楕円形を呈する。出入り口と考えられる舌状部は東壁の隅に位置している。舌状部は約1.50mを計る。壁高は北壁から東壁にかけて約30~50cmで、南壁から西壁が約20~30cmである。壁は斜めに立上がる。炉跡は南壁に近く、出入り口の正面に位置している。床面は炉跡の周辺が浅く窪み、出入り口部はやや盛り上がっている。柱は壁の周辺に多いようである。主柱穴と思われるものは径が15~20cm、深さ25~30cmで不規則に配置されている。壁柱は北壁、東壁、南壁の際に配置されている。径6~15cm、深さ12cmであり規則的である。

ピット 4

本ピットは竪穴の中央部にある。長軸85cm、短軸55cm、深さは15cmを計る。遺物は出土していない。

ピット 5

本ピットはピット 4 と近接した位置にある。長軸85cm、短軸55cm、深さは10cmを計る。遺物は出土していない。

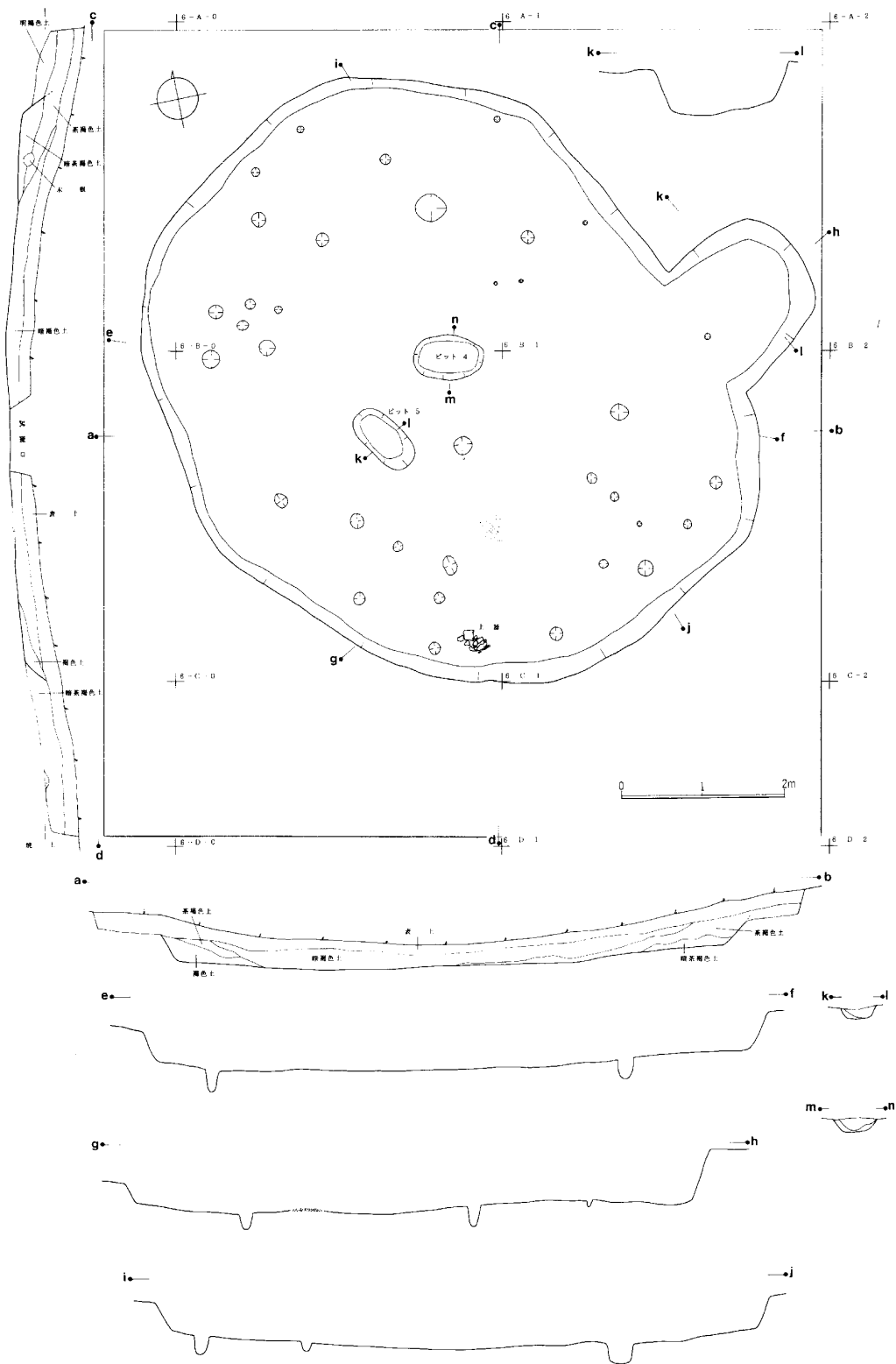


Fig.27 6号竖穴平面図

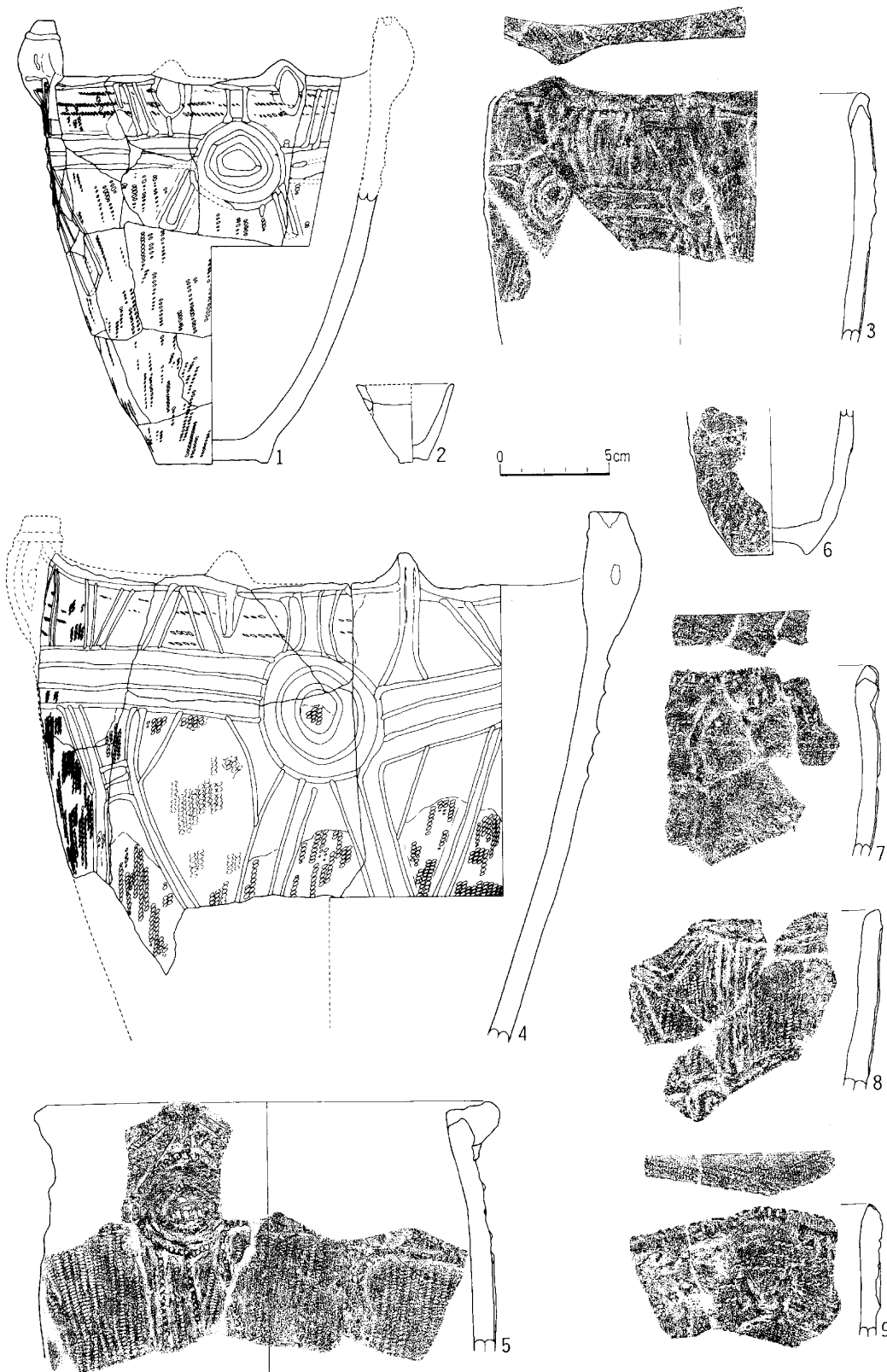


Fig. 28 6号竖穴床面(1、2)、埋土(3~9)出土土器

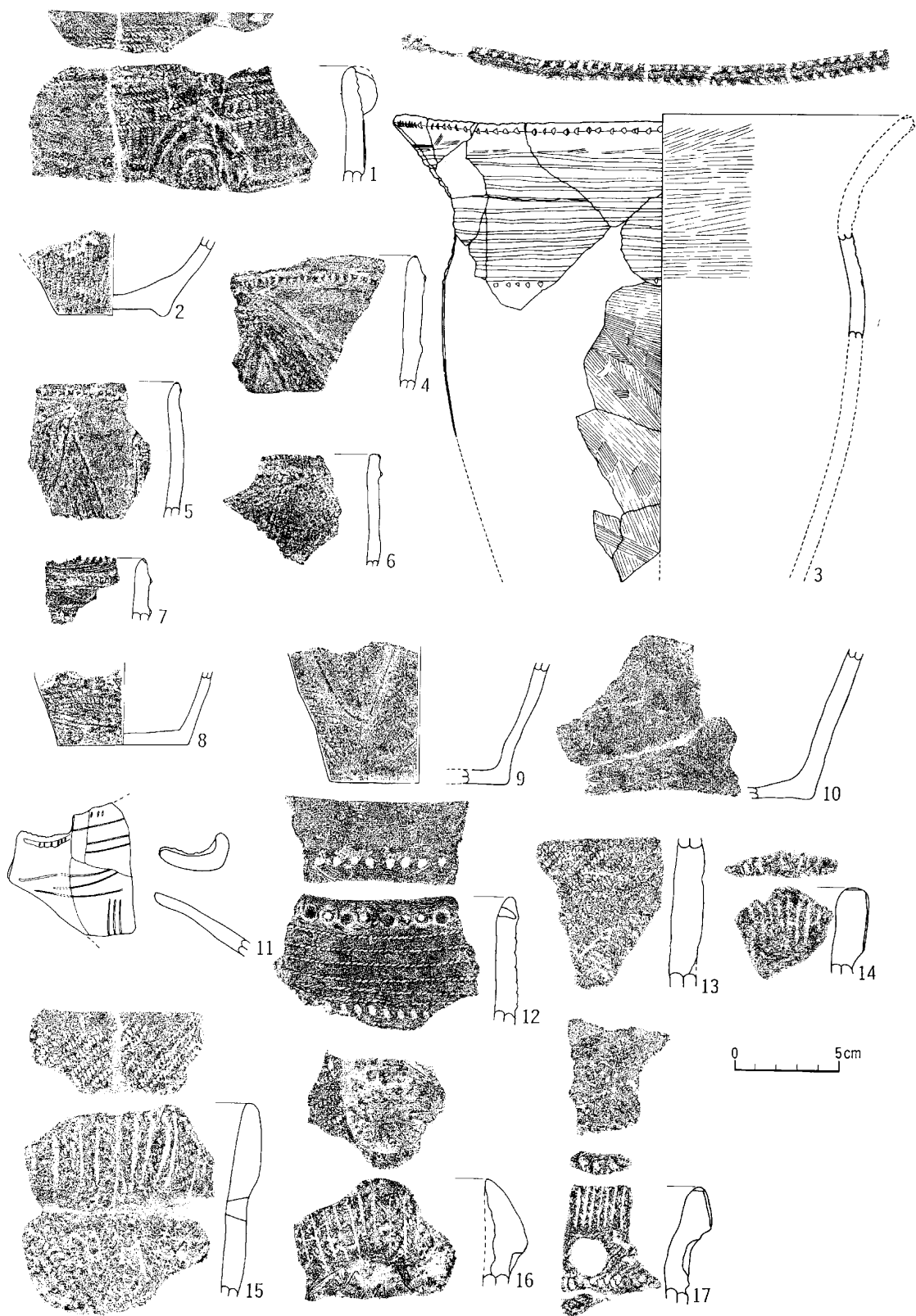


Fig. 29 6号竖穴埋土(1~17)出土土器

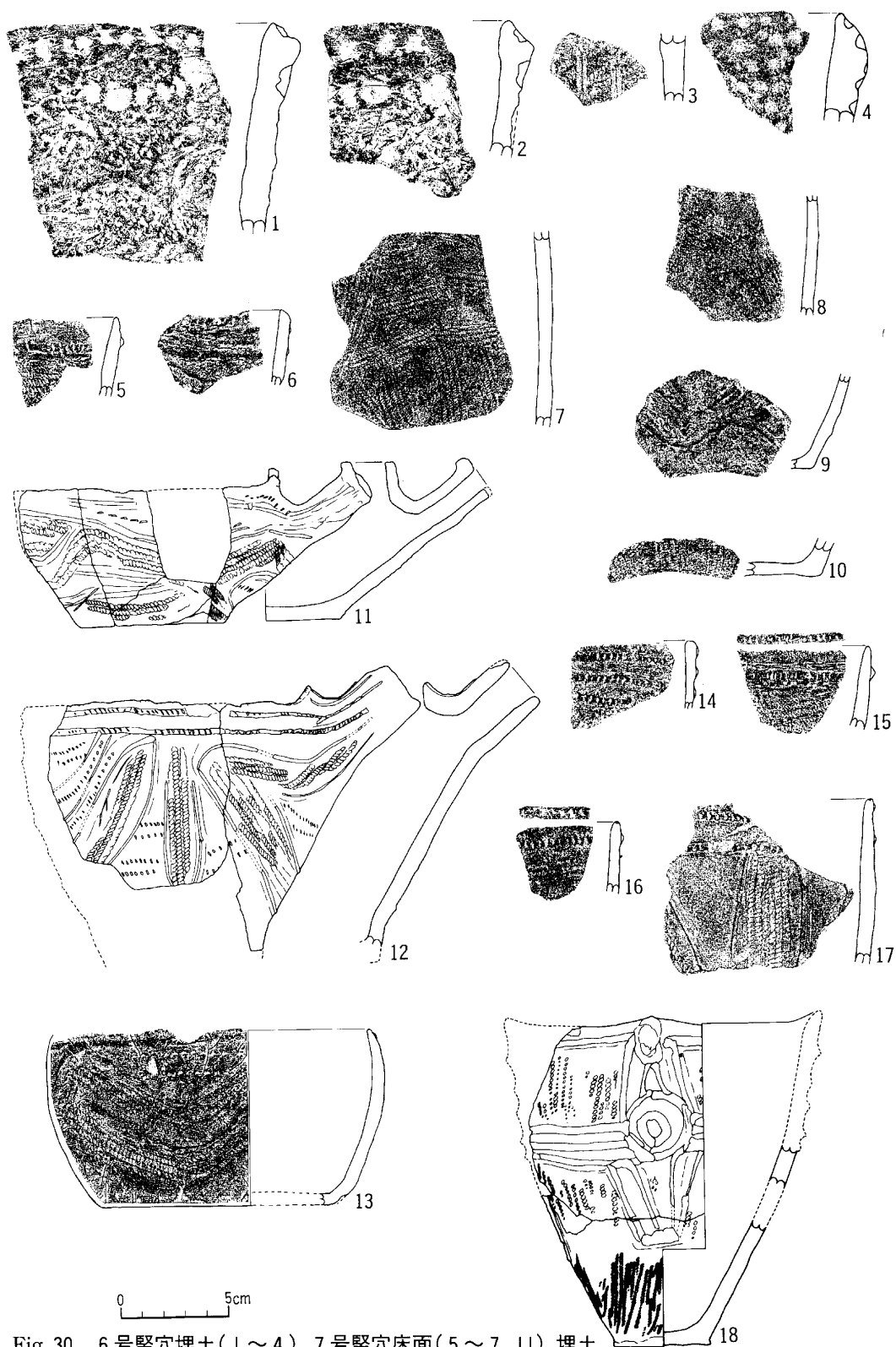


Fig. 30 6号竖穴埋土(1~4)、7号竖穴床面(5~7、11)、埋土(8、9~18)出土土器

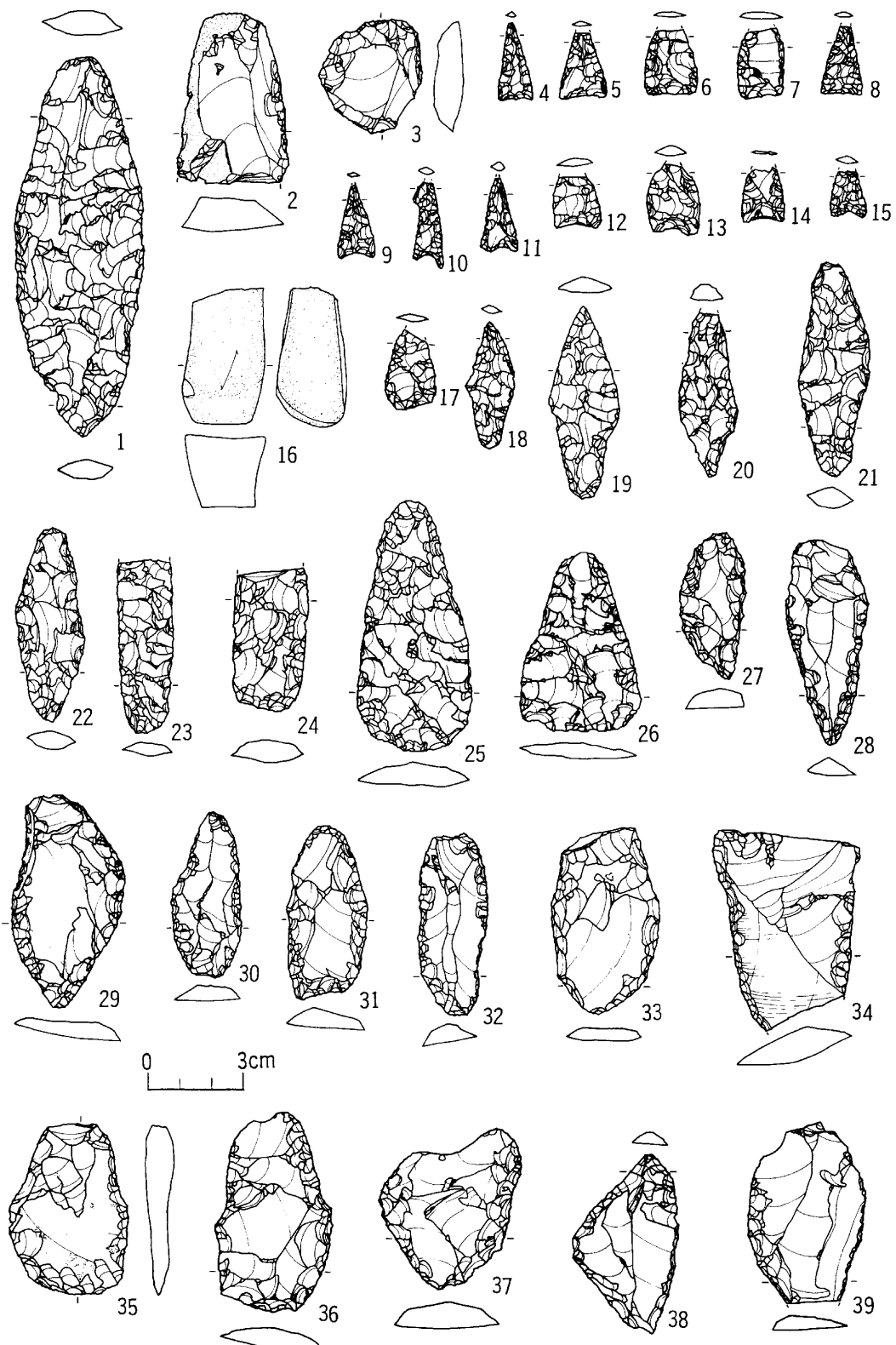


Fig.31 6号竖穴床面(1~3、16)、埋土(4~15、17~39)出土石器

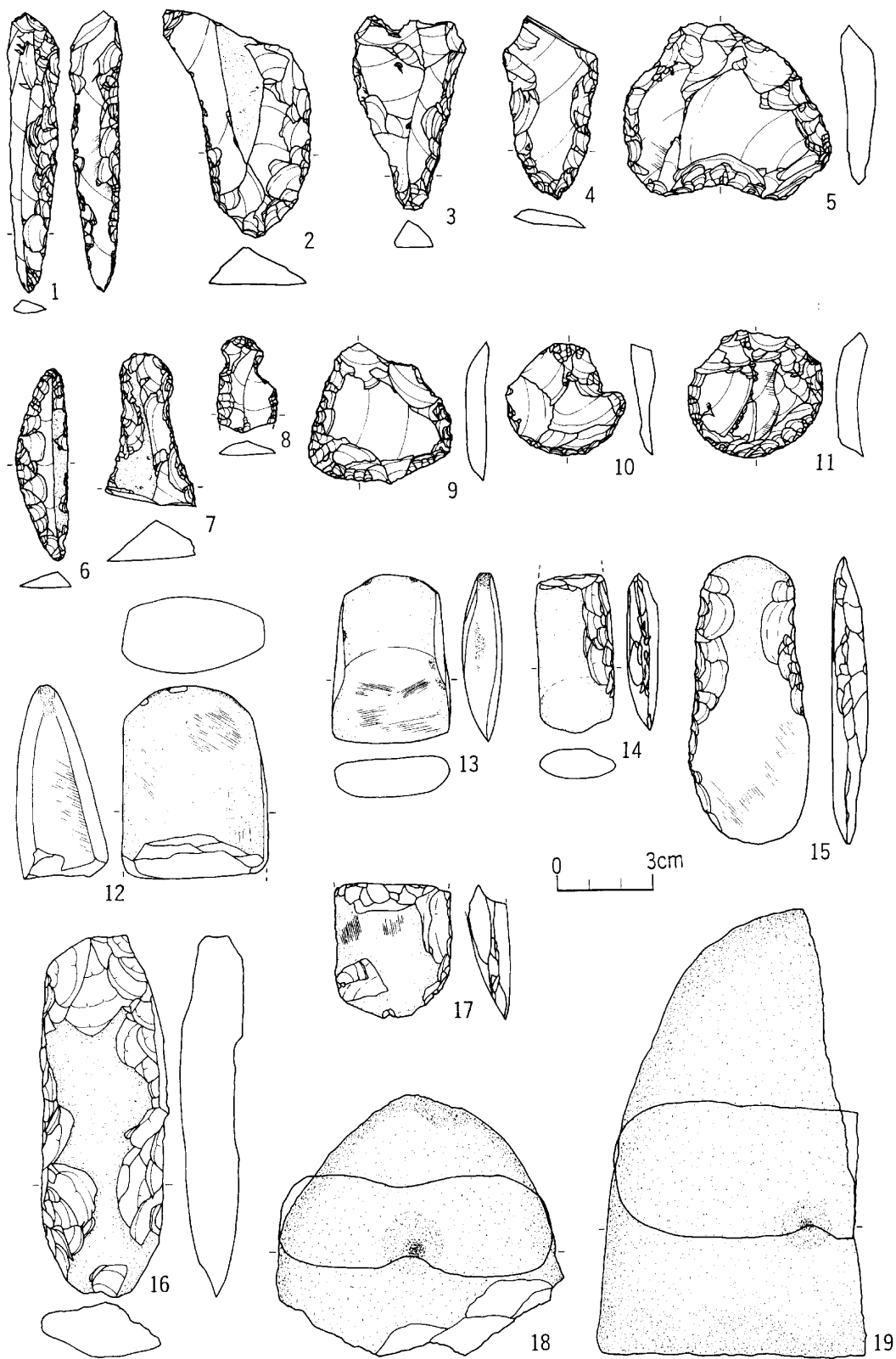


Fig. 32 6号竖穴埋土(1~19)出土石器

遺 物

本竪穴の床面からはFig.28-1～2に示す土器が出土している。1は口縁部に一對の大突起、二對の小突起がみられる。口縁部には縄線文があり、同心円文は2對の小突起の下部に施文されている宇津内II b式である。2は無文のミニチュアである。口縁部に6～7mmの粘土の貼り付けが認められる。製作過程で付けられたもので文様を意識したものではないと考えられる。3～9は口縁部、胴上部に縄線文、同心円文、発達した隆起帯が施される宇津内II b式である。(P 1, XVI-5)

Fig.29-1は宇津内II b式。2は宇津内系の底部であろう。3は擦文早期に比定される土器である。口縁部が外反し鉢形土器で、口唇断面は四角を呈し刻みが入る。幅1～1.5mmの13本の横走沈線が施され、沈線下部には三角形の刻文が施文されている。胴下部、内面はハケにより整形されている。4～11は後北C 2・D式である。11は注口土器。12は宇津内II a式。13は胎土に繊維を含まないトコロ五類。14～17は繊維を含むトコロ六類で口縁部に沈線が施される。

Fig.30-1～3はトコロ六類である。1、2は繊維を含み口縁部に押し引き、円形竹管文が施される。4は口縁が三角形を呈しており横、下方からの刺突文がみられる。胎土には小砂利を含むシュブノツナイ式である。

床面からはFig.31-1～3、16が出土している。1はナイフ。2は側削器。3は短削器。16はト石。4～15は無茎石鏃。17、18は有茎石鏃。17は基部が欠失しているが有茎石鏃と考えられる。19、20は石槍。21～26はナイフ。17～39は側削器である。

Fig.31-1～4、6、7は側削器。8はつまみ付きナイフ。5、9～11は短削器。12～15、17は磨製石斧。16は打製石斧の未製品と思われる。18、19は凹み石。

小 括

本竪穴は長軸7.70m、短軸6.20m程の楕円形を呈し、東壁隅に出入り口と考えられる舌状部がある。時期は床面出土遺物から宇津内II b式と考えられる。

第八節 7号 竪穴

調査の経過

本竪穴は6号竪穴の東側約4mに位置する。6号竪穴同様に1991年11月に時期確認のため試掘を行っており、後北C2・D式期であることを確認した。調査前の形状は直径約8mの円形を呈し、深さは6号竪穴より浅く約20cmであった。本年度の調査は試掘の際のトレンチの一面を土層観察用ベルトとして残し、新たに7-A-1、7-B-1、7-C-1グリッドラインを土層ベルトとした。調査は試掘で確かめられた床面まで掘り下げ、壁は立上りの明瞭な西壁から南壁、東壁、北壁の順に検出した。

基本土層は表土層、茶褐色土層の2層の分層され、さらに壁から明褐色土と暗褐色土が流れ込んでいる。埋土出土の遺物は茶褐色土層からが多い。

南壁を検出するため7-C-1グリッドを拡張したところFig.38-1に示すトコロ六類とフレーク・チップの集積が確認された。出土層位は2層の暗褐色土である。

遺 構

本竪穴は (Fig.33、P1、V-2) 長軸7.70m、短軸7.30mを計る。北壁、西壁、南壁にかけてほぼ丸みを帯びるのに対し東壁は不整形である。壁高は20~50cmを図り、床面から皿状に立ち上がる。炉跡は中央部にある。長軸1.15m、短軸65cmの広い範囲で焼けている。支柱穴と思われるものは径12~20cm、深さ20~30cmのもので壁際近くから検出された。支柱穴は径6~10cm、深さ5~10cm支柱穴の周辺で不規則に配置されている。

ピット6

径80~90cm、深さ17cmの円形を呈する。

ピット7

径95cm~1mの円形を呈する。深さは竪穴床面から17cmを計る。西壁上部から構築されている。出土遺物は認められない。

ピット8

長軸1m、短軸70cm、深さは西壁7cm、東壁15cmを計る。形態は楕円形を呈する。出土遺物は認められない。

ピット9

径50~70cm、深さ10cmの円形を呈する。出土遺物は認められない。

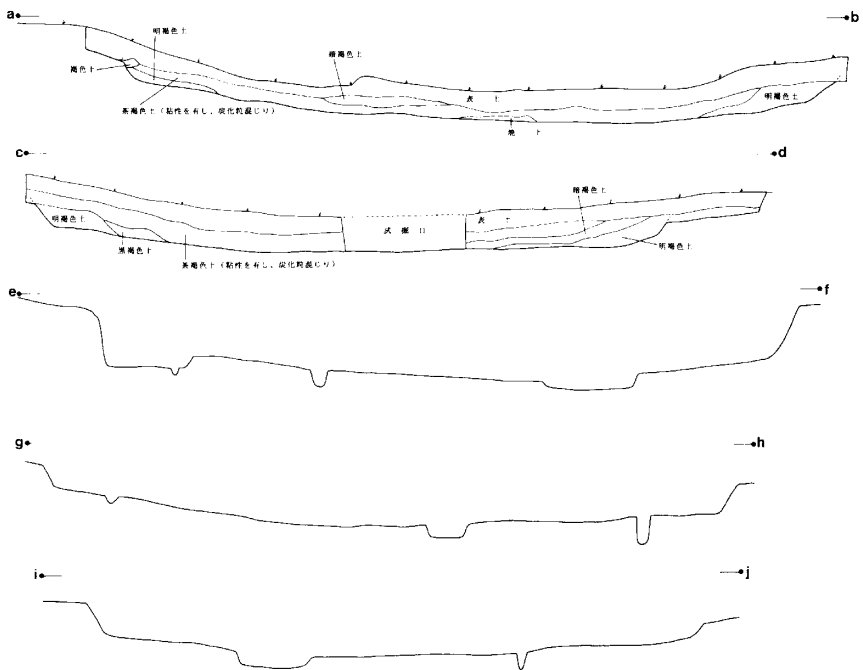
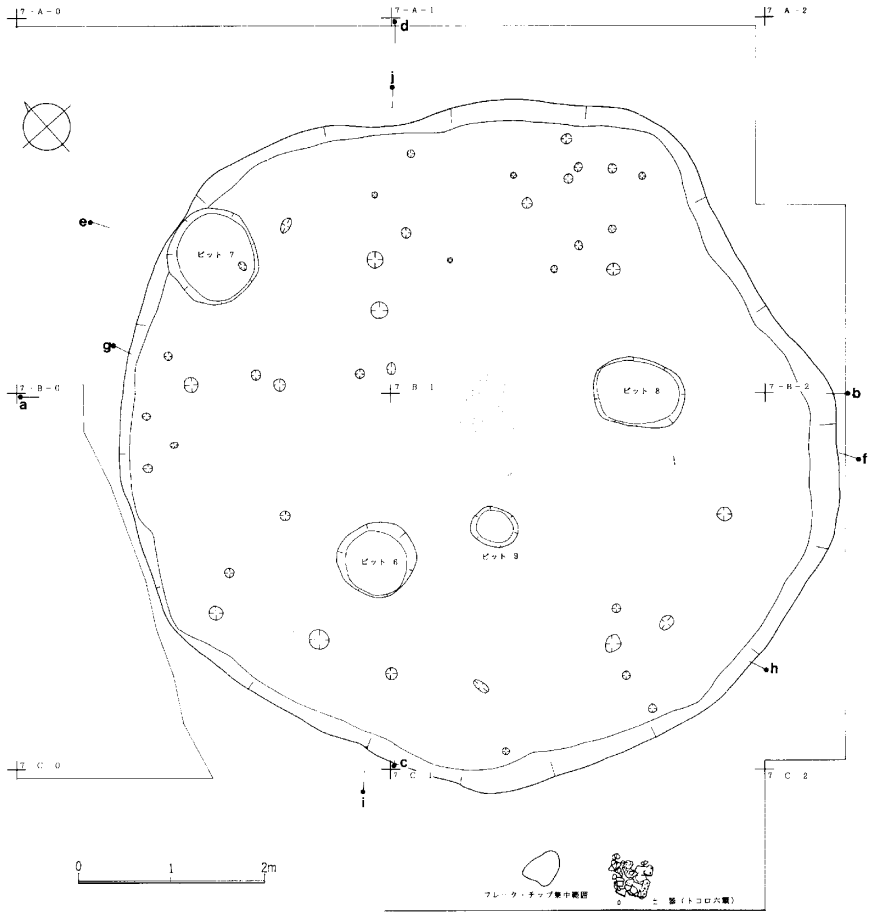


Fig.33 7号竖穴平面図

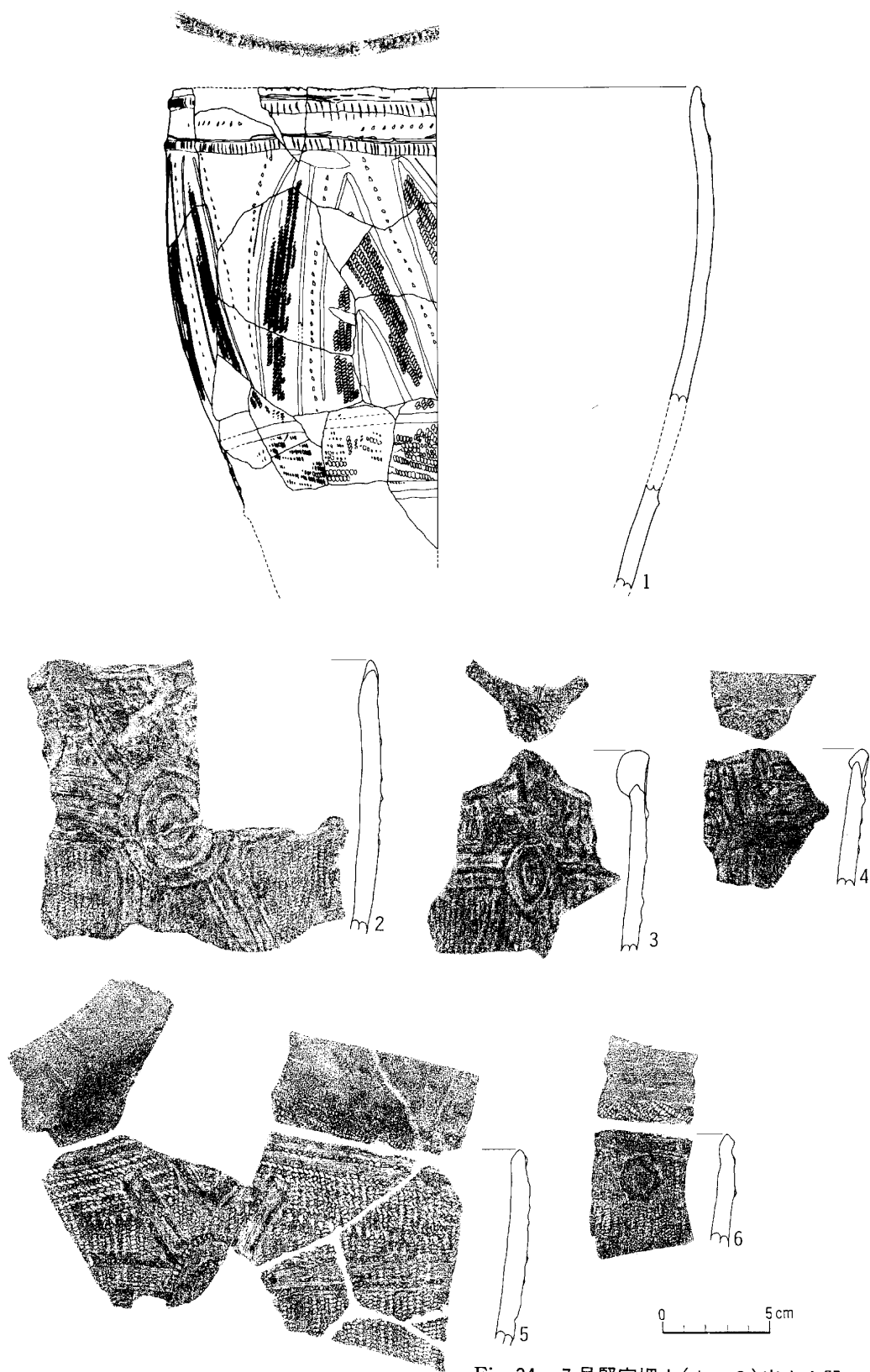


Fig. 34 7号竖穴埋土(1~6)出土土器

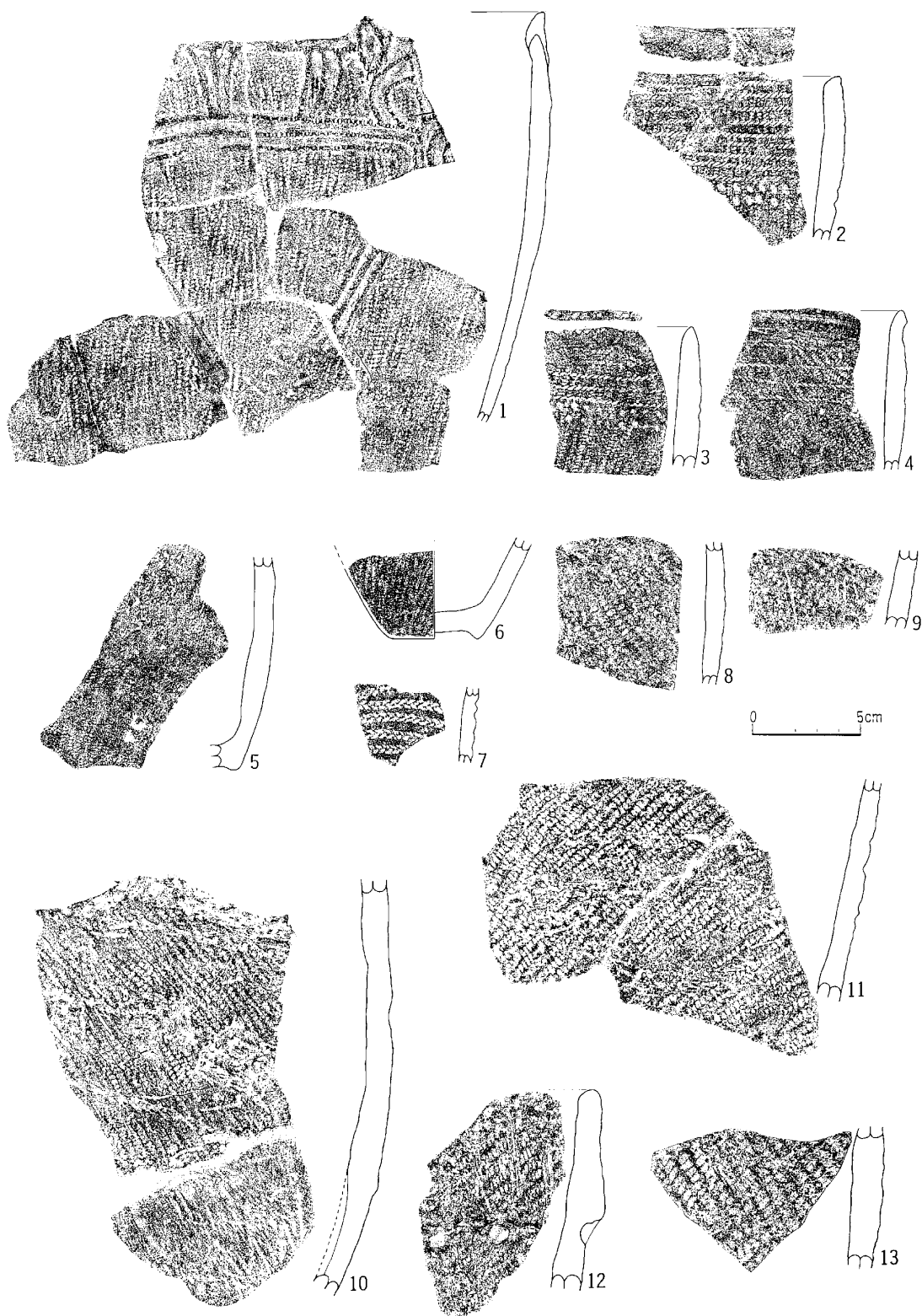


Fig. 35 7号竖穴埋土(1~13)出土土器

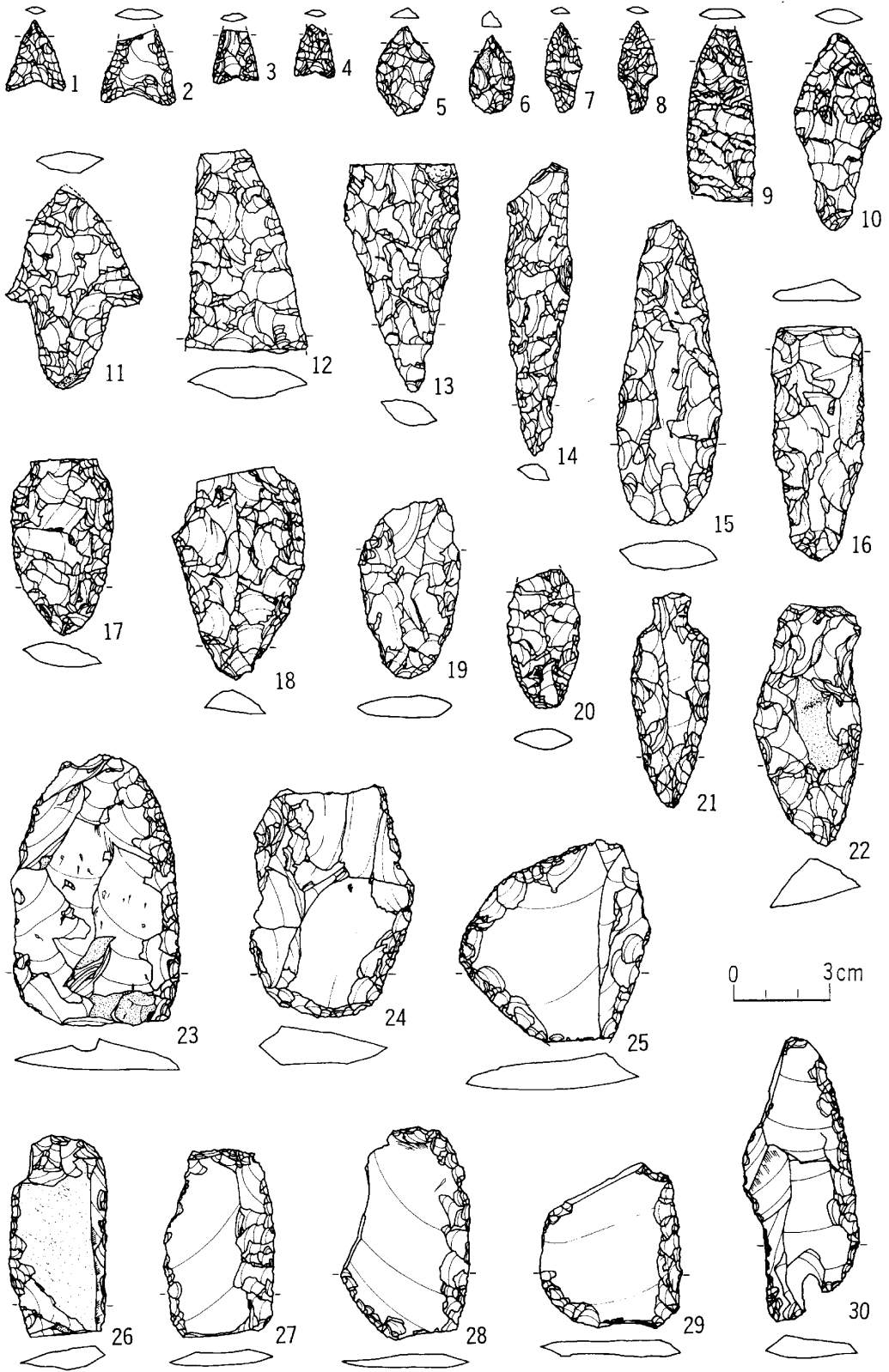


Fig. 36 7号竖穴埋土(1~30)出土石器

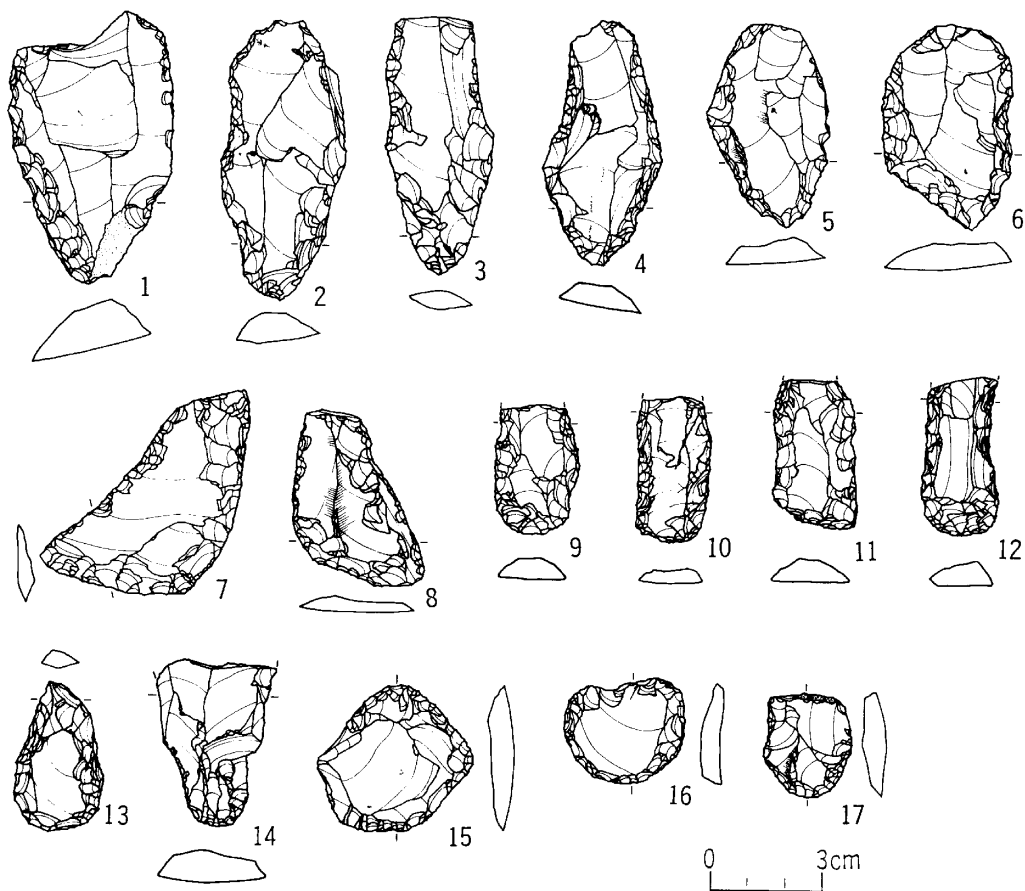


Fig.37 7号竖穴埋土(1~17)出土石器

遺 物

本竖穴の床面からはFig.30-5~7、11に示す後北C 2・D式が出土している。5、6は口縁部に1~2条の隆起帯が施されている。11は注口土器である(P 1, VII-3)。埋土からも8、9~18の後北C 2・D式が出土している。12は注口土器(P 1, VII-4)。13はボール形の土器である。18は胴部に同心円が施される宇津内II b式である(P 1, VII-1)。

Fig.34-1は後北C 2・D式である(P 1, VII-2)。口縁部径は約25cmを計る。幅約5mmの太めの隆起帯が2条まわり刻みが施されている。同部は鋸歯状に列点文、帯縄文が施文されている。2~6は宇津内II b式である。

Fig.35-1~6は宇津内II b式と考えられる。1は隆起帯が発達し、口縁部に小突起をもつ。2~4は縄線文が施されている。7は組紐圧痕文があり縄文晩期中葉と考えられる。8は胎土に繊維を含まないトコロ五類、9~13は繊維を含むトコロ六類である。9、12には沈線が施されている。



Fig. 38 7号竪穴発掘区出土土器(1)

石器はすべて埋土から出土している。Fig.36- 1～9は石鏃。10、11は石槍。12～22はナイフ。23～30は側削器。

Fig.37- 1～6は側削器。5、6は刀部が切り出し形を呈する。7、8は靴形石器。9～13は肉厚の縦長剥片を利用した側削器。14はエンドスクレパー。15～17は短削器。

Fig.38- 1は7号竪穴発掘区から出土したトコロ六類である（P 1. XVIII- 1）。底部は損失しているが器高約50cmを計ると思われる。口縁部は巾が狭く裏面にも縄文が施されている。断面は切り出し形を呈し8個の小突起と円形文が施文されている。円形文の中央部はわずかに突き出ている。

小 括

本竪穴は長軸7.70m、短軸7.30mの不整円形を呈する。床面から後北C 2・D式が出土しており、この時期のものと考えられる。

出入口部と考えられる舌状の張り出しは認められなかったが、7-B-2グリッドの杭部の付近がやや突き出ており、その可能性があるかもしれない。

第九節 8号 竪穴

調査の経過

本竪穴は6号、7号の竪穴の南側約7mに位置する。1991年11月に試掘を行っているが、調査前の形状は南北に長い楕円形を呈する浅い窪地であった。試掘時の土層観察ベルトは竪穴中央部よりズレて設定したため今回の調査はグリッドラインを基準に新たに設定した。表土を剝土すると黒褐色土層及びその下層に茶褐色土層が現れた。この段階でピット8～11の掘り込みが確認された。黒褐色土層からは続縄文土器が多く出土している。茶褐色土層を剝土すると黄褐色ロームの床面がありこれを追いかけて壁の検出を行った。壁のところどころは立上がりが見え不明な部分も見受けられたため、西壁2本、北壁1本、南壁1本のサブトレンチを設定した。

この結果八角形の竪穴であることが明らかになった。8-B-3グリッド杭周辺には暗黄褐色土が堆積しているがこれは東側にある竪穴の排土と考えられ、中からトコロ六類が出土している。試掘時は続縄文期の竪穴と判断していたが平面形態、床面出土遺物から縄文中期の竪穴と考えられる。

遺 構

本竪穴 (Fig.39、P1.VI-2) は長軸9.40m、短軸7.40mを計り平面形態は八角形を呈する。床面はなだらかであり、壁は斜めに立上がる。炉跡は径20cmで中央部に位置する。支柱穴と思われるものは径14～25cm、深さ15～20cmで不規則に配置されている。壁柱穴は5～10cm、深さ5～12cmで南壁の石皿のある周辺、東壁で規則的に配置されている他は南東壁側のように柱がみられない部分もある。支柱穴の周辺には支柱穴が配置されている径8～10cm、深さ10cmである。北壁際の皿状の落込み本竪穴に伴うもので、深さ5cmである。

ピット8

このピットは土層ベルトc、dラインにかかっている。竪穴の茶褐色土層を切り込んで構築されており、長軸95cm、短軸77cmの楕円形を呈する。壁高は確認面から50cmを計る。

ピット9

このピットはピット8に切られている。ピット内に2個の小柱穴があるが竪穴に伴うものでありこのピットのものではない。長軸90cm、短軸76cm。壁高は確認面から7cmを計る。

ピット10

このピットの規模は長軸1.38m、短軸88cmの楕円形を呈する。壁高は確認面から33cmを計る。埋土から後北C2・D式の細片が出土している。掘り込み面は茶褐色土層である。

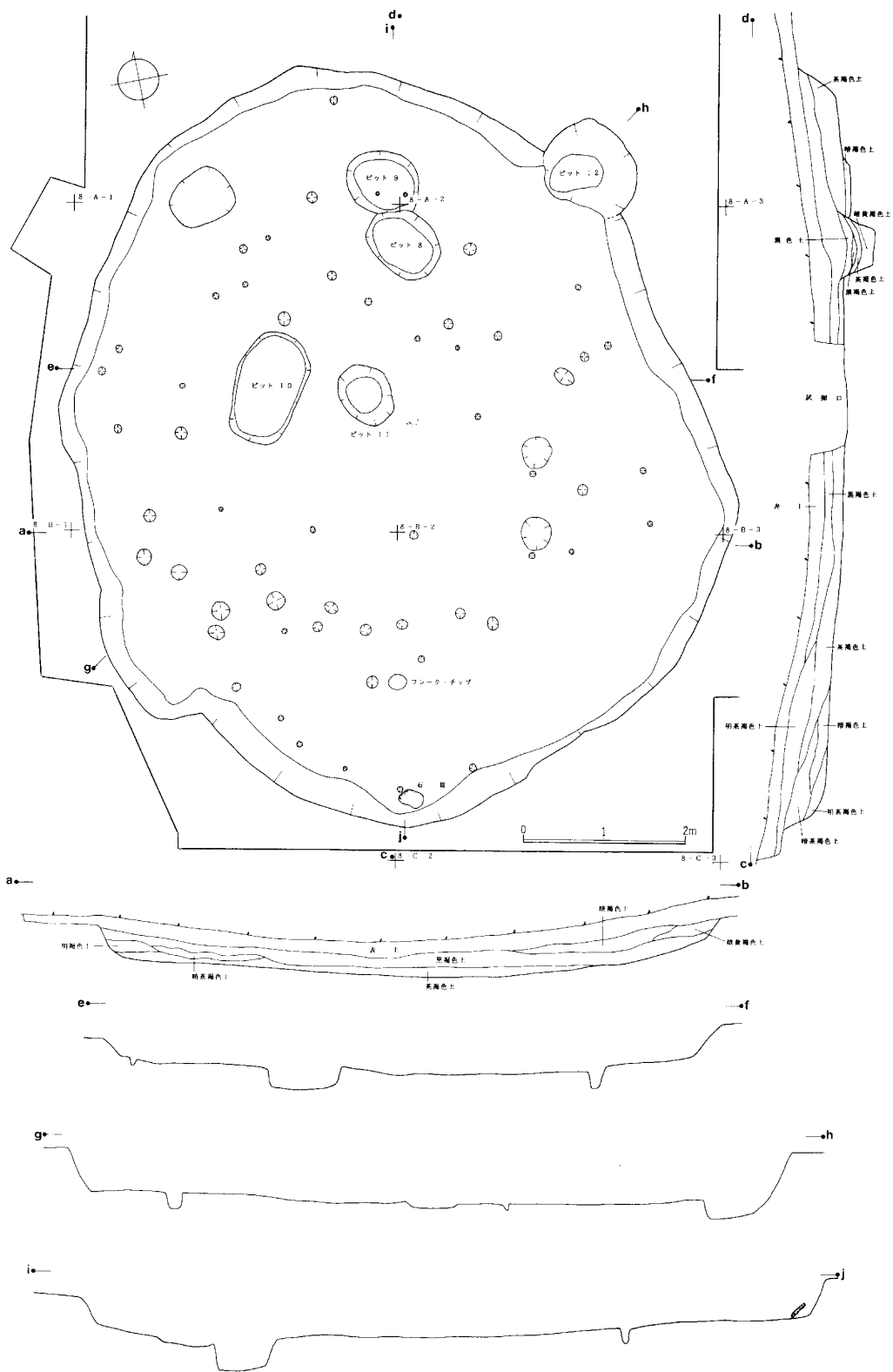


Fig.39 8号竪穴平面図

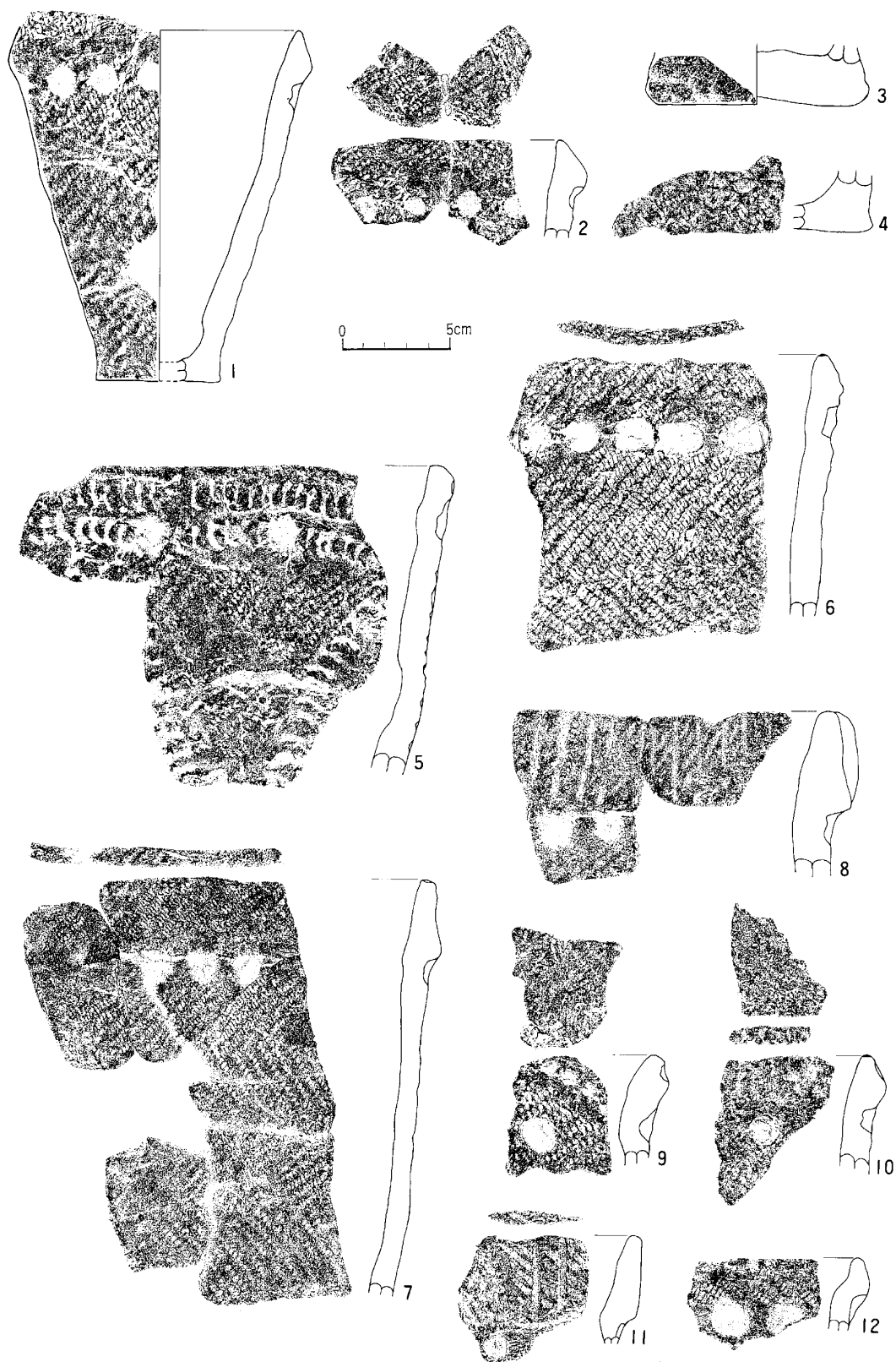


Fig. 40 8号竖穴床面(1~8)、埋土(9~12)出土土器

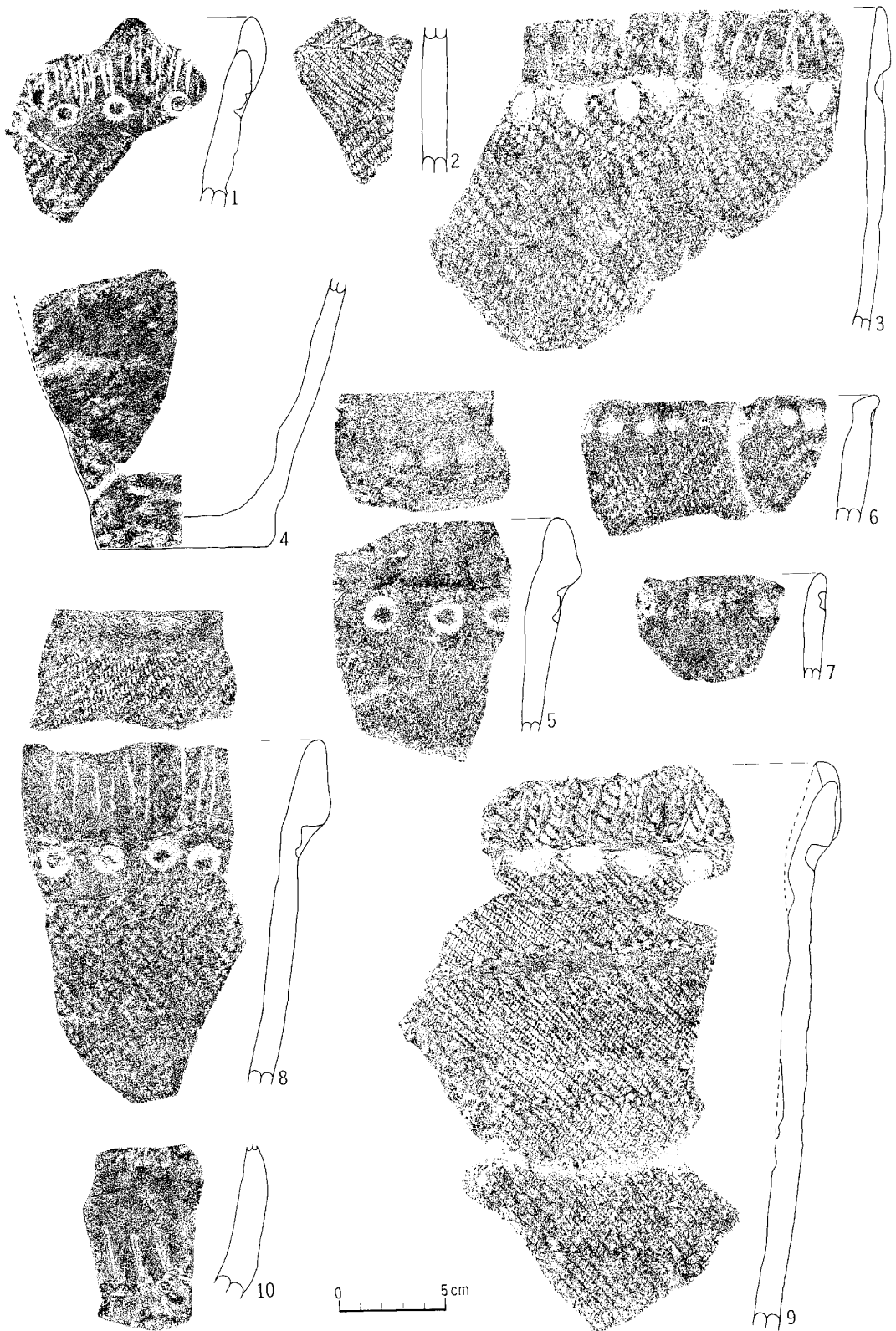


Fig.41 8号竖穴埋土(1~10)出土土器

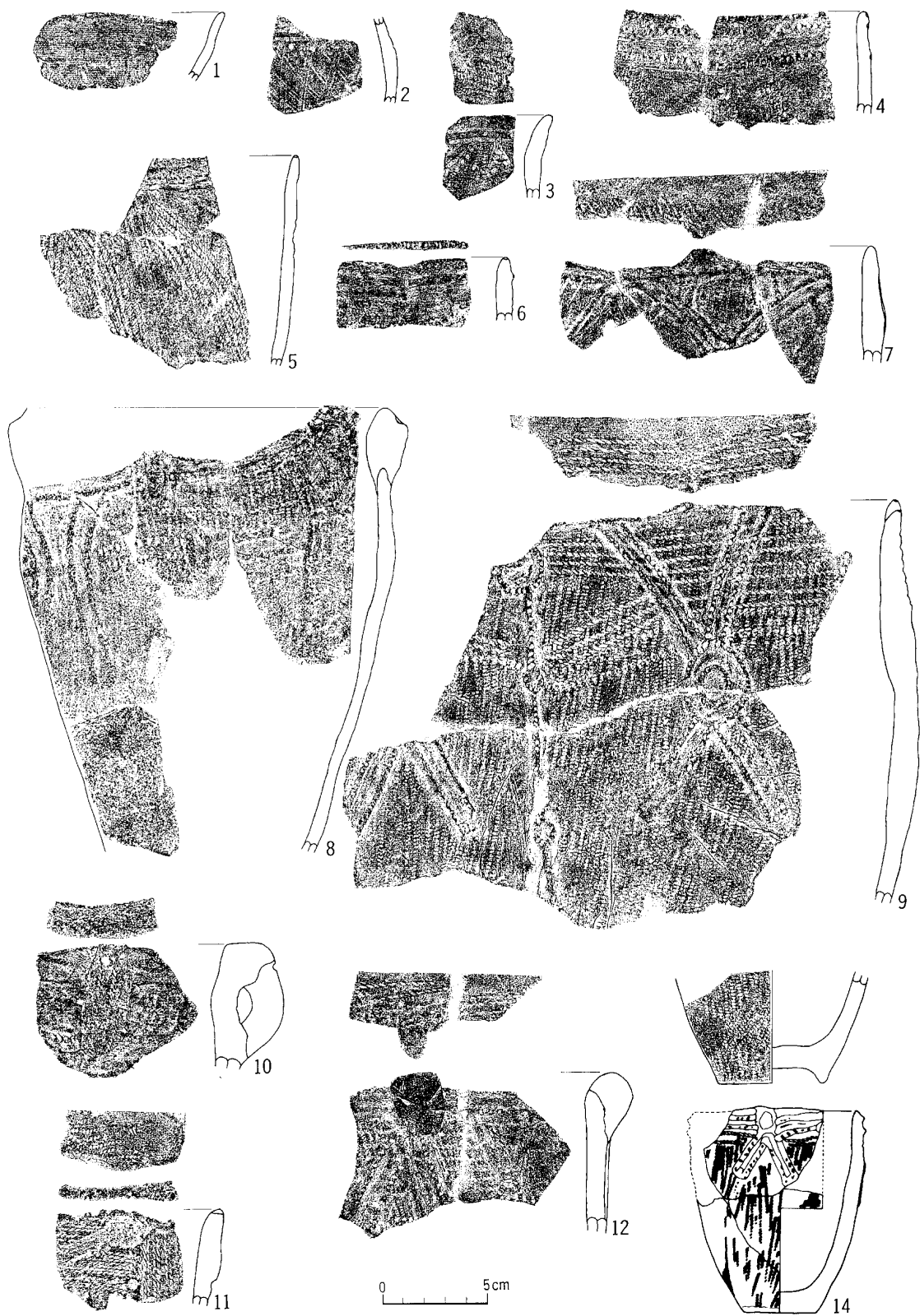
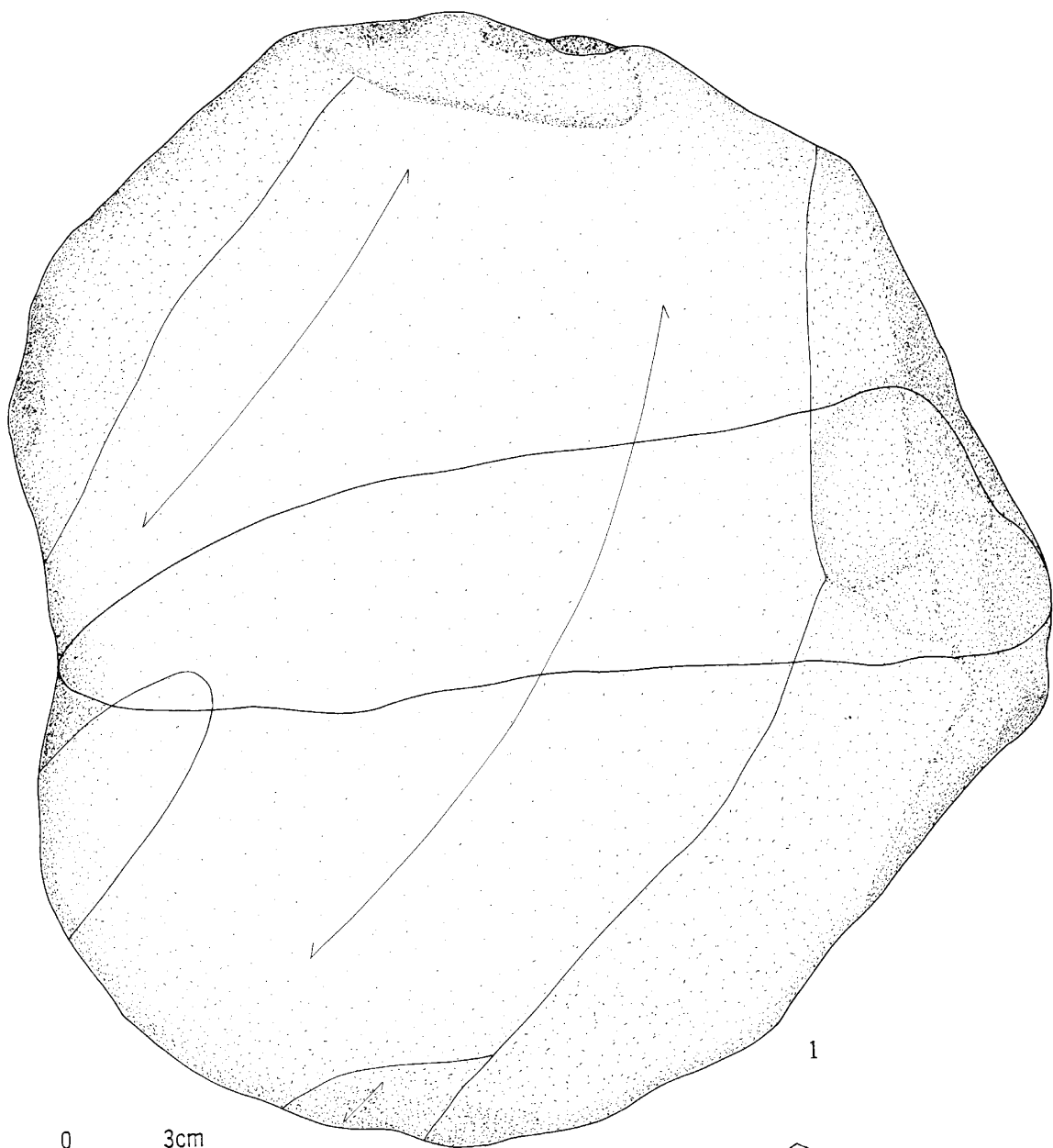


Fig.42 8号竖穴埋土(1~14)出土土器



0 3cm

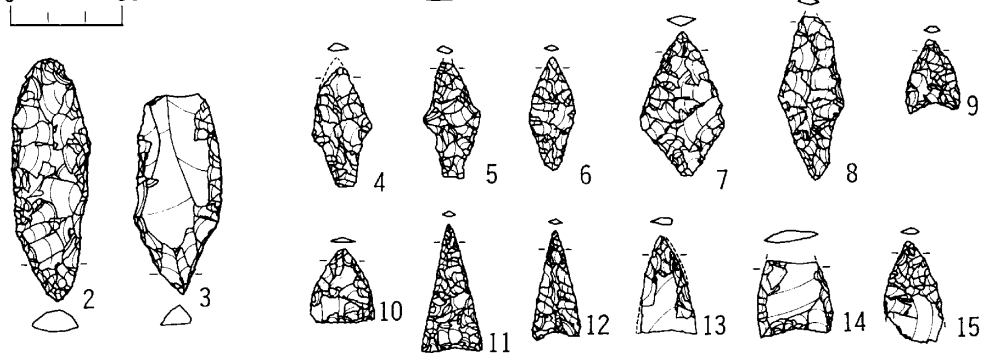


Fig.43 8号竖穴床面(1~3)、埋土(4~15)出土石器

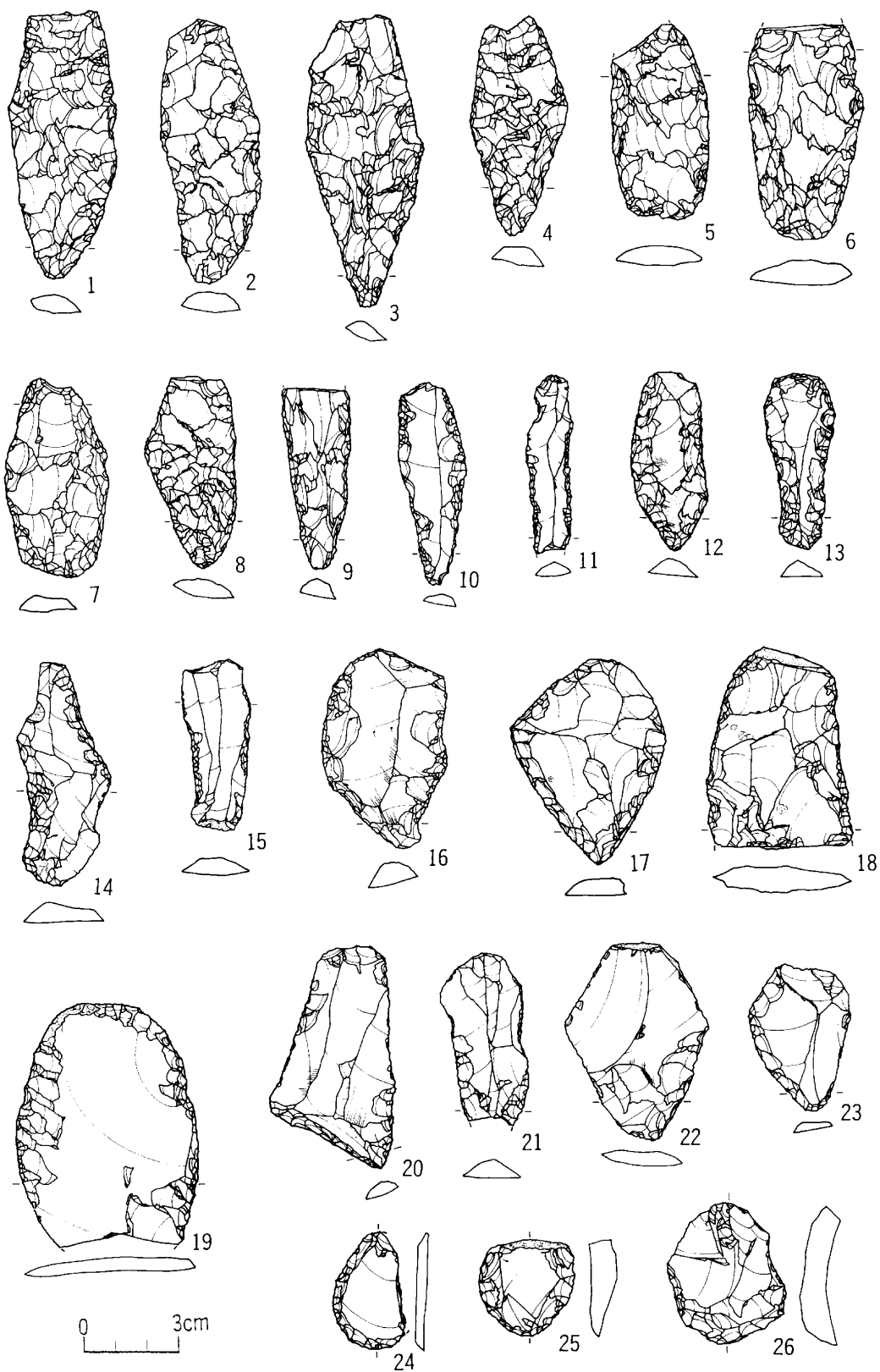


Fig.44 8号竖穴埋土(1~26)出土石器

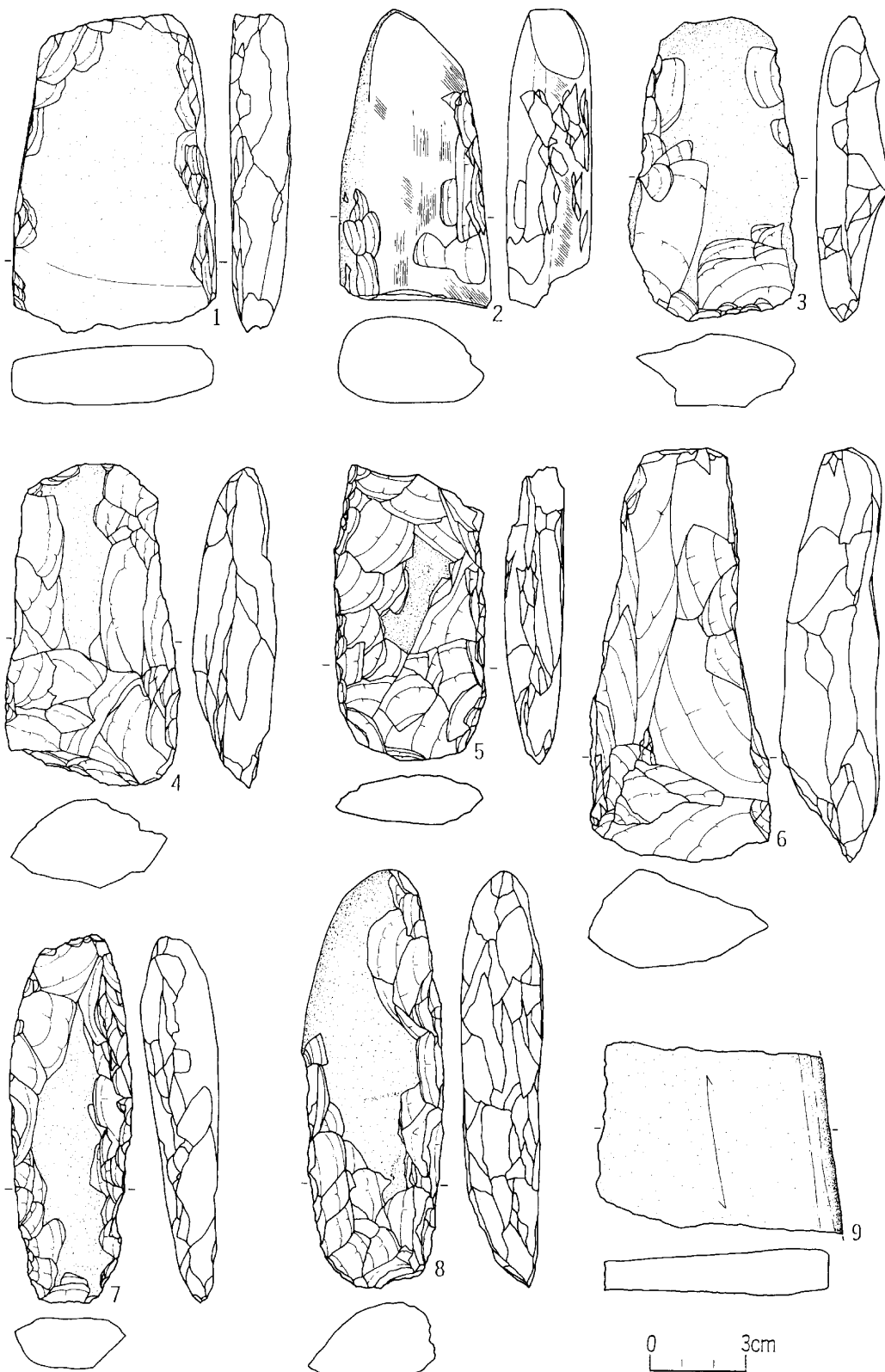


Fig.45 8号竖穴埋土(1~9)出土石器

ピット11

このピットの規模は長軸78cm、短軸65cmの楕円形を呈する。壁高は確認面から15cmを計る。掘り込み面は茶褐色である。

ピット12

このピットは東壁を検出中に発見した。直径は約1.22mの円形を呈するのであろう。壁高は確認面から75cm。底部は平坦ではなくゆるく傾斜する。底部からフレーク・チップがまとまって出土している。

遺 物

床面からはFig.40-1～9の土器が出土している。1～5は胎土に繊維を含んでいる。1、2は口縁部の隆帯が13cmで下部に円形竹管文が施される。3、4は底部。5はトコロ六類に認められる肥厚帯でなく幅1cm程度の細い隆帯が部分的に貼られている。押し引き文は隆帯の上部と下部、及び胴部に斜めに施文されている。隆帯下部には円形竹管文が施されている。6～9は胎土に砂粒が多く混入されたトコロ五類であろう。6、8は少量の繊維を含む。9、10はトコロ五類である。8、9は口縁部に縦の隆帯がある。10は底部付近のもので沈線が施される。

Fig.41-1、2、4はトコロ六類。1は口縁部に小突起があり沈線文、円形竹管文が施されている。5、8、9、10はトコロ五類である。8、9は口縁部に縦の隆帯がある。10は底部付近のもので沈線が施される。

Fig.42-1は擦文期の高杯口縁部。2は斜格子目と上部に太い沈線を施している。沈線下部には刺突が加えられている。続縄文前半期とかんがえられよう。^{注1)} 3は口縁部が外反し、2条の横走沈線の下部には山形の沈線が施され、それに縄端による刺突が加わる。^{注2)} 4～6は後北C2・D式。7～10、12～14は宇津内II b式。14は縄線文と横走、垂下する隆帯が施されている。11は下田ノ沢系であろう。

Fig.43-1は南壁に立てかけた状態で出土した石皿である。2はナイフ。3は側削器。4～8は有茎石鏃。9～14は無茎石鏃。15は基部が欠失した石鏃。

Fig.44-1～8はナイフ。9～23は側削器。

Fig.45-1、2は磨製石斧。3～8は打製石斧。9は砥石。

小 括

本竪穴の平面形は八角形を呈する。規模は南北がやや長く9.40m、東西は7.40mを計る。炉跡は中央付近にある。竪穴の時期は床面出土土器から縄文中期トコロ六類～五類のものと思われる。竪穴内には6基のピットが確認されているが、ピット8、ピット9、ピット10、ピット11は本竪穴より新しい時期のものとして判断される。

注1)

横走下に沈線をめぐらす手法は続縄文前半に多用されるもので、おそらく宇津内II a式の末期より古いと考えられる。大沼忠春氏のご教示による。

注2)

沈線の手法は2に似ている。下田ノ沢I式に似たものか宇津内II a式の新しい段階のものよりは古いと考えられる。大沼忠春氏のご教示による。

第十節 9号竪穴

調査の経過

竪穴の後背地は標高16~19mのやや高い面が西側に伸びている。本竪穴は後背地の高い面の直下であり、地形は北側に向かいなだらかに傾斜している。調査前の形状は直径5m程の円形を呈し、窪みも浅かった。当初は発掘する予定ではなかったが、調査予定の12号竪穴と予想以上に近接していることが判明したためまず本竪穴から着手した。

土層観察ベルトは9-B-0、9-B-1、9-B-2グリッドラインの1本とした。基本土層は表土層、暗褐色土層、茶褐色土層、褐色土層の4層に分層されるがこれらの層からは遺物は出土せず、壁際に堆積している茶褐色土層からのものである。壁際には水分を含んだためであろうか硬くブロック化した砂粒があり、これを剥土すると地山の黄褐色ロームが現れた。

グリッドでは竪穴の排土と思われる黄褐色土が西壁、東壁の周辺に堆積している。9-B-1グリッドではセクションで明らかなように茶褐色土層の落ち込みが確認された。風倒木痕であろう。

遺構・遺物

本竪穴 (Fig.46、P 1、VII-1) は長軸4.20m、短軸3.90mの不整形を呈する。壁は北壁側がなだらかに立上るのに対し他の壁はほぼ垂直である。壁高は北壁が24cm、東壁26cm、南壁43cm、西壁41cmを計る。柱穴、炉跡は認められない。

ピット13

本ピットは南壁を検出中に発見した。ピットは壁穴の南壁部を破壊し、床面を約5cm切り込んでいる。壁高は地上から20cmを計る。規模は長軸1.44m、短軸1.15mの楕円形を呈する。床面は中央部付近がわずかに窪んでいる。出土遺物は認められない。

本竪穴の遺物は全て埋土から出土している。Fig.47-1、2は網目状撚糸文が施されているもので1は口縁部が平縁でやや外反する。横位の押引きの後に円形文が施される円筒下層D式である。3、4はトコロ五類。

Fig.48-1は砥石である。

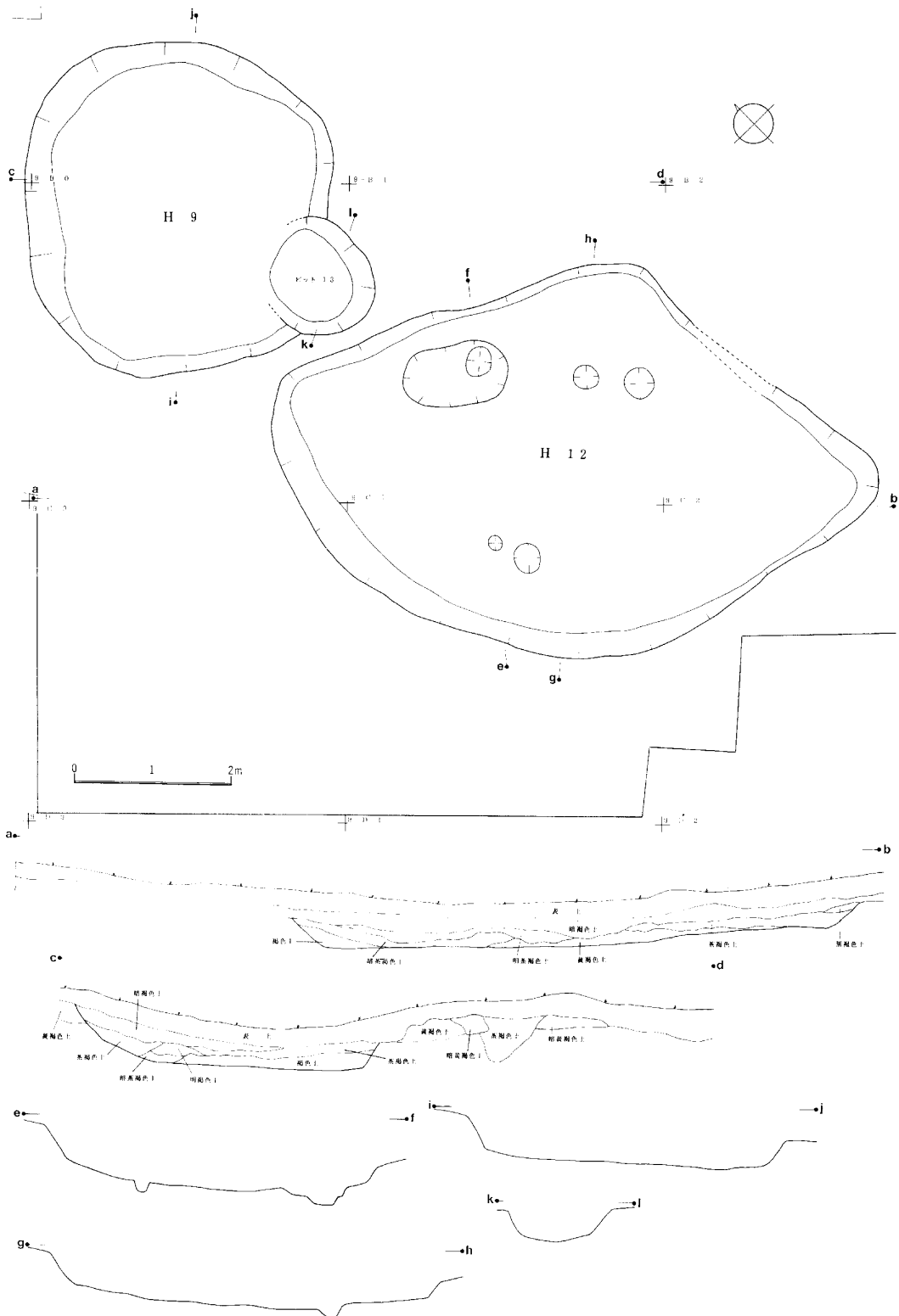


Fig.46 9号、12号竖穴平面图

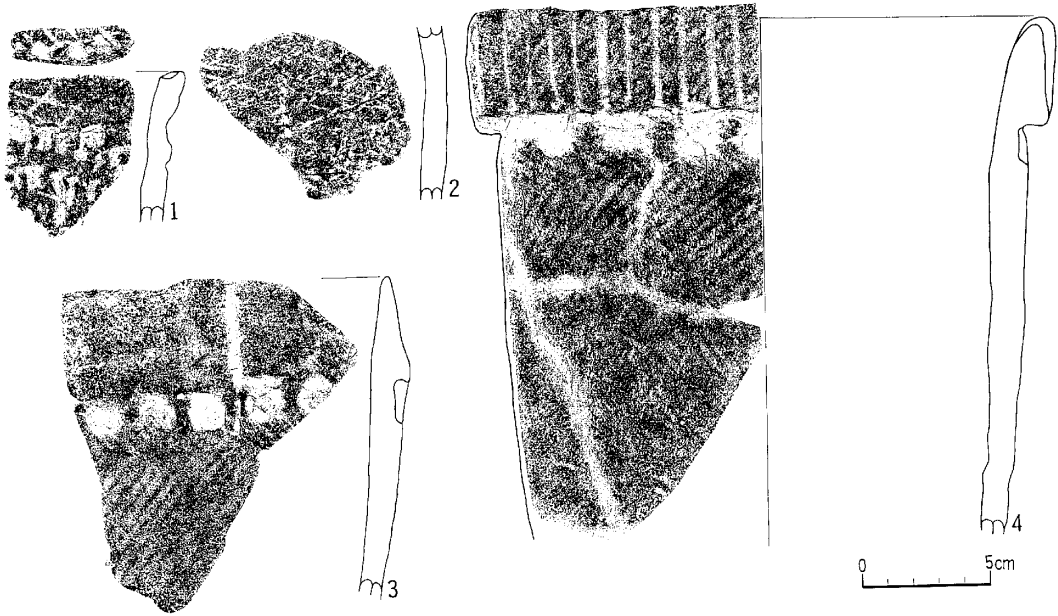


Fig.47 9号竪穴埋土(1~4)出土土器

小 括

本竪穴は一辺3.90m程の方形を呈する。床面には柱穴、炉跡等も確認されないため住居なのかどうか疑問が残る。また、床面からの出土遺物がないため時期も不明である。しかし、周辺のグリッドから出土する遺物はすべて縄文中期のものであり、この時期に関係する遺構と考えられる。

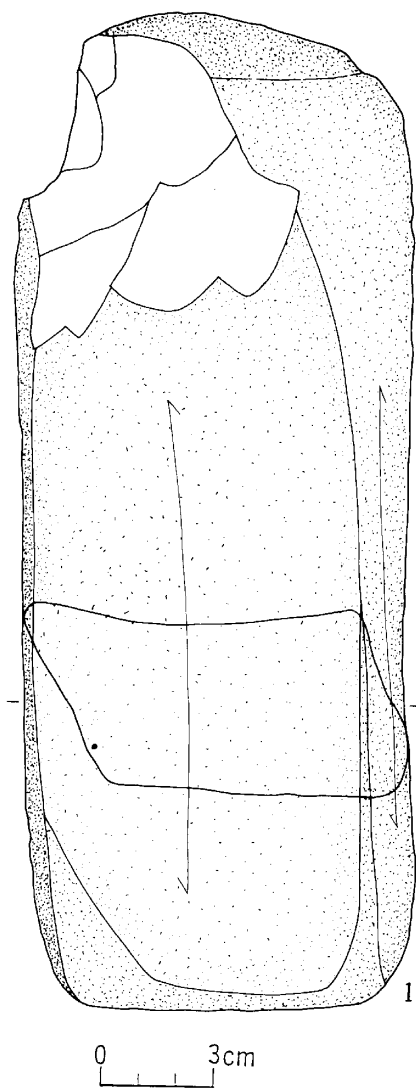


Fig. 48 9号竖穴埋土(1)出土石器

第十一節 10号 竪穴

調査の経過・遺構

本竪穴の調査前の形状は東西4m、南北8m程の浅い窪みを呈していた。表土を剝土すると黒褐色土の面が現れ遺構の輪郭を確認した。予想外に細長い形状である。調査は長軸面の土層観察ベルトを残し、茶褐色土層、暗褐色土層を剝土した。埋土の遺物は茶褐色土まで下げた段階で出土しはじめた。

竪穴の形態は南北方向に長い不整六角形を呈するようである。(Fig.49、P1、VII-2)長軸6.60m、短軸は南側が2.50m、北側が3.10mを計り、やや北側が広いようである。壁高は確認面から概ね40cmであり、斜めに立ち上がる。床面は北側に向け傾斜している。炉跡は中央部にあり比較的良好に焼けている。柱は西壁側に径40cm、深さ8cmのものが1本見られる。主柱穴かどうか不明である。壁柱穴は北壁1本、西壁1本、南壁2本確認された。いずれも径約4～8cm、深さ約6cmである。

遺物

床面・埋土からはFig.50-1～7に示した土器が出土している。全て胎土に繊維を含むトコロ六類である。1は口縁部に8対の小突起が施されている。4は押し引き文が施文されている。

石器は全て埋土出土である。Fig.51-1は有茎石鏃。2～4はナイフ。5、6、8、9は側削器。7は石槍。10は石核。11は磨製石斧。

小括

本竪穴は長軸6.60m、短軸2.50mの不整六角形を呈する。炉跡は中央部にある。時期は床面出土遺物から縄文中期北筒式トコロ六類のものと考えられる。

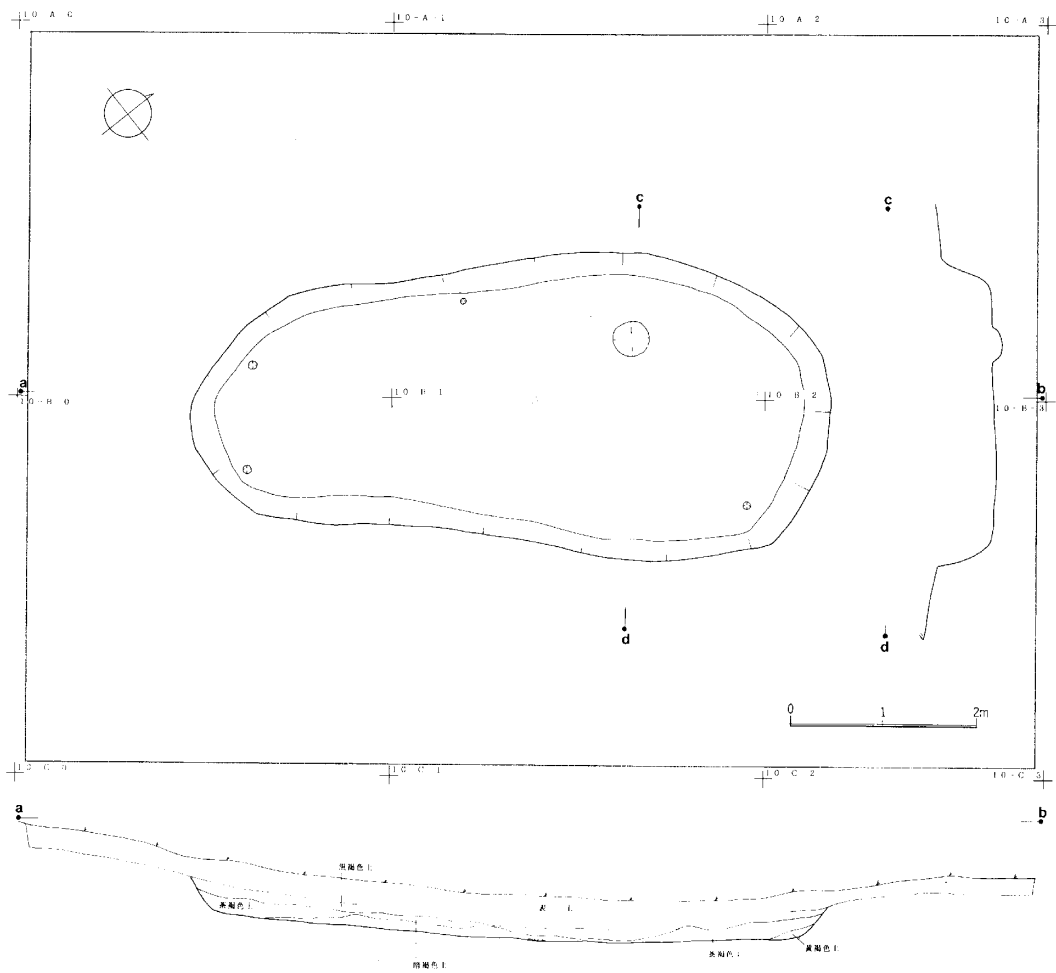


Fig. 49 10号竖穴平面图

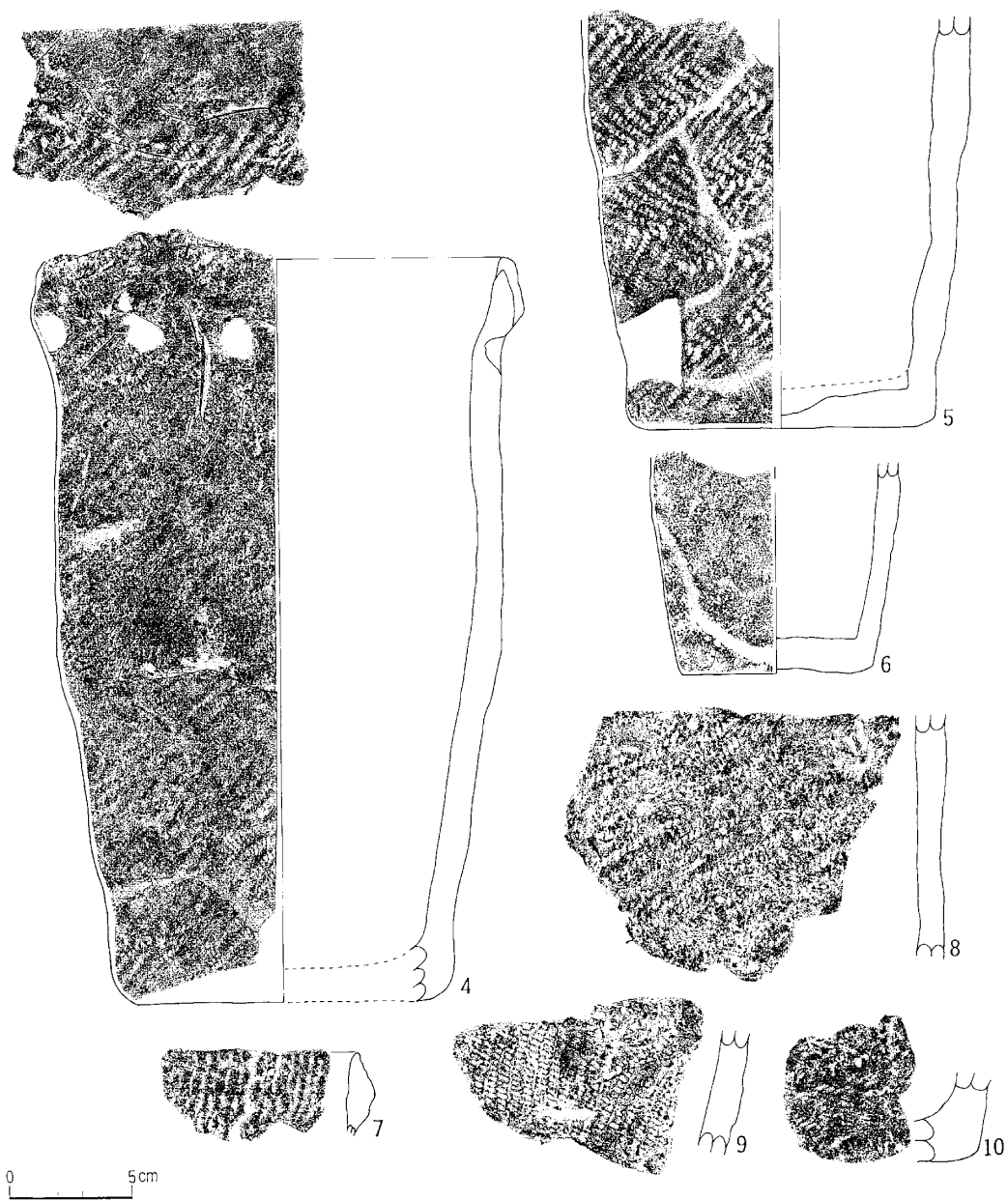


Fig. 50 10号竖穴床面(1~3)、埋土(4~7)

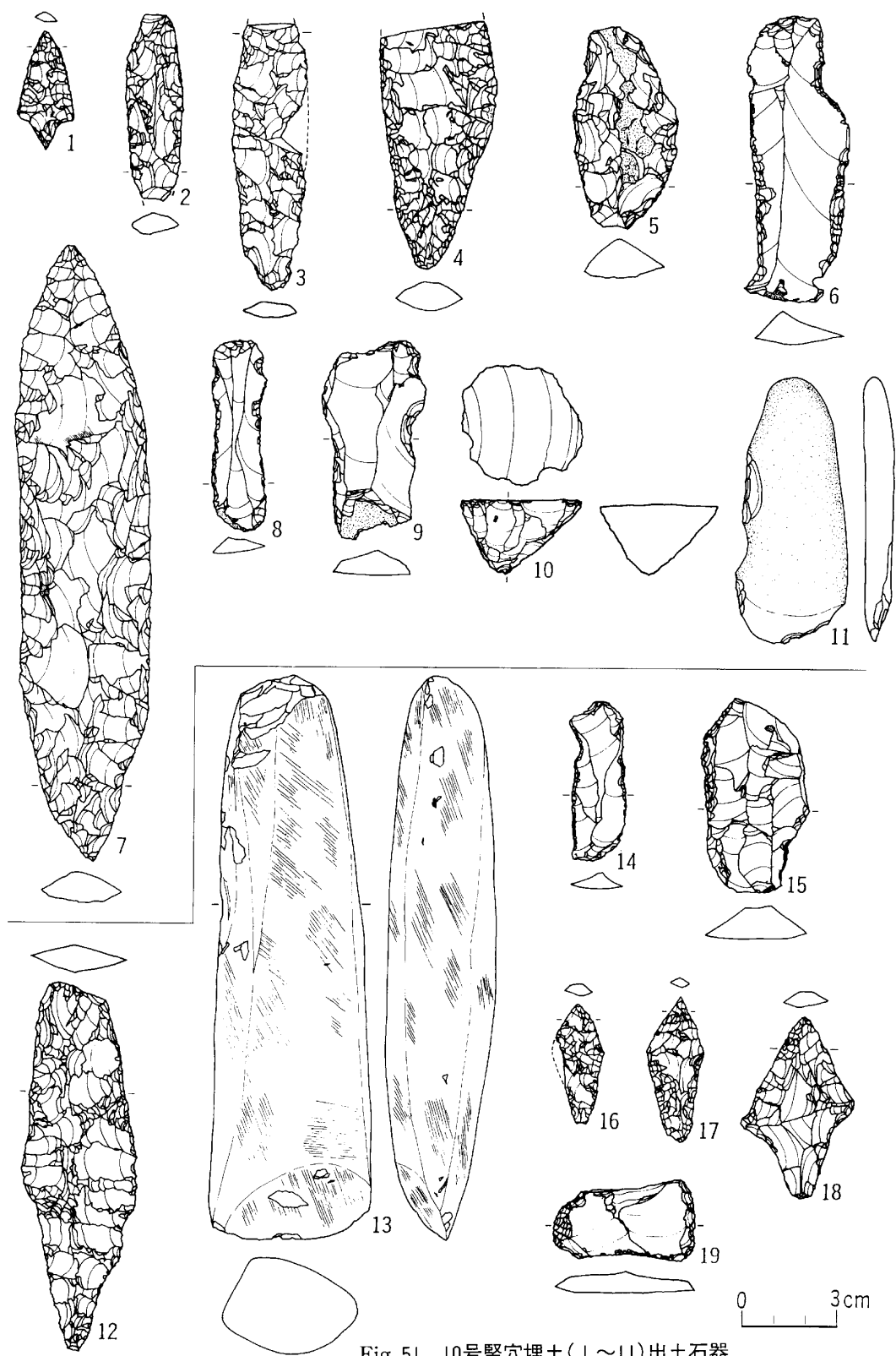


Fig. 51 10号竖穴埋土(1~11)出土石器
11号竖穴床面(13~15、19)、埋土(12、16~18)出土石器

第十二節 11号 竪穴

調査の経過・遺構

本竪穴は10号竪穴の南側約8mに位置する。1991年11月に試掘を行っているが調査前の形状は径3m、深度20cmでかろうじて窪みと判断される程度であった。調査は試掘の際のトレンチを土層観察ベルトとし、1本設定した。表土層、暗褐色土層まで掘り下げた段階で遺構の輪郭が確認された。Fig.52-4、5の土器はこの段階で出土している。

竪穴の規模は径4m程の不整形を呈する（Fig.52）。壁高は確認面から西壁20cm、東壁43cmを計る。床面は平坦で開き気味に立ち上がる。床面からは3個の柱穴が検出された。いずれも壁際に位置し、東壁側のもは径40cm、深さ5cmである。立上がりが浅く柱穴ではないかもしれない。西壁のもは壁柱穴である。小さい方が径4cm、深さ5cm、やや大きいものが径10cm、深さ6cmである。

遺物

本竪穴の遺物はすべて埋土から出土している。1～3は胎土に繊維を含む北筒式トコロ六類である。1は口縁部の断面が切り出し形を呈し山形突起がみられる。肥厚帯には押し引きが施文されている。2は口縁部がやや外反する。4、5は口縁部は無文で2、3個の突起が配置されている。突起の頂部には刺突が加えられている。また、口縁部には上下2線の区画を設けその間に2本単位の斜線で三角形の区画を設け、中央では下側から斜めに2条から4条の刺突列を施している。体部と口縁部の隆帯は沈線で区画されている。器形は隆帯をもつことから晩期後半の浅鉢形に関連すると考えられる。特に沈線と刺突を直線的に配置することによって構成されている点が特色である。網走市南8条出土資料及び松下亘氏が「北海道の土器にみられる突瘤文について」物質文化5号中に記載している8類土器の資料と文様構成上で類似している。^{注1)}

石器は埋土からFig.54-1～3の石皿が出土している。

小括

本竪穴は長軸4m程の不整形を呈する。この遺跡では9号竪穴が同様な形態を呈している。やはり炉跡は見当たらない。床面からの出土遺物がないため時期は不明であるがFig.52-1、2の土器は床面近くから出土しており北筒式トコロ六類頃のものと思われる。

注1) 大沼忠春氏のご教示による。

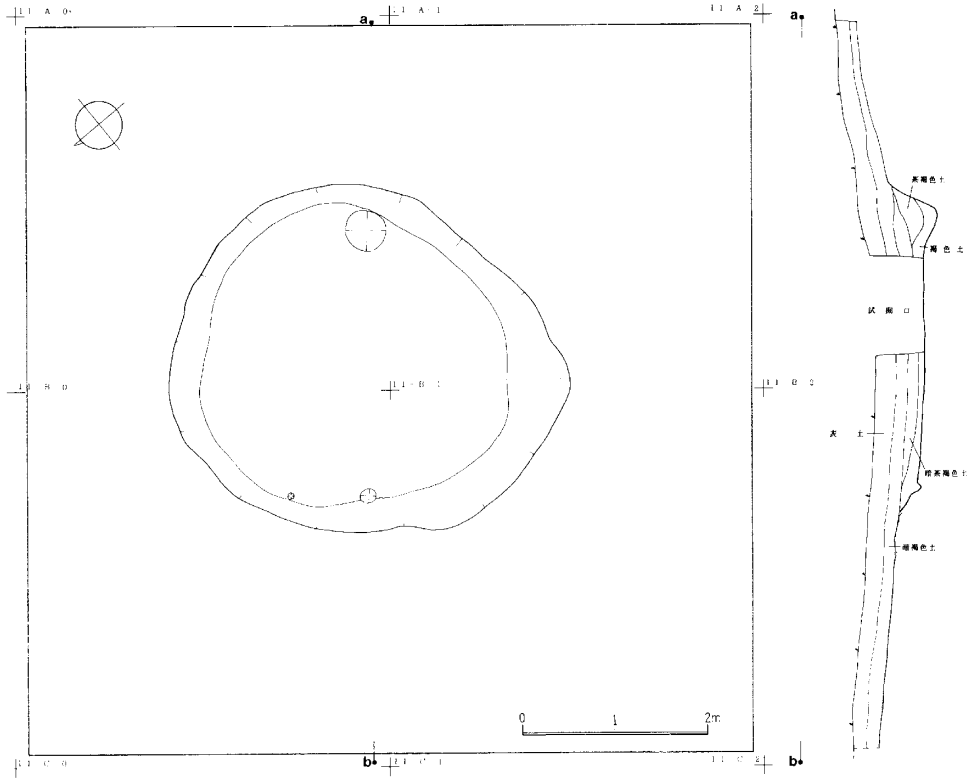


Fig.52 11号竖穴平面图

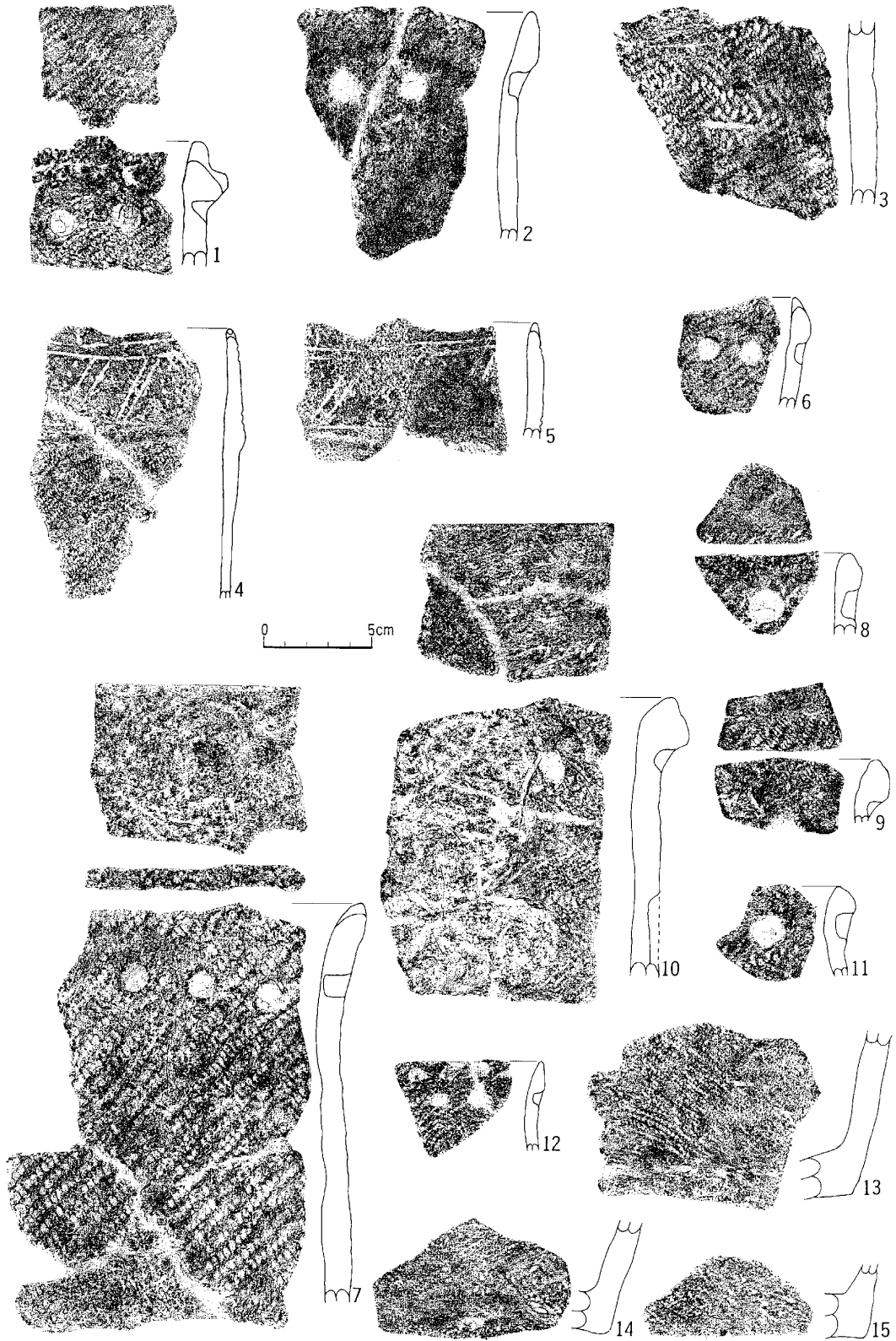


Fig. 53 11号竖穴埋土(1~5)、12号竖穴床面(6~15)
出土土器

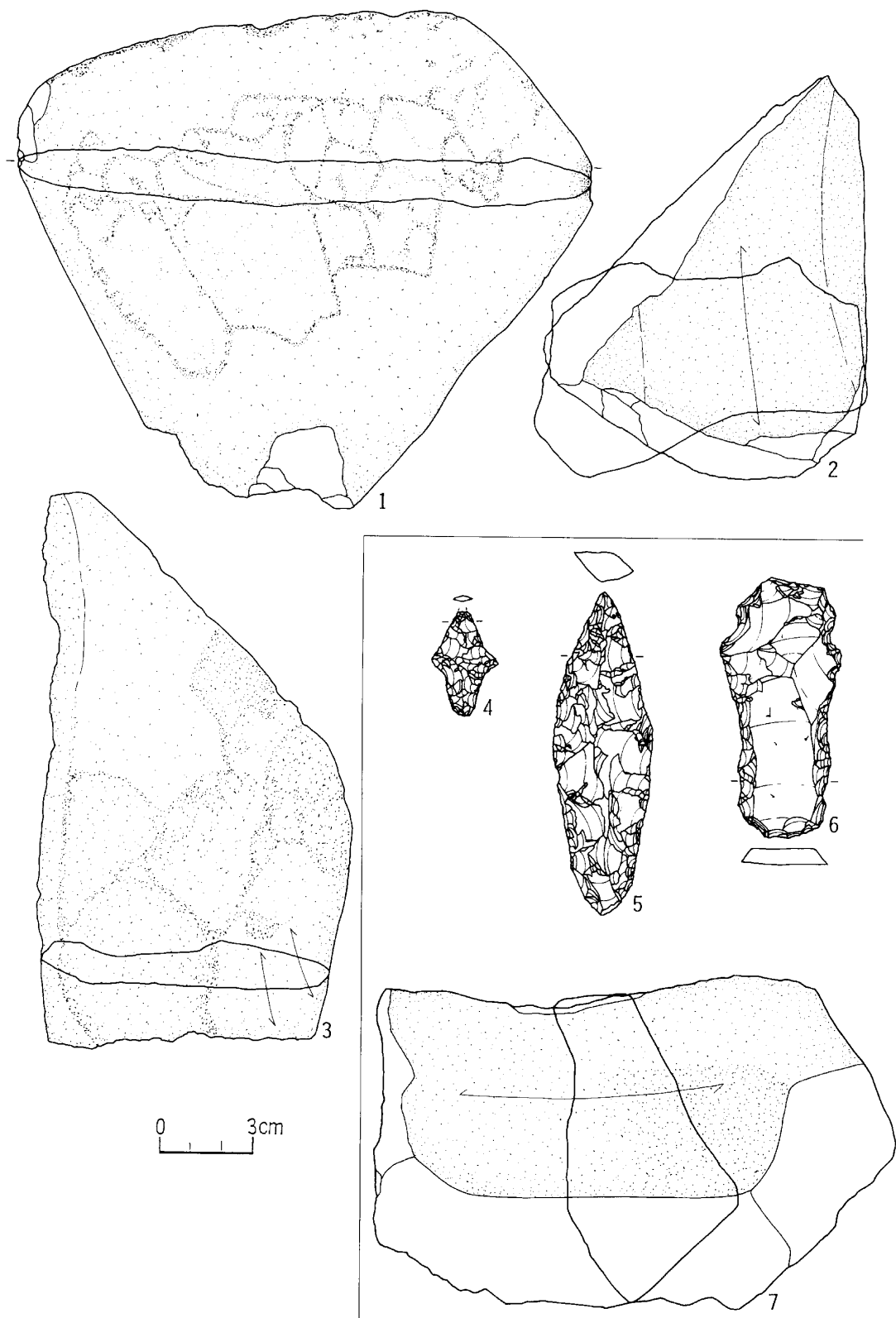


Fig. 54 11号竖穴埋土(1~3)、12号竖穴床面(4~7)出土石器

第十三節 12号 竪穴

調査の経過

本竪穴の後背地は標高16～19m程の小高い面が西側に向かって伸びている。この面から北側にかけてはきわめて緩く傾斜している。この周辺には大小12軒の竪穴を確認することができる。本竪穴は小高い面の直下に位置している。標高は15m程で40cm離れて10号竪穴がある。1991年11月に試掘を行っているが調査前の形状は径7m程の楕円形を呈している。窪みは浅く約30cmである。試掘トレンチは幅1mで東西に設置した。試掘では東壁、西壁を検出した。床面出土遺物から縄文中期北筒式トコロ六類の竪穴と判断した。

今年度の調査は試掘トレンチの一面を土層観察ベルトとして残し、各グリットを遺構確認面である2層の暗褐色土まで掘り下げた。この段階で傾斜面にある南壁は容易にその輪郭をつかむことができた。北側は壁の低さが低く、床面上5cmのところどころで地山の黄褐色ロームの立上りを確認することができた。床面には1基の皿状の落ちこみが認められる。トコロ六類の土器も出土し、上部の焼土粒は竪穴床面までひろがっているところから本竪穴に伴うのであろう。

遺 構

本竪穴は南壁がやや丸みを呈するものの形態は東西に長い菱形を呈している。(Fig.46、P 1. VIII-1) 規模は長軸7.60m、短軸4.85mを計る。壁はほぼ垂直に立上り、高さは南壁が40cm、北壁が20cmを計る。床面は東側から西側に向かってかなり傾斜している。明確に炉跡と断定するものは認められない。柱穴と考えられるものは径約35～40cm、深さ18cmのものが竪穴中央部付近で三角形に配置されているが、床面の傾斜がきつく炉跡が無いことから住居とするには疑問が残る。主柱穴の周囲には径28cm、深さ10cm、径20cm、深さ5cmの支柱穴がある。また、雨が降ると水はけが悪く、床面に溜った4cm程の雨水が地下まで浸透するのに5日間程費やされている。

遺 物

竪穴の床面からはFig.53-6～15の土器が出土している。すべて胎土に繊維を含んだ北筒式トコロ六類であろう。

6～9、11～12は口縁部に肥厚帯がみられず円形文が施文されているもので、6、7には山形突起がみられ、7は口縁部がゆるく外反する。10は表面の大半が剥落しているため詳しく観

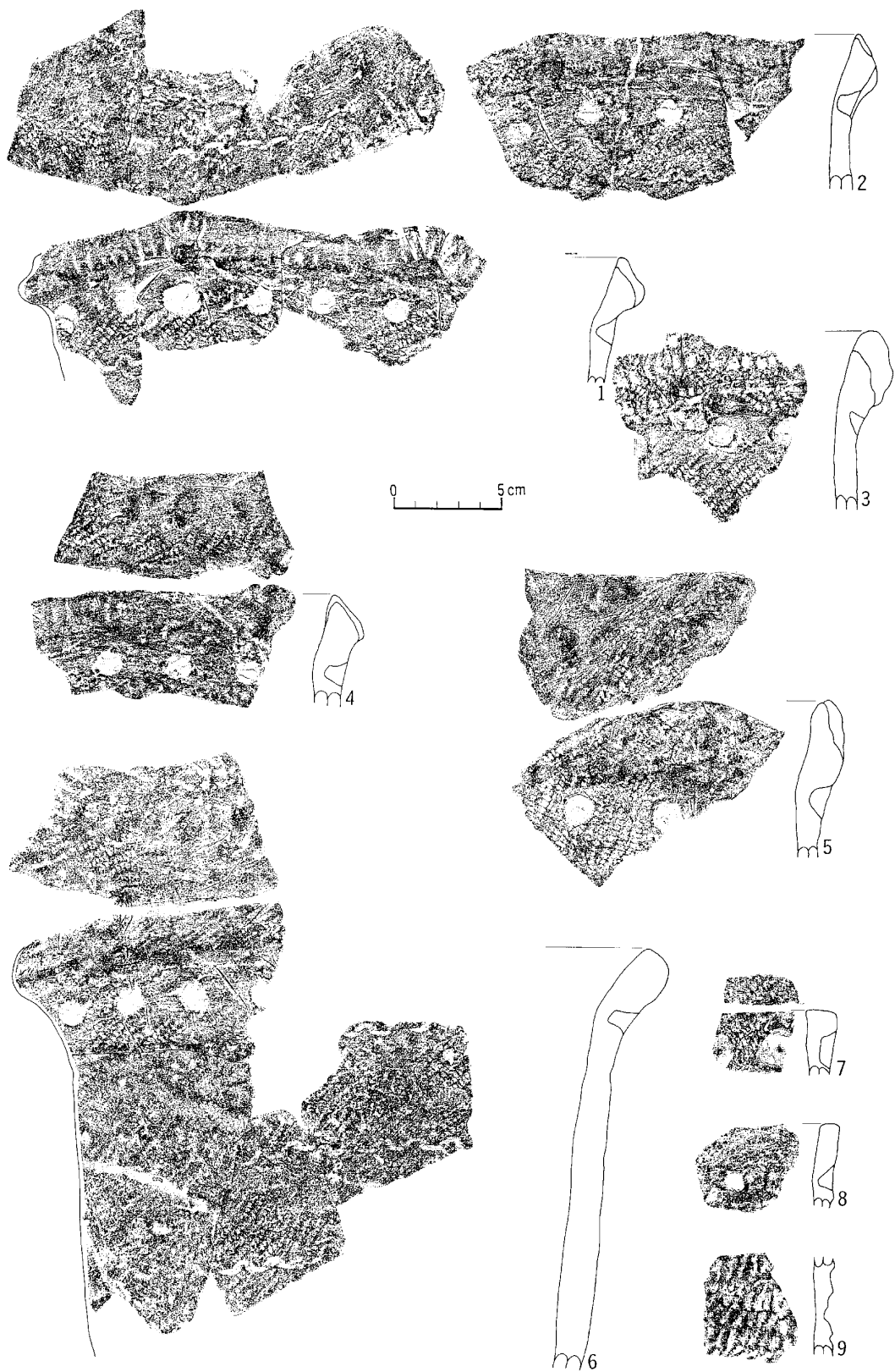


Fig. 55 12号竖穴埋土(1~9)出土土器

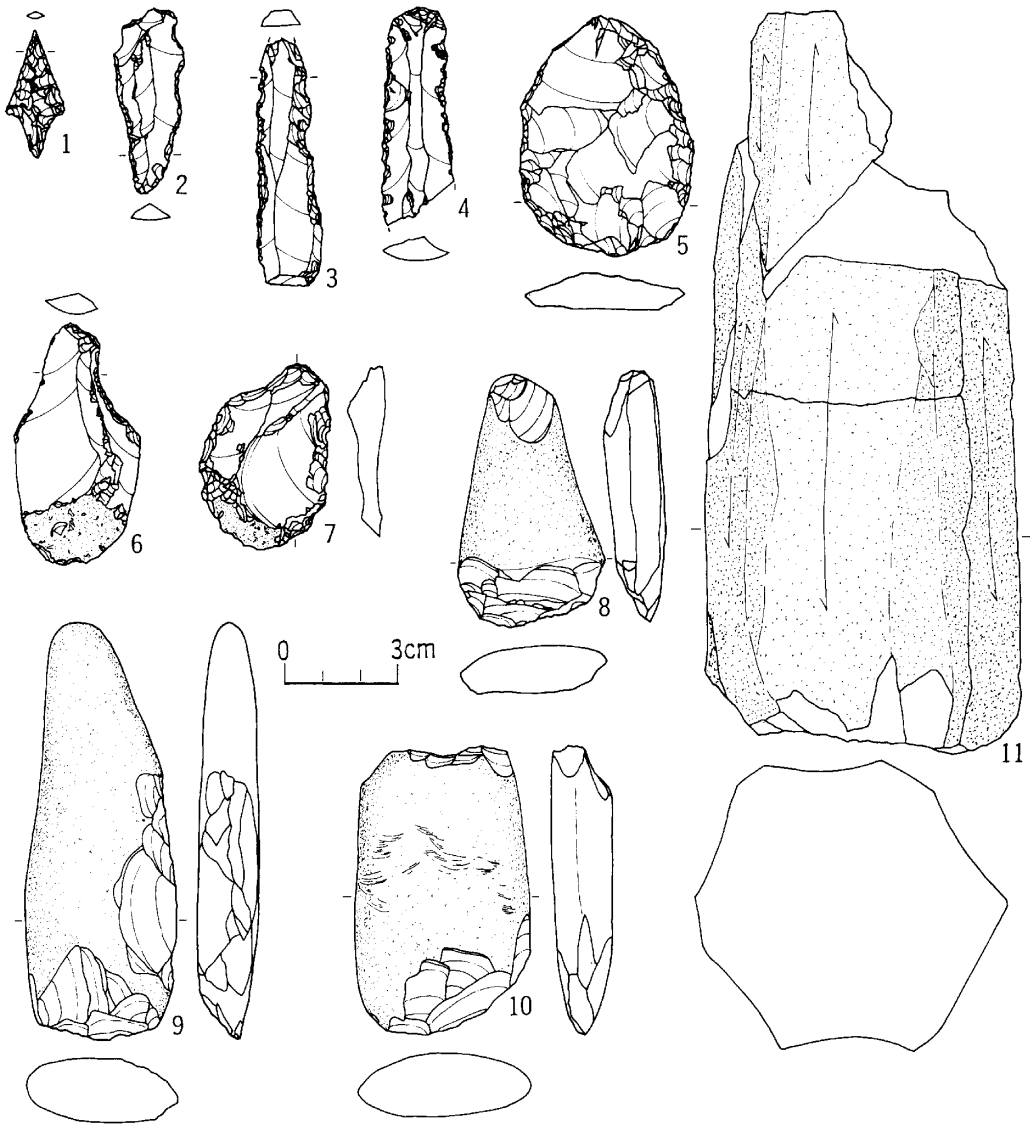


Fig.56 12号竪穴埋土(1~11)出土石器

察できないが口縁に隆起帯があり、山形突起の下部は肥厚している。12は口縁部がゆるく外反し、2列の円形文が施文されている。上段の円形文は突きが浅い。13~15は底部であるが、はりだしの底部ではない。

埋土からはFig.55-1~9の土器が出土している。1~5は口縁に幅の狭い隆帯があり押し引き文が施され、断面は三角形を呈する。口縁下の円形文はやや下方から突き刺している。1は内部に結節が施されている。6~8は口縁部断面が四角形を呈する。6は口縁が外反し胴部に結節が二条施されている。9は五段の押し引き文が施されている。1~9は胎土に繊維を含む北筒式トコロ六類であろう。

石器はFig.54-4~7が出土している。4は有基石鏃。5は石槍。6は側削器。7は石皿で

ある。

石器は他に埋土からFig.56-1～11が出土している。1は有茎石鏃。2～4は石刃の両側縁を加工したもの。5は側削器。6、7は原礫面が見られ側面の一部を加工している。8～10は石斧。11は砥石である。

小 括

本竪穴は長軸7.60m、短軸4.85mで東西に長い菱形を呈している。床面に炉跡が認められず、形態も本地域で発見されている縄文中期の竪穴と異なり、住居と断定するには疑問が残る。

竪穴の時期は北筒式トコロ六類に比定されると思われるが、Fig.53-6～15に示した床面出土土器は口縁部の肥厚帯が認められず、断面は切り出し形を呈していない。

Fig.55-1～6に示した埋土出土の土器は巾の狭い肥厚帯をもち押し引き、円形文、山形文のある典型的なトコロ六類であり、床面出土土器とは差が認められる。

文 献

藤本 強 1980年 「モコト貝塚表面採集の土器」 東京大学文学部

第十四節 埋 甕

調査の経過・遺構

埋甕は本史跡の中でもっとも高い標高15~19mの小高い面にある。1991年11月の試掘調査で、近接する豎穴に1本のトレンチを設定した際に偶然発見した。表土を剝土し、2層の暗褐色土を除去する段階で口縁部が確認された。おそらく単独で埋納されたのであろう (Fig.57)。

今年度の調査は2層の暗褐色土を剝土し、地山の黄褐色ローム面まで掘り下げの輪郭をつかんだ。掘り込み面は2層の暗褐色土層中である。

埋甕は長軸1.40m、短軸1.20mの楕円形のピット中に口縁部を南側に向けて納められている。(P 1, VIII-2) 壁は北側が垂直に立上がるのに対し、南側はわずかに傾斜する。壁高は概ね60cmである。床面は平坦で土器の底部は密着している。

遺 物

遺物は埋甕1点だけである。Fig.58-1、P 1, XVIII-2がこの土器である。器高は37cm。口縁部の径は32cm。胴部は大きく張出す壺型の土器である。底部は完全に平底になっていない。丸底から平底に移行する段階のものであろう。口縁部は小波状を呈し、頂部から2cm程の縦の隆帯が6個付けられている。焼成も良い。この土器は縄文晩期後葉のヌサマイ式に比定されると思われる。

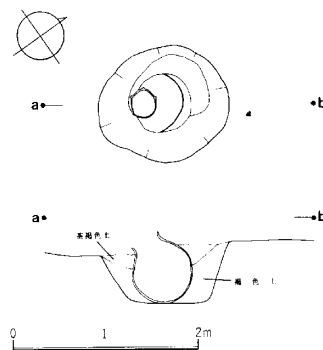


Fig.57 埋甕出土状況

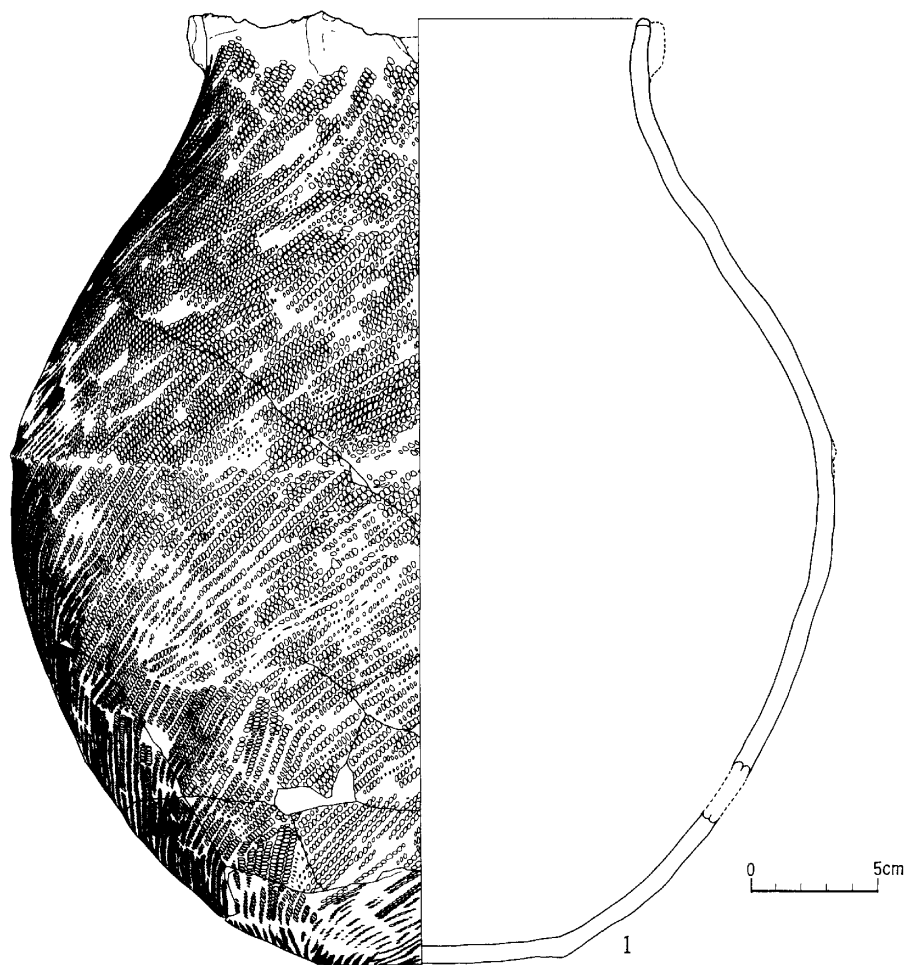


Fig.58 埋甕

第Ⅲ章 ま と め

1

本史跡は岐阜台地と称する海成中位段丘の最西端に位置している。サロマ湖畔までは約300mの距離である。ここからはサロマ湖とオホーツク海を遮断する砂州も望むことができる。今年度発掘調査を行った史跡常呂遺跡は平成2年4月に追加指定を受けた地域で、面積は120,288㎡に及んでいる。現況はカシワ、ナラを主体とする山林で保安林として管理されている。この中には大小138軒の竪穴が埋りきらず窪んだ状態で確認されている。

調査を行った竪穴で時期が明らかになったのは擦文期で、1号、2号、3号、4号、5号の5軒。続縄文期が6号、7号の2軒。縄文期が8号、10号、12号の3軒。9号、11号は床面出土遺物がないため断定はできないが埋土の土器、周辺グリッドの土器から縄文中期の可能性がある。他にチャシ状の溝、縄文晩期の埋甕を調査した。

2

擦文期の竪穴は台地の西側に入り込む小沢の両側に存在している。沢に向かって北側部では1号、2号、3号を含めて29軒の竪穴がある。一方、南側部には4号、5号を含めて12軒の竪穴と溝状の遺構がある。調査の対象に1号から5号を選定した理由は、これらの住居が台地の端部周辺にあるところから、復元した場合は目につき易い。特に1号は規模が大きいためシンボリックな建物として意義づけられるという考えによる。

調査した5軒の竪穴からは床面出土の土器があり詳細な時期を確認することができた。1号は大型2点、中型1点、小型2点、高杯3点、紡錘車1点が出土している。出土位置はカマドの周辺でなく反対側の西側に集中している点が注目される。土器は藤本編年h期、宇田川編年後期に比定される。2号からは大型1点、紡錘車1点、集石が出土している。藤本編年h期、宇田川編年後期に比定される。3号はカマドを持たない点が注目される。擦文期遺構でカマドを持たない住居は釧路市東釧路遺跡、同STV遺跡、釧路村昆布森遺跡などの遺跡で確認されているが、擦文期における例は未だ少ないようである。常呂町ではライトコロ川口遺跡14号、常呂川河口遺跡4号、5号、6号、11号、13号、SH1号、SH2号、SH3号がある。ライトコロ川口遺跡14号は一辺約4mで集落群から離れた位置にある。常呂川河口遺跡では4号、SH1号、SH2号、SH3号が一辺約1.5～3m程の規模で、カマドを持つ竪穴と比して方向が不規則である。これに対しやや規模が大きい5号、6号、11号、13号はカマドを持つ竪穴と方向が一致している。各竪穴の時期は出土土器が少ないため早断できないが、SH3号にみられる藤本編年h～i期、宇田川編年後期の頃と考えられる。擦文期の集落の中でカマドを持つ竪穴と持たない

竪穴は時期を異にするのか、それとも同時に存在するのだろうか。今後、常呂川河口遺跡の調査報告書の作成に向け、本3号竪穴を含め検討したいと考えている。3号竪穴からはFig.14-3に示す外耳（吊耳）を持つ土器が出土している。この土器は藤本編年h期、宇田川編年後期に比定される。土器に外耳を持つ例は栄浦第一遺跡、開成遺跡、十勝太若月遺跡等がある。栄浦第一、開成遺跡は壺型で藤本編年h期（後期）に比定され十勝太若月遺跡の土器は甕形で前期に比定されている。外耳を持つ土器は少なく機能、用途は不明であるが、道東部における壺型土器とそれに付けられる外耳は藤本編年h～i期頃から見られる可能性が高く、カマドを持たない竪穴の出現とあわせ今後着目しなければならない点と考える。4号竪穴の床面からは排水溝と水溜めと思われる小ピットが検出された。溝は長さ3.50cm、深さ65cmで屋外のV字溝に連結されている。この竪穴では雨天時の地形形状の性質を考え排水溝と考えたがはたしてこれが有効に機能されたのか疑問も残る。柏木川13遺跡など各地で発見されている同種遺構の地形形状の特性を考慮し検討する必要がある。4号竪穴からは藤本編年h期、宇田川編年後期に比定される鉢型土器が出土している。土器の施文方法を見ると小沢を挟んだ2号竪穴出土の土器と比較すると、山形刻文の施文は直線ではなく曲線的という類似性が見られる。5号竪穴は高杯1点が出土している。藤本編年h期～i期、宇田川編年後期に比定されよう。6号竪穴埋土からは擦文早期と考えられる土器が出土している。この土器は13条の横走る沈線文が施されている。本地域ではこの時期のものは少なく古式の土器では栄浦第二遺跡8号、11号、12号の資料がある程度である。さらに現在調査を実施している常呂川河口遺跡、栄浦第二遺跡からも出土している。北大式そして擦文前半期の資料が増えており、本地域におけるこの時期の様相も次第に明らかになりつつある。

3

続縄文期の竪穴は6号、7号を調査した。この2軒は本遺跡の最北端に位置している。規模は6号は長軸7.70m、短軸6.20mの楕円形を呈し舌状の張出しを有する。炉跡は中央部でなく張出し部の前面に位置している。時期は宇津内II b式である。7号竪穴は長軸7.70m、短軸7.30mの不整円形を呈する。時期は後北C 2・D式である。

4

縄文期で時期が明らかなのは8号、10号、12号の3軒である。8号については1991年11月の試掘調査では続縄文期のものと判断していたが、今年度の調査で縄文期であることが明らかになった。3軒の竪穴からは北筒式トコロ六類が出土している。しかし、12号はこの時期に見かけない不整菱形を呈し、床面はかなり傾斜している。また、炉跡も認められない点から住居で

はないかもしれない。9号、11号は本地域で見られる竪穴の形態と異なる不整形であり、規模も小さい。やはり炉跡は認められず、住居とするよりは他の目的を持った遺構なのかもしれない。

今回報告していないが1991年11月に試掘を行った時には縄文前期の押型文、シュブノツナイ式、縄文晩期ヌサマイ式の土器が認められ、少なくともこの遺跡は縄文前期までさかのぼることができそうである。

参考文献

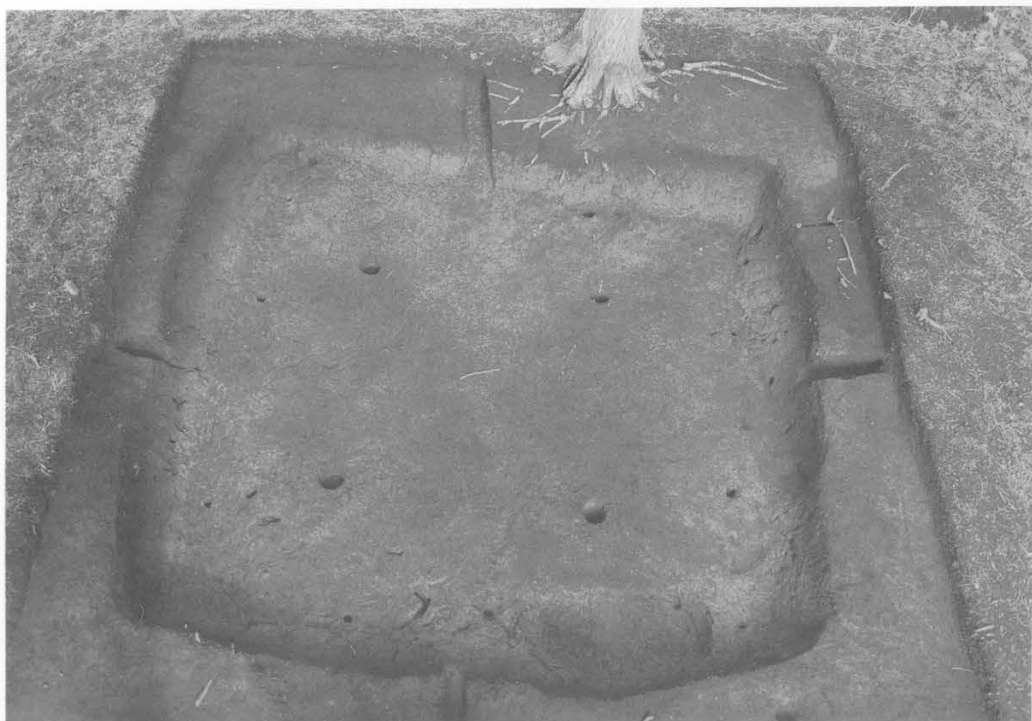
- | | | | | |
|------|-------|-------------------|------------|----------|
| 藤本 強 | 1972年 | 「常呂川下流域の擦文土器について」 | 『常呂』 | 東京大学文学部 |
| 佐藤達夫 | 1972年 | 「擦文土器の変遷について」 | 同 上 | |
| 宇田川洋 | 1980年 | 「擦文文化」 | 『北海道考古学講座』 | みやま書房 |
| 同 上 | 1980年 | 『アイヌ考古学』 | | 教育社 |
| 武田 修 | 1989年 | T K 73遺跡発掘調査概要報告書 | | 常呂町教育委員会 |

圖

版



1. 1号竖穴



2. 2号竖穴



1. 3号竖穴



2. 3号竖穴遺物出土狀況



1. 4号竖穴



2. 4号竖穴排水溝



1. 5号竖穴



2. 溝状遺構 2



1. 6号竖穴



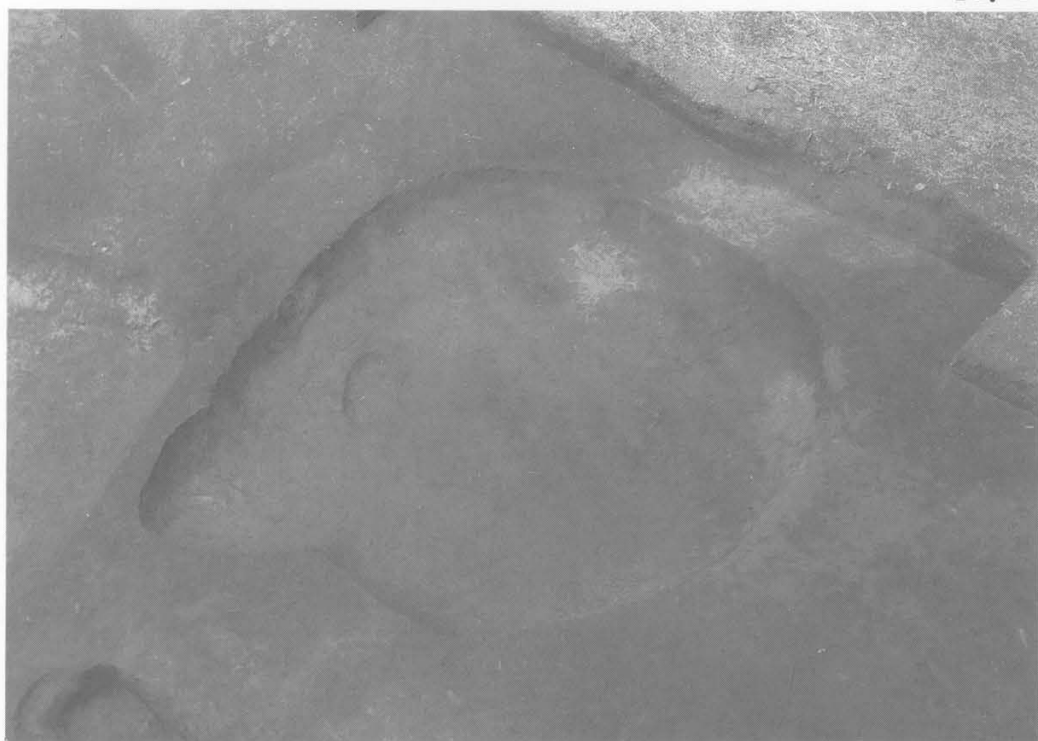
2. 7号竖穴



1. 発掘区土器出土状況



2. 8号豎穴



1. 9号竖穴



2. 10号竖穴



1. 12号竖穴



2. 埋甕



1. 1号床面出土土器



2. 1号床面出土土器



3. 1号床面出土土器



1. 1号(埋土)出土土器



2. 1号床面出土土器



3. 1号床面(カマド内)出土土器



4. 1号床面出土土器



5. 1号埋土出土土器



1. 1号埋土出土土器



4. 1号埋土出土土器



2. 1号埋土出土土器



5. 1号埋土出土土器



3. 1号埋土出土土器



1. 1号埋土出土土器



2. 1号埋土出土土器



3. 1号埋土出土土器



4. 2号床面出土土器



1. 2号埋土出土土器



2. 3号床面出土土器



3. 3号床面出土土器



4. 3号埋土出土土器



1. 3号床面出土土器



2. 3号埋土出土土器



3. 3号埋土出土土器



4. 3号埋土出土土器



5. 3号埋土出土土器



1. 3号埋土出土土器



2. 3号埋土出土土器



3. 4号床面出土土器



4. 4号埋土出土土器



1. 5号床面出土土器



2. 5号埋土出土土器



3. 6号埋土出土土器



4. 6号床面出土土器



5. 6号埋土出土土器



1. 7号埋土出土土器



2. 7号埋土出土土器



3. 7号床面出土土器



4. 7号埋土出土土器



5. 8号埋土出土土器



1. 7号発掘区出土土器



2. 埋甕

常呂遺跡

—史跡等活用特別事業に係る発掘調査報告書—

平成5年3月26日 印刷

平成5年3月30日 発行

発行 北海道常呂町教育委員会

印刷 (株)北海印刷